

沖縄市文化財調査報告書第二三集

心遊成苑  
動物世界

二〇〇〇年三月

沖縄市教育委員会

動物世界

## あいさつ

沖縄市教育委員会

教育長 小渡良一

このたび沖縄市文化財調査報告書第二三集「むかしばなし（動物昔話）」を発刊するにあたり、一言ごあいさつを申しあげます。

昔話は地域の風土の中で育まれ、遠い昔から先人達により代々語り継がれてきました。しかし、変化の激しい現代社会において、昔話やそれを伝えてきた方言を守り継承していくことは、次第に難しくなりつつあります。

こうしたことから本報告書では、話者の語りを忠実に収めるように配慮しました。また、沖縄各地からの移住者が多い沖縄市という地域的特色や、話者の語りの変遷といった部分にも着目した編集をこころがけました。

本報告書が、家庭や学校、ひいては生涯学習の様々な場面で広く活用され、昔話の継承に役立つことを期待いたします。

おわりに、今回の昔話調査に快くご協力下さった各字の話者ならびに関係者の皆様に対しまして、深く感謝申し上げます。

二〇〇〇年三月三十一日

## 凡 例

### 一、民話集の構成

① この民話集は、昭和五五年度から平成三年にかけて、沖縄市全字で調査聴取された民話と、わらべ歌調査、文化財調査で得た民話の中から、動物を主人公とする「動物昔話」を抽出し構成した。

② この民話集には、話者の重複や同類の話が頻出するが、内容を丁寧にみてゆくと、登場する動物の違いや、語り手自身の時間の経過の中での語りの違いも見受けられるので、貴重だと考え、あえて掲載した。

③ 平成五年度に沖縄市文化財啓発資料第二集「むかしばなし」を小学生向けに刊行したが、本年度は原資料をまとめた。

### 二、沖縄市の民話調査

① 沖縄市教育委員会では、沖縄国際大学の遠藤庄治教授に、調査の任をとっていただき、記録保存を図るため、昭和五五年の調査をかき取り、昭和六〇年と六二年度は編集事務局の調査。そして、それら

の調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で、「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、沖縄市全域を予備調査、第一次本調査、第二次本調査、補足調査、さらに、平成三年度の補足調査まで及んだ。

② この民話集は、右の調査において聴取した話をもとに事務局で編集したものである。

### 三、聴取話の翻字選定

① 「沖縄市の民話」を課題とする、平成二年度・平成三年度沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、卒業論文として提出した。

○平成二年度 旧美里地区

上門博之・山城綾子・宜保 勝

○平成三年度 旧コザ地区

香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子

その翻字話の中から、本文掲載話を選定した。これらの翻字話は、掲載話本文の分量としては、充分な分量でなかったため、翻字されていない話で、語りの良い話を選定し、事務局で追加翻字をした。

② 翻字選定では、市内で聴取した「動物昔話」の話



## 凡 例

### 一、民話集の構成

① この民話集は、昭和五五年度から平成三年にかけて、沖縄市全字で調査聴取された民話と、わらべ歌調査、文化財調査で得た民話の中から、動物を主人公とする「動物昔話」を抽出し構成した。

② この民話集には、話者の重複や同類の話が頻出するが、内容を丁寧にみてゆくと、登場する動物の違いや、語り手自身の時間の経過の中での語りの違いも見受けられるので、貴重だと考え、あえて掲載した。

③ 平成五年度に沖縄市文化財啓発資料第二集「むかしばなし」を小学生向けに刊行したが、本年度は原資料をまとめた。

### 二、沖縄市の民話調査

① 沖縄市教育委員会では、沖縄国際大学の遠藤庄治教授に、調査の任をとっていただき、記録保存を図るため、昭和五五年の調査をかかわりに、昭和六〇年と六二年度は編集事務局の調査。そして、それら

の調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、沖縄市全域を予備調査、第一次本調査、第二次本調査、補足調査、さらに、平成三年度の補足調査まで及んだ。

② この民話集は、右の調査において聴取した話をもとに事務局で編集したものである

### 三、聴取話の翻字選定

① 「沖縄市の民話」を課題とする、平成二年度・平成三年度沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、卒業論文として提出した。

○平成二年度 田美里地区

上門博之・山城綾子・宜保 勝

○平成三年度 旧コザ地区

香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子

その翻字話の中から、本文掲載話を選定した。これらの翻字話は、掲載話本文の分量としては、十分な分量でなかったため、翻字されない話で、語りの良い話を選定し、事務局で追加翻字をした。

② 翻字選定では、市内で聴取した「動物昔話」の話

型を掲載するよう留意した。

③ 話者の語りを忠実に、文字にしたため、読みづらい点もあろうかと思いますが、あえて、語り手の抑揚のある話が再現できるようにつとめた。

ただし、口癖や場つなぎの「あのう」「このう」等は省いた。

④ 段落の設定及び、句読点の扱いは可能なかぎり話者の語りに即するように心掛けたが、語りに区切りがない場合は、翻字者の判断で、適宜句読点を打ち、話の展開にそって段落を設定した。

⑤ 語りの中の会話部分は、その始め部分で改行し、会話を示す「」を用いた。

#### 四、本文の整備

① テープに収録された話者の話を語りのままに文字化した。綴り返しが多かったり、話の内容が前後したり、言葉の脱落によってストーリーが理解しにくくなっている場合や、話者の語りが明らかに誤っている場合は、その部分を整理し、「」で言葉を補った。

② 方言は、漢字、仮名まじり文とし、漢字の初出の

ところ、及び、同じ漢字でも音声の違うところにふり仮名をつけた。

③ 共通語と方言が著しく混在している話については、方言の語りのあとで、「」に訳文を入れた。

④ 方言で頭切れの場合は、対訳で「」し、言葉を補った。

⑤ 話の途中で、話者が言葉の意味を説明している箇所は「」した。

#### 五、本文について

① 方言の語りについては、上段に方言の翻字、下段に共通語訳として二段組とし、共通語のものについては一段組とした。

② 話の初めに題名、字名、話者名及び生年月日、出身地を記した。字名は調査時話者が所属していた行政区を記した。

話の後ろに、聴取年月日と調査者名、翻字者名を記し、収録テープのNOと収録面を記した。

③ 話者については、調査員が過去に調査し、記録しているため、話者の氏名、生年月日が不明なものもある。

## 六、本文の掲載順序

- ① 分類ごとに並べた。
- ② 同話型の話の配列は沖縄市の北側から字ごとに配列した。
- ③ 同一話者の同一話については、聴取年月日順に配列した。

## 七、注記について

- ① 地名、地域独特な意味を持つ語句、民俗語彙、注記が必要と思われる箇所については、掲載話の後ろにできるだけ注記した。

## 八、資料整理

沖縄国際大学口承文芸研究会

宜保勝・上門博之・山城綾子・香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子・山内智子・辺土名初美

原稿作成及び編集

辺土名初美・仲本朝彦・宮城利旭・比嘉清和・宮城昭美・嘉陽律子・赤嶺ゆかり

むかしばなし(動物昔話)

題字 吉浜増起

あいさつ

沖縄市教育委員会 教育長 小渡 良一

1

凡 例

2

本文目次

6

本 文

11

調査日誌と調査協力者

147

参考文献

154

おわりに

155

# 目次

## 1 蝙蝠の双心

1	登川 仲宗根盛雄	11
2	山里 稲嶺 盛英	12

## 2 蠅と雀

1	古謝 金城 眞良	13
---	----------	----

## 3 十二支由来

1	登川 仲宗根盛雄	14
2	知花 鳥袋 タケ	17
3	古謝 金城 眞良	19
4	泡瀬第一 普久原 幸	20
5	中の町 比嘉 貞信	22
6	中の町 町田 宗勇	25
7	諸見里 宮島 眞良	27
8	山里 稲嶺 盛英	27
9	山里 伊佐 安弘	28

## 4 兎と亀

1	登川 平田 盛永	29
---	----------	----

## 5 猿蟹合戦

1	古謝 金城 眞良	30
---	----------	----

## 6 逃げ遅れた蟹

1	泡瀬第一 普久原 幸	31
---	------------	----

## 7 猿の生肝

1	知花 鳥袋 盛保	32
---	----------	----

2	吉原 松岡 俊吉	35
---	----------	----

3	泡瀬第一 普久原 幸	37
---	------------	----

## 8 蛙と牛

1	登川 仲宗根蒲助	41
---	----------	----

## 9 雲雀と生き水

1 宮 里 上根 ウサ……………42

## 10 雀孝行

1 池 原 幸島 マツ……………44  
 2 池 原 盛島 五郎……………46  
 3 池 原 与那嶺朝英……………48  
 4 池 原 又吉 松八……………49  
 5 登 川 平田 盛永……………49  
 6 登 川 仲宗根トミ……………51  
 7 登 川 高良 カマ……………52  
 8 登 川 仲宗根チル……………53  
 9 登 川 仲宗根蒲助……………54  
 10 登 川 平田 嗣光……………55  
 11 登 川 仲宗根盛雄……………56  
 12 登 川 平田 フミ……………57  
 13 知 花 島袋 タケ……………57  
 14 知 花 榮野比トヨ……………60  
 15 宮 里 上根 ウサ……………61  
 16 宮 里 上根 ウサ……………63

17 宮 里 上根 ウサ……………65  
 18 古 謝 島袋 義堅……………67  
 19 古 謝 島袋 義堅……………68  
 20 大 里 永山 ウシ……………69  
 21 高 原 島袋 カメ……………71  
 22 高 原 島袋 ヨシ……………73  
 23 比 屋 根 城間 文子……………74  
 24 越 来 仲宗根初子……………76  
 25 中 央 金城 初子……………78  
 26 嘉 間 良 安次嶺ツル……………79  
 27 住 吉 座間味マカト……………80  
 28 住 吉 徳里 静……………81  
 29 安 慶 田 神里マカト……………82  
 30 安 慶 田 仲村葉シズ……………84  
 31 室 川 佐久田千代……………85  
 32 中 の 町 比嘉 貞信……………86  
 33 中 の 町 石川 富子……………88  
 34 中 の 町 町田 宗勇……………90  
 35 中 の 町 新崎カマド……………91  
 36 園 田 喜友名 春……………92  
 37 諸 見 里 宮島 真良……………93



13 年に何回  
15 山 里 伊佐 安弘……………133

1 知 花 宮里 秀栄……………135  
2 南 桃 原 山内 盛福……………136

14 猿の赤尻由来

1 高 原 長峯 シズ……………137

15 蛙由来

1 高 原 鳥袋 シズ……………138  
2 高 原 鳥袋 シズ……………139

16 猫の名の由来

1 高 原 長峯 シズ……………140

17 もの言う蛙

1 泡瀬第一 普久原 幸……………141

18 おろかなロバ

1 泡瀬第一 普久原 幸……………143

19 酒の始まり

1 山 内 内田 清栄……………144

20 牛に化けた古い蟲

1 古 謝 金城 眞良……………145



# 1 蝙蝠こうもりの双心ふたごころ

□

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

鳥類と獣が「どれどれは、誰の味方である」といって、勢力争いやつたから、そこに蝙蝠というものが仲介に出て、「獣の方が、勢力が強い時には、一匹でも勝つ方がいいから」と言つて、

「私は毛も生えているし、子どもを育てるお乳もあるから、私はあなたがたの味方だから一緒にしてくれ」と頼んだら、

「ああ、そうだ。一人でも多ければ、多いほど勢力はあるから、あなたを自分の味方にしてやろう」と言つた。また、そのうちに鳥の方が勢力が強くなったから、

「これではいけない」

と言つて、また鳥の方に、

「私はあなたがたと一緒に飛ぶことができるから、あなたがたの味方だから一緒にしてくれ」と言つたらまた、鳥の方も、

「こちらが、勢力が強くなるから一緒にしてあげよう」と言つた。

今度は、蝙蝠はいつも勢力の強い所の味方になっていたから、それで〔鳥と獣〕の両方から、

「これは、私の味方であった」と言えば、

「これは、私のもんだつた」

と言つて、

「いつもこれは嘘ばかりついているから、これはもう独り者にしてしまえ」といつて仲間はずれにした。

「あんたは入り用ないから、一人自分の行きたい所に行け」

と言われたから、蝙蝠は行き所がなくなつて、とうとう夜だけしか出られなくなつたという。そつて昼はいつも寝て、夜だけ出るといふのが蝙蝠になつたという、そういうふうな話。学校で教えていたよ。

昭和六〇年八月二日 辺土名初美・仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T 12 A 14

②

山里 稲嶺盛英（明治四三年二月一〇日生）山里

〔蝙蝠は〕哺乳類ですね。それに羽があつて飛ぶでしょ。それも、いへば、どつちに付くかという問題さあね。哺乳類に付くか、鳥、飛ぶ鳥の味方になるか。それが、両方の争いになつた場合に、蝙蝠は賢いから、勝ちそうなところに常に引つ付けていたとかいふ話。

また、鳥が勝ちそうになつたら、鳥についてねえ、

「私は羽があるから鳥であるのに」

また、哺乳類が勝ちそうになつたら、

「私は、ちゃんと子どもも産むしね哺乳類であるから」

と言つて。あつち行つたりこつち行つたりしたい話。そういう話はある。

平成三年八月一七日 新垣良子・奥那謙昭聴取 石川小百合翻字 T 97 A 7

2 蠅と雀

①

古謝 金城真良（明治四〇年七月一四日生） 美里

蠅と倉の中を歩くクララー（雀）という鳥が談判してね、王様の前で最初に蠅が文句を言ったらしい。「あのクララーというものは、王様の家を踏んで歩くから、王様に対して失礼になる」と。するとクララーは、

「私は上から飛ぶので、何も関係しないが、蠅というのは、御飯にも付くし、踏むんではないですか」と言う（王様はとても怒って）、蠅を始末することにした。すると、

「許して下さい」

と蠅はこうして手をすり合せたんだって。今でも蠅が手をすり合わせるのは、

「許して下さい」

というお願いなんだって。

「私は、王様のご飯も踏むからね、今まで、踏んだことは悪いから許して下さい」と、こうしてですね。

平成二年三月二日 奥座範秋聴取 宜保勝翻字 T 64 A 2

## 3 十二支由来

①

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

国の始まりよ、国の始まり、うん。国の始まりに、神様が、「動物は誰が一番最初に番付するか」と、「年号は誰からもつていくか」というような意味で、やったそうですよ。だから、そうやったら、第一、神様が、

「こういうこと、布令ふれいがあるから、みんな集まれ」

と言って、やったら、この話を一番最初は誰にやったかといったら、虎に話したそう。虎に。

「あなたは勢力も強いから、第一に番付は誰からやるかと付けてゆくから、みんな集めてくれ」と頼んだそうですね。頼んだから、

「ああ、そうですか」

と、この頼み聞くものが、側で聞いたのが鼠、神様と一緒に虎と話しているもの。そうやったから、あの鼠は、

「これは番付は虎の方に相談したが、何んだ、牛は大きいから、これは何か利用して、牛は一番にしてあげよう」と言ってるね、あんし（そうして）、鼠は牛小屋に行つて、牛に、

「おい、牛よ、動物の番付があるから、あんた分らないから、明日はすぐ、早く神様の前に行くものが一番なるから、行こうではないか」

と言つたそうですよ。だから、牛も、

「ああ、そうか、そんなら行こう」

と言つて、鼠も一緒に行つたんでい。行つたら、鼠は小さいから、牛とついて行つたら、ちょっと小さくて一緒に行かれないからといって、牛の角にすがつてよ、牛は先頭に行つて神様の前に一番先なつて行つたから、牛は先なつたと思つたが、鼠は牛の角から一番先に降りて一番前になつてしまつた。

そうしたから神様は、

「誰が一番か」

と言ったら、

「私が一番来て、牛は二番である」

と。(鼠が) そう言ったから、だー、牛はもう、先はやられたから、やもえないからよ、

「じゃあ、あんたは一番にしよう」

と。な、牛は二番だから、牛は二番にしようよ。

今度は虎は相談したが、もう、ゆっくり来たから、あれは三番になった。そうやったから、あの番付が終わって、牛、虎とまた卯<sup>う</sup>といって、こうしてもう、みんな並んで来たから、そういうふうにして、一番最後に来たのが猪<sup>いの</sup>だからよ、猪<sup>いの</sup>はなぜ、

「自分はいつでも、駆けても早いから、ゆっくり行っても一番先になろう」

と言って、

「もう一寝してから行っても大丈夫」

と言って、あれは寝過<sup>い</sup>ごしてしまったから、「ウウーヌ ニンジュンネーシ (豚が寝るみたいにして)」というのが言葉に残った。人がもう、トウルバヤー (ぼんやり者) になったら、「ヤナヒヤー、ウウーヌ ニンジュンネーシ (いやな奴、豚が寝るみたいにして)」と言う。だから豚は一番後になったと。

そういうふうにして、鼠は一番になったが、それを聞いていたのが猫。猫が、

「(鼠は) 自分の家でいつも一緒に育っていても、人と一緒に育って、(同じ) 家族であるのに、牛は連れて、私には言わないで、私は番に入れないから、貴様の奴は、いつまでも喰い殺してやろう」

と言うたのが、猫の祟<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>といって、鼠はもう一番猫が恐くなったと。そういうふうで、猫はもう鼠を食い物にした裏切り者。だから鼠は悪賢<sup>あくけん</sup>いって、また、「クービヌミーワ エンチュドー (壁の中は鼠だよ)」というのも、昔の人が、なんだ

か秘密会議したら、「クロービヌミール エンチュードー（壁の中は鼠だよ）」という言葉は、聞き手はエンチュ（鼠）という（意味で、鼠）は悪賢いと。

そういうふうにして、番付が付いたというが、それを類に障ったのが虎であるよ。

「神様は私と相談したが、誰が、こういうふうによつてくれたかというのを考えても分からないが、どうせ、鼠がやったんでしよう」

と言うて、神様は、

「あんたと相談したが、あんたは後になって、もう、やむをえない」

と。だから、一日、一日の子、牛、虎は、まあ仕方ないから、これは神様の言葉が、

「誰も鼠買はできないからもう、牛は二番来ているから、牛は二番ではあるが、相談をしたのは虎だから、旧は、正月は、あんたから付けよう」

と言うて、正月はあのう、旧暦でやったら一月は虎の月。だが、新（新暦）になったら牛の月が正月になっている。だから、番付は神様のやったのは狂いはないわけ。みんな公平にやつてある。ま、神様の言葉が嘘になったら、一番来たものも嘘になるから、子はもう、先来たからやむおえん。これが一番、子は、それで、日付の一番は、子から起こつて、何でも子、牛、虎は先。だが、月になったら虎が一番になる。だが、牛は新暦になったから、牛は新暦の正月は牛の月。だから、何の月かと問うたら、日本は如月とか、睦月とか、弥生とか付けていくんでしよう。これが沖繩では月は、旧の一月は虎の月。新暦で言うたら牛だよ。こういうふうには番付はなっている。そういう意味で子、牛、虎の番付はこういうふうには付けられたという。なぜ子は一番に付けたかと言えば、やっぱしこれから、始まっているって。

この話は、昔から易をしている人から聞いた。あれはこんなもんに詳しいんですよ。こちらで易を知っている人は、ずっと昔、自分たちからはもう分からないがね、百五十ぐらいなる人だが、あの人、そういう話をやっていたと、番付けの話を。そういうふうで、この易をやっているが、これは昔、沖繩の昔の番付けの話、こういうふうになっていたよという話をやっていたと。易者が言ったんですよ。

②

十二支えよ、イチムシぬうりする調びやてーるふーじてー。誰お一番、誰お二番、誰お三番でいち、くれー、上々ぬ人ぬ、王様ぬどうやたがやーなり、とにかく調びやーがてー、一番、二番決みらりーんちよー、くぬー動物どー、あんさーに、

「早くなー皆うまんかい並びよー、並びよー」

し、並びやくとうてー、なー牛えー、牛えーまぎーやしえー、まぎー順に並らばちえーるばーどうやがやー。なーちやーしがやらーとにかく、うりから始めーよー、並びちえーしえーてー、牛、虎、かんにーかんにーし並びんじよーたんでい。寅、卯、辰、巳、申、酉、戌、亥んーちやしえーやー。とーあんし、並びんじよーでいるむん。

くぬ鼠おーじこー、頭たくまーやるばー。鼠おーたくまーやるばー。あんしやーにー、

「とー私ねーなり、今どーな、いーばーどー」

知花 島袋タケ（大正七年九月一日生）知花

十二支はよ、動物の順番を決める調べだつたようだね。誰は一番、誰は二番、誰は三番といって、これは、上々の人が、王様がだつたのかねえ、とにかく調べる人がね、一番、二番を決めようといつてね、この動物をよ、そうして、

「早く、みんなここに並びなさい、並びなさい」

といつて、並びせたからね、もう牛は大きいでしょう、大きい順に並びせたわけかねえ。もうどうしてか、とにかく、これから始めてよ、並びせたのは、牛、虎とこんなこなして並んでいたって。寅、卯、辰、巳、申、酉、戌、亥といつてでしょう。ねえ、こんなふうにならないうが。

この鼠はとっても、頭の良い、利口者だわけ。鼠は利口者だわけ。そうして、

「はい、私はもう今着きましたよ」

と言つてね、たちまち、牛の前に飛び下りてね、牛の前

んでいやーによ、ちゅーちゃん牛ぬ前んかい飛ぬじふあやーによ、牛ぬ前んかい飛ぬじふあやーに、うぬ鼠おー前けーなやーに、あんさーにどう、鼠から始まるとんでいさ。鼠おー牛ぬ背中んかい居とていよ、聞ちくどてーるばてーな。誰おー一番ないんでいち、しえーし、よー聞ちよていさーに、いじやなてい番決みーんとうなたくとう、けー飛ぬじんじやーに、うぬ牛ぬ前んじけー居ちよー。あんさーにどう、鼠から始まるとんでい、いやりーたさ。あんし、子、牛、虎、兎、辰、巳んち、あんし、決みらつとーんり。くれーよ、動物調べ、かん並ばち、あぬー、さくとうてー、あんしやたんでい。あー、あぬー鼠おーじんぶななやーにや、牛ぬ背中からけつ飛ぬじんじやーに、前んじけー居やーに、

「とー、くりからる先えーやはやー」

んでいやーに、子から起りとーんでいやりーたさ。

に飛び出して、その鼠は前になって、そうして、鼠から始まっているというよ。鼠は牛の背中に居てね、聞き込んでいたわけだね。誰が一番なるといつてやっているのを、よく聞いていて、いざというときになって、順番を決めるときになったから、飛び下りていつて、その牛の前に座ったってね。それで、「十二支は」鼠から始まっているっていわれていたよ。そうして、子、丑、寅、卯、辰、巳といつて、そうやって決められているって。これはね、動物調べということで並ばせたら、あのように並んだんだってさ。まあ、あの鼠は利口者だったからね、牛の背中から飛び降りて、牛の前に座って、

「さあ、これが一番先だねえ」

と言つて、子から始まったといわれているよ。



## ③

古謝 金城真良（明治四〇年七月一四日生）美里

ずっと昔ね、年寄りから話聞いたんだけど。

その〔十二支の〕名前付けるのは、どうしたらいいかといって王様から命令が出てね、そうしたら、一番先にこつちに來るのが、一番最初のを付けると言つてね。したら、鼠というものが牛の頭に隠れてね、その王様の前に來たときに、〔牛の〕頭の方から飛んで前に飛んだからね、先なっているんでしよう、飛んだから。だから子が一番先なつて、牛は後になつて。子、丑と。

牛は頭のこつちに瘤があるでしょう、鼠はそこに隠れておいて、王様の前行つたら、飛んで前に行つたから、それが初めになつてゐるから、子と言つて。そうやつて、子丑寅、こうして出たつて。

この、子、丑つて來た順に順々に名前付けてね。それから、だんだんだんだん名前付けてね。したら、一つは技がしてね、その仕事のうれー（分担を）技がしてあるから、そのウフドー神というのはね、誰がするかと。何相は誰が係、何相は誰が係と、みんな分配して、これ係はやつたからね。したら今度おウフドー神一つだけは人が足らなくなつてね。フル神と言つて、豚養つてゐる所はフルと言つてゐるんでしよう、昔はね。そこで、付けるものは誰もいなくなつて、

「そう、困つたなあ。人がいないから、なあ私がやろう」

と言つて、この王様が言つたもんだから、一番王様がウフドー神になつてゐる。それで、一番大将やつたもんだから、ウフドー神と言つてね、子どもなんかマブヤー落すんとうか何とかといふときは、そこで、念願して付けると。昔の話はね。

注 ①フル神・フルとは、フルとも言い、豚の飼育小屋を兼ねた便所のこと。そこには最も権威のある神様がゐると信じられており、その神様のことを言う。

②マブヤー・魂のことで、マブイともいう。人体に宿るとされる靈魂。精神をつかさどる精氣とされるため、強いショックや、長期の病氣などの際に身体から抜け出ると考えられている。魂が體から離れることを「マブイを落とす」といい、

その離れたマブイを元に戻すことを「マブイグミ」といって、フルヤで祈りをすることもある。

平成二年三月二日 奥座範秋聴取 宜保勝蘭字 T 64 A 1

④

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

会議があたんでいるいーえーさにやー。あんさーに、この、はーえーし行ちゆしが一番ないしがなー、ありやたんでい。決みーたんでい。あんぐとう、一番のー、鼠が、鼠が触りむんしーが歩ちやーに、

「イチムシ、むる集まりよー」

さーに、集またぐとう、猫んかい言やんたんでいー。自分ちやー追とーくとう。猫とう鼠とー敵やしえーやー。いつも、こうやって。あんさーに、触りむのーさくとうやー、あんし、

「うれー誰から、じーるーから先なすせーましがやー」

んちやぐとう、

「早くあまにかい着ちゆしから、ましなさやー」

んち。えどうん、牛からかんし行じやるはじどー。さくとうやー、子丑虎なとーたんでいや。うぬ牛えー自分ぬ一番でい思たくとうやー、自分ぬ角ぬ上んかい、う

会議があつたつていうんでしよう。そうして、走つて行つて一番先に着いた者が一番といつて決めたつて。もうしたから、一番は、鼠がみんなに触れ回つて、

「動物、みんな集まりなさい」

と言つて、集まつたから、猫には言わなかつたつて。いつも自分を追いかけるから。猫と鼠は敵さあね、いつも、そうだったから。そうやって、みんなに触れ回つてから、それから、

「これは誰から、どれから先にしたらいいかねえ」

と言つたから、

「早く向こうに着いた者から、先にしよう」

つて。たぶん、牛が先に行つたはずよ。だからね、子丑寅の順になつていたらしいさ。この牛は自分が一番と思つていたら、自分の角の上に、この鼠が座つていたさうだ。そうして、向こうに行つたらね、その会議室に行つ

ぬ、鼠ねずみ小居こゐちよーたんでい。あんさー、あま行あまちや  
くとうやー、うぬ会議室かいぎしつ行いじやくとうやー、しく飛とんじ  
やーに、

「あー、私わたくしねー一番」

でいたんでいー。あんさーに、うりが一番なたんでいー。

あんさーに、子こから、鼠ねずみから。子こ丑うし寅とら卯う。あんしから、

触ふりーむのーうんぐとうーししえーたんでいー、牛うしから。

あんさーま、

「早はやく行いちしゆしが一番や」

んでい。

これは例え話。だから鼠の人はみんな賢いやつしえー。

たらね、すぐに鼠が飛び降りて、

「ああ、私わたくしが一番」

って言ったって。そうして、これが一番になったって。

それで子から始まった、鼠から。十二支は。これは「鼠

が」触れて回るのを、このようにしてあつたって、牛か

ら。そうして、

「早はやく行いつた者が一番ね」

と言つて。

これは例え話。だから鼠年の人はみんな賢いさあ。

平成二年七月六日

山城綾子・崎山用彰・栗国実・通事美香聴取

宮城昭美翻字

T 83 A 5

## ⑤

あのう、いわゆる鼠が牛の背に乗ったということ  
でね、順番が終わりなつてね、それで、その恨みのため  
にしょっちゅう鼠食っているという。これはみなさん聞  
いているからね、みんなだいたい。これはね、どちらか  
という、戦後、小那覇ブーテン（舞天）先生が作った  
んじゃないかな。小那覇ブーテン先生が、あちらこちら  
でやっていたんだよね。ウコールの話と同むんやさ。ウ  
コールの話聞いたことある？

あぬー、十二支、子、丑、寅や十二ぬイチムシさー  
に作らつとーしが、うりんけー何んち猫や入ちえー  
ねーんがやーやー。人間ぬ一番近くんかい居る猫や  
入らん、人ぬ見ちん見だん竜とうか、うぬふーじーや入  
つちよーしが、一番近さんかい居る猫が入つちえー  
ねーんしえー、ひるまさっさーやー、何やがやー。うぬ  
くとうぬ話、私が聞ちやしえー、有名な嘉手納の小那  
覇ブーテン先生。くぬ人が話じや、うぬ人が真似ま  
でーしーゆーさんしが、できるだけ小那覇ブーテン先生  
が、しみそーちやる話うぬ通い、し、んじやびらやー。  
昔、くぬ十二支ぬイチムシ決みーんでいやーに、神

## 中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二十九日生）上地

いわゆる鼠が牛の背に乗って行つたということ  
でね、（十二支の）順番が終わりになつてね、それで、  
〔猫は〕その恨みのためにしょっちゅう鼠食っている  
という話、これはみなさん聞いているからね、みんなだ  
いたい（分かると思う）。これは、どちらかという、戦  
後、小那覇ブーテン（舞天）先生が作ったんじゃないか  
な。小那覇ブーテン先生が、あちらこちらでやっていた  
んだよね。香炉の話と同じものだよ。香炉の話は聞いた  
ことあるか？

あのう、十二支、子丑寅は十二の動物で作られている  
が、これに何で猫が入っていないのかねえねえ。人間の  
一番近くに居る猫が入ってなくて、人が見たこともない  
竜とか、そんなのは入っているが、一番近くに居る猫が  
入っていないのは珍しいねえ、どうしてかねえ。その話  
を私が聞いたのは、有名な嘉手納の小那覇ブーテン先生  
から。この人の話のように、真似はできないが、でき  
るだけ小那覇ブーテン先生がなされた話を、その通りにし  
てみましようね。

昔、この十二支の動物を決めるといって、神様が動物

様がイチムシぬ達集みやーに、

「とー、今からや、十二支決みーしが、いったー、はーえー勝負さーに、順番決みーくとう、皆集まり」

神様がイチムシぬあるつき集みやーに、あんさーに、皆まじゅーん並びてい、あんさーにすぐ、ちゅばちなかい、はーえーしみてーるふーじ。あんしやれー、直ぐな、牛から馬から直ぐ、わんから、わんから、な、いつべーぬはーえーやたるふーじ。

あんし、私達から考えーねー、いつべーにーさるふーじーぬ牛が、ちゃーるばーがやらいつべー早さぬ。また、私達が見ちえー、いつべー先ないぎさーぬ馬や、あんすか早こーねーんてーるふーじ。あんさーに、本当の順番のー牛が一番、虎が二番、卯、兎、牛、虎、兎、うりから辰、ハブ、巳、あんさーに、うぬ後馬やてーるふーじ。あんさー、羊(未)、猿(申)、鳥(酉)、犬(戌)、猪(亥)、うっしやかんしーやてーるふーじ。あんし、次え猫やてーるふーじ。くぬヤマシシ(猪)ぬ後じーや、猫やてーるふーじ。あんし、とー、な、丑から、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、猫ちやたるふーじ。あんし、「うっさやさやー」んでい思たくとう、くぬ鼠ぬ知恵強さぬ、あんさーに、牛ぬ

を集めて、

「さあ、今から十二支決めるが、あなたたちに競走させて順番を決めるから、みんな集まれ」

神様が動物のいるだけみんな集めて、そうして、みんな一緒に並べて、いつせいに走らせたようだ。そうしたら、牛から馬からもう、我先にと懸命に走ったようだ。そうして、私たちが考えると、とっても遅いと思わ

れる牛が、どういうわけかとっても速くて、また、私たちが見ては、とっても先になりそうなる馬は、そんなに速くなかったようだ。それで、本当の順番は牛が一番、虎が二番、兎、牛、虎、兎、それから辰、ハブの巳、そうして、その後に馬だったようだ。そうして、羊(未)、猿(申)、鳥(酉)、犬(戌)、猪(亥)、それだけこのようになったようだ。そして、次は猫だったようだ。この猪の後は猫だったようだ。そのようにもう、丑寅卯辰巳午未申酉戌亥猫といってたようだ。そうして、「これだけだね」と思っていたら、この鼠はたいへん知恵があつて、牛の角に乗っていたようだ。自分は歩かないで、牛の角に乗って、神様の前に行ったから、直ぐ角からボンと前の方に飛んだ。もう、神様はそれは見てないんだから、

角んかい乗と一てーるふーじ。自分や歩かんぐーとうー、牛ぬ角んかい乗やーなかい、神様ぬ前ちやくとう、直ぐ角ぬ前から、直ぐコンみかち前かい飛んじさぐとう。

だー、神様やうれー見ちえーねーんどうあくとう、

「一番のー、くぬ鼠」

でいやーなかい。あんしえー鼠、子丑寅。あんせー猫

や番んけー入らん。

「いやーやオミツト！」

んでい言やつたとう、なー、うれー十二んち決まとう、猫やいつべーくさみち、あんさーに、

「かんそーる鼠なかい負きていねーらん。ワジワジー

しならんくとう、子孫ん、寄し言し、遺言し、な、鼠

なかい騙さつとーくとう、合点ならんぐとう、いつ

たー子孫ぬ達、生ちみとうとうーま、後、いちぬ世ま

でいん、くぬ鼠見じーねー喰殺しよー」

んでい。あんさーに、猫が鼠喰いるくとうなたんで

いー。此りが、子丑寅ぬ始まいんでい。あんさーに猫

や入つちえーねーん。本猫猫やてーるふーじやしが、

入らんでい。鼠なかい騙さつたんでい。うぬ話から、

猫や鼠喰いんでいる事までい発展そーる話。

「一番は、この鼠だ」

と言つた。それで鼠が十二支に入った。そうしたら、猫は番に入らない。

「あんたは除外！」

と言われたから、もう、これは十二と決まっているから、猫はとつても怒つて、そうして、

「このような鼠に負けてしまった。腹立たしくてたまら

ないから、子孫に教訓して、遺言して、もう鼠に騙され

ているから、合点いかなないから、おまえたちの子孫たちが、生きている限り、後の、いつの世までも、この鼠を

見たら喰い殺しなさいよ」

と言つた。それで、猫は鼠を喰うことになつた。こ

れが十二支の始まり。それで猫は入っていない。本

当は猫が「十二支に入るはず」だったようだが、入って

ないって、鼠に騙されて。この話から、猫は鼠を喰うと

いうことまで発展しているという話だ。

注 ①小那覇ブーテン（舞天）・・・小那覇全孝。戦後、嘉手納より石川へ移住。本職は歯医者だが、小那覇ブーテン（舞天）の芸名

で寸劇、漫談などを行う。琉球芸能の達人であった。その活動は戦後の打ち沈んだ人々に笑いとユーモアで生きる希望を与え、心を慰めたとのこと。また、演出・演技指導などもこなし玄人以上の芸人だったといわれる。

②ウコイルぬ話・・・「犬の足」の話のこと。

③十二支・・・子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二の名。昔、時刻や方角、また、十干と組み合わせて年や日をあらわした。

④嘉手納・・・沖縄本島中部の西海岸に面し、那覇から北へ三三キロの地点に位置する。戦後は総面積の八五パーセントが米軍に接収され、巨大な軍事基地が建設された。

平成二年八月三日 宜保勝・宮平聰取 大川清子翻字 T 165 A 3

⑤

中の町 町田宗勇（大正六年七月二五日生）森根

犬と猫が敵であるのはどうしてかという、猫はね、眠んじやーなかい、遅りやーなかい。ある神様がね、

「今日はあの、あれを付けるから早くいらっしやい」と言っつね、

「私は足が早いからすぐ行ける」

と言っつ、あんし、眠とーてい、眠とーる間ねー、あまし、むる先なてい。さーい、あんさーくれー遅りていん、十二までいるあんていしえーや。十二支だから。十

犬と猫が敵であるのはどうしてかという、猫は眠ていて、遅れたからつて。ある神様がね、

「今日は動物の順番を付けるから早くいらっしやい」と言っつたらね、猫は、

「私は足が早いからすぐ行ける」

と言っつ、そうして、眠っていたから、眠っている間にみんなは先に行ってしまった。それで、猫は遅れて行っつてね。十二支は十二番目までしかないでしょう、十二支

二までいるあぐとう。うれー十三に行じえーるばーて。あまうてー門お閉まやーなかい入ららん。寝坊してから間に合わなかつたさ、門は閉められて。

あの、鼠とね、牛と。鼠は先なっているさーね。どうしてか、あれ分かる？。鼠は知恵があるから牛の背中に乗って行って、そこでね、門に来たらね、飛び下りて先なつて、あんしから子丑と。本当は牛が一番だったんですが、うれー、歩ちゆるえーか、うりんかい乗やーなかい、うまんじ飛んじゅしえーや。飛んじゅんーさー先ないしえー。あれー、知恵し進でーるばーて。乗さーんかいあまんじ先なてーるばーて。うっ飛んじやーんかい。

だから。これは十三番目に行ったわけね。そうしたら、向こうでは門が閉まって入れない。猫は寝坊してから間に合わなかつたさ、門は閉められて。

鼠と牛とでは、鼠が先なっているさあね。それはどうして分かるか。あれは、鼠は知恵があるから牛の背中に乗って行ってね、そうして門に来たら飛び下りて先なつたからね。それで子・丑となった。本当は牛が一番だったんですが、鼠は歩くよりは牛に乗って行って、そこで飛び降りているさあね。飛び降りたら先になるでしょう。猫は知恵で進んでいるわけね。乗して行って向こうで飛び降りて、一番先になっているわけね。

平成二年八月三日 加島三史・平田明子聴取 大川清子翻字 T162A7



㊦

諸見里

宮島真良（大正四年一月一日生）諸見里

〔十二支の順番を決めるので、動物を〕集めてくださいという意味だよ。牛が利口者<sup>きこうしや</sup>だはずよ。また、牛が一番やったですよ、初まいはね、集まるのがて。だが、その上に、耳にといったかね、どこか覚えてないがよ、鼠がおつたらしいよ。この王様の前行つたら、ジョンと飛び下りて、これが一番なつたらしいです。それで、子<sup>こ</sup>、鼠から牛に初まつたらしいですよ。初めーや、牛が一番行つたらしいよ。牛の背中に鼠が乗っておつたんじゃないですか。これ、このある王様の前に行つたら、これは飛び下りるから、鼠が一番なつた。それから、子<sup>こ</sup>から始まつて、丑という話は、ちゃんとなりますね。

平成二年八月一九日 平藏美恵子・津嘉山朝昭・平良美夏・新城真恵聰取・香村夏子翻字 T 105 A 7

㊧

山里

稲嶺盛英（明治四三年二月一〇日生）山里

本当は、牛がね、一番なることであつたらしいんだがね。これ私、大阪で聞いたんだがね。何で鼠が、干支<sup>かんし</sup>の一番になつたかいうたらね。鼠はちよつと、干支の順番を決める、言えは役所だね。役所の入り口に、鼠は牛の背中に乗つて、で、その入り口に来たら、牛からは飛んで先に入つたからね、鼠は。それで、鼠は干支の一番になつたという話聞いたんだ。言えは、干支の順番を決める役所の入り口までは鼠が牛の背中に乗つて行って、それで入り口なつたら飛んで、先入つたもんだからね、だから子、鼠が一番、牛が二番になつたというようだ。なんで虎が三番目なつたとかは、それはもう知らない。虎は分かんがね。また、なんで猫が入つてないかというのも、ちよつとこれは分かんさあねえ。

平成三年八月一七日 新垣良子・奥那嶺昭郎聰取 石川小百合翻字 T 197 A 6

この、神様かみさまからでしようね、「集まれ」という指示があつて。で、やっぱり、十二支を作らんがためだったでしようね。ちようどそのときに、いつも猫が追いつく鼠ね、これはもう、猫を恐れて、牛の背中に乗ってね、集合したらしいですよ。あの集まる場所で集合して、牛の背中からすぐ、先に飛び下りたから、「一番は」子こになっておつた。鼠は子こでしよう。それで、鼠が一番最初、牛が一番なんだ。その話を、粗あら粗あら聞きいたんです。うちはもう、お祖父さん、お祖母さんがさういう話をしよつたから、さう聞いた。

だから、十二支の中に猫入いつてないのはね、鼠が猫を怖おそがるからだね。（鼠は）牛に乗って、先に（行いつたから、十二支の初めは）子こなつたでしょ。で、それでちようど、十二支のいっばいなつておるから、猫は入いらないと。その意味で、それを憎にくんでね、今でも猫は鼠を追おい回まわらしいという話を聞きかされたんですよ。怒おこみ話わ聞いた。怒おこみを持もつておる話。

平成二年八月二日 平瀧美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137A 5

4 兎と亀

□

兎と亀とう谷底んかい、誰がが先ないらー競走さん  
でいしが。あれー亀や先なとーたんでいしが。兎え必  
じ道から、道小から降りてい行じしが、亀や、足も  
尻尾も、頭ん全部かん、くぬ中んかいちつくみやー  
に、けー流りてい、けー渡てい行じやぐとう、亀や先  
なとーたんでい。あんさくとう、

「いやーや、あんし、難しいむんやつさー」

んでいしえー、難しい、六つ、ムツカクシームン（六つ  
隠し者）、尻尾と、頭、足が四つで、六つなるわけ。あ  
んさー、その難しーむんでいしえーうりから出じとーん  
でい。

登川 平田盛水（明治四十一年六月六日生）登川

兎と亀が、誰が先に谷底に着くことができるか競走し  
たそうだ。そしたら、亀が勝ったということだがね。兎  
は必ずちやんとした道から降りて行つたらしいが、亀は  
足も尻尾も頭もみんな、このように全部甲羅の中に押し  
込んで、滑り降りて行つたので、亀が先になつていたん  
だつて。そうしたもんだから、（兎が）

「あなたは難しい者だね」

と言つた。と、いうのは、ムツカクシームン（六つ隠し  
者）、尻尾と頭と足が四つで、六つになるわけ。亀がそ  
の六つを隠したことから難しいという言葉ができたとい  
う。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T15 A16

## 5 猿蟹合戦

## ①

柿の種え猿が持ちちよーるばーてーあれー。また、握り飯え蟹め持ちちよーるばーてー。猿や理屈えー上なやーに、

「でいー、うぬ握り飯とぅ、くぬ柿の種とぅ換ら」  
 んでいちよ。換たくとぅ、柿え種たくとぅ、ないないしえーや。握り飯え、うち食でーくとぅ無らんなどーしえー。あんさくとぅ、うぬ、ないなどーしが、蟹のー登ゆーさん。うーじまでい、またさーらない。うんどーしえー、猿ぬうちゆ喰てい、青物お投ぎてい、蟹ぬ甲や、砕ちえーういし。今度お、うりが罰とぅし、栗んでいしが出じてい來に、猿が火をつくみーねー、釜ぬ中んじちよーてい破裂し、火傷し、猿ぬ。あんしん、なーやまたうぬ、白んでいしが、また、天井から落ちていちやーに、首うすてい、猿いじみていーうんぐとぅさーんでいさ。

うれし、私が一年生の時の本にあたんばー。だから、猿は理屈な者。

柿の種は猿が持っているわけさ、柿の種は。また、握り飯は蟹が持っているわけさ。猿はする賢いので、「ねえ、この握り飯と柿の種とを交換しないか」

と言つて換えた。柿は植えると実がなるでしよう。握り飯は食べてしまったのでなくなつてしまつていし。そうしたら、その柿は実をつけたのだが、蟹は木に登つて取ることができない。猿に頼むと猿は木のてっぺんまでさつきと登つて、熟したものは猿がさつきと食べてしまひ、まだ熟していない青いものは投げて、蟹の甲羅を砕いたりした。すると、猿がそのようなことをした罰として栗が出て来て、猿が火の中に栗を投げつけると、栗は窯の中ではじけて猿は火傷をした。それでも、さらに白がまた、天井から落ちて来て、首をおさえつけ猿をいじめた。そんなふうには猿を懲らしめたんだつてさ。

この話は私が一年生の時の本にのつていたので、それでこの話を知っているんだよ。だから猿はする賢い。

## 6 逃げ遅れた蟹

①

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

鼠と蟹とね、とにかく何かあったらね、誰が早く逃げるかというあれ（話）でね、蟹は自分が早くできると言うし、また鼠は

「私わががる速はやくないる（私の方が速くできる）」  
というあれで、喧嘩けんかしたはずねえ。

それでね、鼠は馬が逃げてきたから、鼠はすぐ、石の石垣の穴に入ってしまったって、この蟹かにぐわーね、穴掘るから、穴掘るまでに馬がきたから、馬に踏まれたって。だから、あれ（蟹を）鼠が見てね、

「シッターガニグワー シッターガニグワー（いい気味だ、いい気味だ）」  
って言っていた。

ああ、こんな話あったねえ、昔は。

平成五年三月五日 宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 95 B 1

## 7 猿の生肝

①

かんし、型かた小ぬ入こぬいち窟くわどーしえー食くまりーしが、型かた小ぬ入こぬいらんしえー食くまらんでいぬ話わえ聞きちえーんーだに。かんし窟くわどーんよ。まじ、窟くわむんぬんにー食くまりーしが居いがすらー、大概たいがい私親わがぢいぬちやー時代じだいまでーどーうんな海うみけー行いじやい何なにさいするばーんでーやていん、また川かわぬ蟹かにやていん、蟹かにやていん、んな其所そのところあ窟くわどーんよ。あんさーにうぬ話わえ、蟹かにえ陸りくうていん、ゆー遊ぶあそぶくとう、馬うまぬけー歩あちやーにでいる話わんあいやすしが、また別の話わん、あしえーんでいぬ。

海うみぬ、龍宮りゅうきゆうぬ王様わうさまぬ病びやう気きさらーに、  
「私わがねーな、陸りくぬイチムシぬ、生肝せいかん呉りりわる治ちいしが、誰たれがな、ちばていとうらさんな」

んでいち。だーうれー海うみぬイチムシぬ、陸りくんかい出でじーねー死しにーるすさにん。あんくとうならんしえー。ならんくとう要求ようきうはーるばーどーうやいぎさんどー。

あんすくとう、蟹かにのーないんでいらくとうなやーに、蟹かにえ陸りくからんないすくとう。行いちやーにさくとう、

知花 鳥袋盛保（明治三七年一月二六日生）知花

このように、〔蟹の背中に〕型が入って窟んでいるのは食べられるが、型のないのは食べられないという話を聞いたことはないか。こんなふうに窟んでいるよ。まず、窟んでいないのにも食べられるのがあるのかどうか。だいたい私たちの親の時代までは、海などに行ったりする場合でも、また川の蟹でもほとんどみんな窟んでいるよ。それでこの話は、蟹は陸でよく遊ぶので、馬が蟹の背の中の上を歩いたためにへこんでいるという話もあるが、また別の話もある。

海うみの、龍宮りゅうきゆうの王様わうさまが病びやう気きになられて

「私わがはもう、陸りくの動物どうぶつの生肝せいかんを食べたら治ちるのだが、だれか頑張がんぢやうって取とってきてくれなにかなあ」

と言いわれた。それというのも、海うみの動物どうぶつが陸りくに出でれば死ぬしぬでしょう。だからできないさあ。そのむつかしいことをお願いしているわけらしいよ。そうしたら、蟹かにができるということになった。蟹かには陸りくに上がることできるわけだからね。

「猿や山うとーてい、桃むとーてい喰いてーぎさくとう、

「美味さんなー」

んちやくとう、

「美味さん」

「あんさらー、私んけー食まさんなー」

でいちやくとう、

「おー」

んち、猿ぬ蟹んけー、桃お投げてい呉たくとう、

「陸ぬ桃お、あんし苦さる。ぬーが海ぬ桃お、美味さぬや、くつたとの話やあらんどー。なー、いやーが行じ

しむるむんやろー、大変な海ぬ果物んでいしえー、ぬー

やていん、あんし美味さんどー」

でいちやくとう、

「私連れてい行き」

んち。行じ、蟹ぬ背負さーに行じよーるばーやさ。あん

さくとう、だーうれー、溺くわしーねー死にーねーな

生肝おあらんくとう、背負さーに行じよーぎさん。

なーやがてい着ちゅんでいるばーに、

「いやーやなー、いえー、陸に桃ありば、さぎにあんと

う思ひてい、騙さつてい、猿命でい切りる」

んでいち、側ぬイチムシぬあびたくとう、

それで、蟹が陸に行くと、猿は山で桃をもちで食べていたから、

「おいしいねえ」

と聞くと、

「おいしい」

「そしたら、私にも食べさせてくれんか」

とお願いとすると、

「いいよ」

と、猿が蟹に桃を投げてあげたから、

「陸の桃はなんて苦いんだ。(それに比べて海の桃はおいしいくて)これとは話にもならないよ。もし、あなたが

行ってよいのならね、海の果物というものはどれをとつ

てもたいへんおいしいよ」と言ったので、(猿は、

「私を連れて行って」

と言った。蟹がおんぶして行つたわけさ。これは、もう、

(猿を)溺れさせて死んでしまったら、生肝ではなくな

るから、おんぶして行つたわけさ。

もうすぐ(龍宮に)着くというときに、

「あんたはもう、おい、陸に桃があるなら海にもあると

思つて、騙された猿の命は切れてしまふ」

と、側にいた動物が言ったので、

「ぬーんち、あん言いが」  
んでいちゃくとう、

「いやーな生肝取うらりーくとうや、いやー、今日まで  
いどう生ちちよーるな。いやー死のーるないんどー」  
でいちゃくとう、猿や巧まーまんでい、猿知恵んち、

「生肝ぬ入り用やれーや、いやー、きつさあん言れー、  
私えー持っち来たるむんぬ。私ねー、桃木なけー下ぎ  
ていや、いやー、生肝ぬ入り用やらー、あん取ていくー  
な」

んちちゃくとう、

「あんしえー、あんし」

んでいち言ちゃくとう、またあまんじえー、陸ぬイチム  
シんでーぎさどー、

「内にある肝、お外にあんとう思てい、戻てい来る蟹ん  
ちやーがないら」

んち、歌やさくとう、

「いやーぐとーる者お、嘘むにーしとう、私ねー連ち  
ちえーはやー」

んち、逃んぎたんでん、猿、ぐるはるあくとう、ひらから  
はーにるあんしけー窟どーんてい話。年寄ぬ話。

「どうして、そう言うのか」  
と聞いたら、

「あんたはもう、生肝を取られるから、あんたは今日ま  
でしか生きていないよ。あなたは死なないといけないん  
だよ」

と言ったので、猿は知恵があつて、猿知恵と言われるく  
らいなので、

「生肝が必要ならば、あんた、先にそう言えば私は持っ  
て来たのに。私の生肝は桃の木に下げてきたので生肝が  
必要なら取つて来ようか」

と言ったら、

「それならそうしてくれ」

と言った。

また、向こうに行ったら、陸の動物がというがね、

「内にある肝を外にあると思つて、戻つてくる蟹はどう  
なるのだらうか」  
と歌つたつて。

「お前のような者は、嘘をついて私を連れて来たな」  
と〔猿が〕言つて、〔蟹は〕逃げようとしても、猿は速

いので〔蟹は〕押しつぶされたから、このように〔背中  
が〕窪んでいるという話。年寄りの話。



注 ①イナムシ・・・生き物、動物の意味。

昭和六〇年一月一三日 下田博美・辺土名初美聴取 山城綾子翻字 T 22 A 10

②

吉原 松岡俊吉（大正三年一月二〇日生）宮古

王様の娘が病氣して、これを治してくれる人があつたら娘を嫁にあげましよう、布令を発したわけだなあ。村の人々みんな集まっているときに。

「私の娘に薬を持って来てくれる人に娘をあげましよう」

というような条件でね。そうしたら、もう、あつちこつちみんな東奔西走して、資料を集めて、話を聞いて、何がいいかと。

そうしたら、ある頭のいい人かなあ、これが曰く、

「この病はどういう病かというとな、やっぱり、体内の怪我だろうなあ。この病には、猿の肝を取ってきて、これを蒸してあげれば治るんだという話を聞いたから、そうしなさい」

と。そうしたら、もう、猿もおらんでしょう向こうには。あの離れ島には猿はいるんだと。

「じゃあ、誰がどうしてあそこまで行くか、その猿を取りに」

と言うわけで、そこにこの猿の肝を取るといのが、これはまあ、人間が蛸に変わったか知れんけど、その蛸が、

「私が行ってきます」

と。

「猿は私が取ってきますよう」

と。そして、その蛸が、もう、結局は人間であつたはずだよ、物の言える。そして、それが、離れ島に猿の肝を取りに行

った。

そうして、上がって行ったらねえ、ちょうど、大きな木に猿が寝ているという。

「お猿さん、ちょっとあんな、向こうの王様の所に遊びに行かんか。王様が非常にたくさん御馳走作って、みなさんにあげるというので、私と一緒に行きませんか。私の背中に乗れば、私は泳ぐことができるから、そうしなさい」というので、猿は喜んで、

「じゃあ、行きましょう」

ということ、その猿が蝸におんぶといつかねまた、背中に乗って「行った」。いよいよ、今度は島の方へたどり着くころだ。やがて着こうという時に、

「実はお猿さん、私は、王様の娘が病気で、これを治すにはどういう薬があるかというわけで、話を聞いたら、あなたの肝が一番上等だという話になって、実はあなたの肝を取るために連れて来たんだ」

と、またその猿も負けていないよ、

「ああそうでしたら、そんなら向こうで、そう言えばいいのに。どうして、今ここまで来てからそんなこと言うか」と。

「実は向こうに忘れて来たの、肝は。ああ、そりゃあ、向こうで話しておけばよかったのに、また肝心なものを忘れてきて大変だ」

と。結局また、

「じゃあ、取りに行こう」

と言って、猿をまた乗せて連れて行つたと。そつたら、蝸は、

「はい、はい」

と言って、登って行つたら、この猿は、

「このやろう、お前は私の肝を取ろうとするのか。よし、お前の肝を取ってみせる」

と、さんざん叩きつぶしてもう、クシャクシャになるまで、その蛸を叩きつぶした。そのために蛸はあんななっている。さんざん手も沢山出て、ああいうふうになつたんだよう。あんまり叩かれたために骨もなくなって、そういうふうになつて、ヤフニヤになつて、手もみんなこんなになつたと。まあ、これも面白い話さ。

平成二年三月一二日 平良真也聴取 宮城昭美翻字 T 71 B 5

③

猿ぬ話すたしが、猿ぬ。丁度、王様ぬ、

「猿ぬ生肝や、生肝取ちつち食でいんでー治ゆん」

でい言ちやくとう、うぬ猿ぬ生肝取いがんち行じやくとう、うぬ亀行らちやくとう、あまうとーてい猿小や乗しやーに、

「でいかり、いい所小んかい連れてい行か」

でい言に、連れていちやくとうや、うぬ猿小んかい、ちやがなー話さくとうや、

「いやーや、や、本当や、やー、いやー生肝取やーにや、うりすんちるやんどー」

んでいこの亀が言ちやくとう、

「あんしえーや、私ねーやー、うぬ生肝おや、私ねーあまに、木小んかいや、生肝お忘れていちよっさー」

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

猿の話をしていんだが。昔、王様がね、

「猿の生肝を取つてきて食べたら治る」

と言われたので、その猿の生肝を取りにと亀を行かせたら、向こうでは、猿を（亀の甲羅に）乗せて、

「さあ、いい所に連れて行こうね」

と言つて連れて来たんだがね、この猿に來ながら、話をしたらしいさ、

「本当はね、お前の生肝取つて（王様に上げよう）しているんだよ」

つて亀が言つたから、猿は、

「そんなこととは知らないから、私はその生肝をあそこの木に忘れてきているさあ」

そう、この猿は知恵があつたわけ。そうして、

この猿は知恵があつたわけ。あんさーに、  
「生肝あまんかい忘ていちえつきさ。また取いが行きわ  
るやさ」

と言つてね、取いが行じやくとう、あれー降りやーに、

「アーカーンベー」

しえーるばーてー、な。な。うぬ、殺さりーがち行  
ちゆんな。あんさーにさくとう、うぬ、亀や戻てい  
ちやくとう、ぬーんでいが、殺さりやーに、うぬヒバキ入  
ちやんでいんどーやーんでい話あたんたん。

この勤めを果たしてこれなかつたわけでしょう。帰て  
いちやくとう、そう言つていたとも言うしね。またね、  
蜻んかい言ちやくとうや、あんさー、蜻おまた、白ん  
かい、いちにーりやーに、骨え無んなどーん、ぬーぬん  
でいうぬ話すしえーやー。これ何から聞いたかね、  
うぬふーじーぬ話え、くぬ話小つていうのは、こんな  
のーだつたよ昔は。

「生肝忘れてきているさあ。また取りに行かないといけ  
ない」

と言つてね。取りに行つたら、猿は（亀の背中から）降  
りてから、

「アカーンベー」

を亀にしたらしいさあ。だつて殺されに行かないさあね  
え。それで、この亀は戻つて来たために、やつつけられ  
て（甲羅に）にヒビが入つてしまつたんだという話があ  
つたという。

亀は勤めを果たせなかつたわけでしょう。それで戻つ  
たためにあのようになつたとも言うしね。またね、蜻が  
言つたからね、そしたら蜻は白に入れ（搦かれた）たた  
めに骨がなくなつたというふうな話もするしね。こんな  
話何から聞いたかねえこんなたぐいの話は、こんなもの  
であつたよ昔は。

④

室川 新城安平（大正二年二月二日生）今帰仁村

猿の生肝（せいぎん）やな、これ知恵比（ちえひ）べやな。知恵比べ。

龍宮城の王様が、魚の数は何千ゆうであるが、それをみんな集めたわけ。そして知恵比べやな。海で生活しているので陸上上がるのは亀さんしかおらんさ。亀は陸で生まれて海に帰るから。で、亀さんが選ばれたわけさ。ま、知恵比べしただな。

「お前は陸に行つて猿の生肝（せいぎん）か、生きた肝臓取つてこい」

と言つたんでしうね、知恵比べ。で、この亀さん浜辺に上がつていったら、浜の側でね猿が木に上つて、青い柿を取つて食べてたわけさ。

「こんな青い柿食べんと、龍宮城行けばね、もつと熟した柿もたくさんあるから行こう」と。

「そうは言つても私は泳げないのに」

と言つたらね、

「私の背中に乗りなさい。私が連れて行くから」

言うて。

「あ、そうじゃあ、それなら乗せてくれ」

と、乗つて行つたわけさ。途中で亀さんが、

「お前、私に騙されたなあ」

「何でやー」

つて。

「お前、龍宮城に木ないのに、柿の木あつたためしなやんか。王様がや、龍宮城のお姫さんが、お前殺して肝臓取つて

「食べなかつたら病氣治らんで言うから、お前今日までの命だなあ」と言うたらなあ。猿は逆に考えたんだなあ。

「ああ、それなら、私の肝臓は柿の木に忘れてあるから、じゃあ、もう一度、逆戻りして肝臓取ってこよう」と言うて、帰っていった。この猿は木に上ってから、

「馬鹿やろう。お前さつき私騙したから、今度私にお前騙されたのだ」

青い柿で背中叩かれたという話。ま、そんなこともあったかも知らん。作り話だろうな。

平成二年二月一四日 武嶋昭子・通事美香聴取 大川清子翻字 T 173 A 9

## 8 蛙と牛

### ①

昔ぬ童話。

子や産ちやくとうどー、ありが、卵から子ぬ、生まりたくとうどー、道から歩ちゆる牛にくんひらかさていよー。さくとう、残とーる子ぬ達がどー、

「だてーんそーるむんぬ、くんひらかち死なちよーん」  
でい。あんさくとう、親やさくとう、

「くつび、あんな」

んでい。ふつくいてー、ふくらちえーしーしよー、さくとう、

「なーひん大さん」

でい。強く膨らちやくとうどー、破裂さーに、親まり死じよーていうらんやぬ話どう、童話どう聞ちやる。

登川 仲宗根蒲助（明治三四年一〇月三日生） 登川

昔の子ども話。

（蛙が）子どもを産んだから、卵から子どもが生まれたからね、道から歩いている牛に踏み潰されてしまつてよ。すると、残った子どもたちが、

「とてつもない大きなものに潰され殺されてしまつた」  
と。それで、親はどうしたかというと、

「これくらいあつたか」

と言つて、腹を膨らませ、どんどん膨らましていったからよ、そうしたら、

「もつと大きい」

と。それで、もつと大きく膨らましたからね、しまいは破裂してしまひ、親まで死んでしまつたというふうな、子ども話を聞いているんだよ。

昭和六〇年八月二六日

比嘉和男・崎原由美子・辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T1A2

## 9 雲雀と生き水

## II

① チンチマー小が神様にや、

「いやーやくぬ水飲でい若返りよー」

んでいさくとう、

「うー」

んでいあーなかい、神様が水え置ちやくとう、水え置ちやくとう、粟、唐黍飯食ていきちから、水え飲むんでいち、其処あ置ちやーに行じやくとう、ちゅーちえーハブぬ米なかい、うぬ水え浴みていねえらな。あんさーにまた神様あ、

「いやーや浴みていー」

んでい

② 「私粟、唐黍飯食むんでいいちやー、其処置ちえーた

くとう、ハブぬ浴みにとうていねーやびらんむん」

③ 「とー、馬鹿、ハブお浴みてーれー、しでい変いしがー、

いやーや人ぬうーし聞かんくとう、いやー足くんしみ

やーに、足小、小くなさやー」

んでいやーい、チンチマー、チンチンチンチンチンチン

宮里 上根ウサ（明治三一年二月五日生）与那城町

神様が雲雀にね

④ 「お前は、この水を飲んで若返りなさいよ」と若返りの水をくれたので

「はい」

「はい」

と答え、神様が水を置いたから、（雲雀は）、粟、唐黍を食べてから、水を飲もうと思つて、そこに、水を置いたまま行くと、たちまち、ハブが来て、この水で浴びてしまった。そうしたら、また、神様が

「お前は、この水で浴びたか」

と尋ねたから、

⑤ 「私は、粟、唐黍を食べようと思つて、そこに置いたら、ハブが浴びてなくなつてしまいました」

⑥ 「馬鹿だなあ、ハブが浴びてしまったなら、ハブは脱皮するが、お前は人の言うことを聞かないから、足を強く縛つて、足を小さくしてやろうな」

⑦ と言われて、雲雀はチンチンチンチンチンチンと鳴いて、

それから、チンチナーという名前が付けられたつて、雲



でい言ち、うりからどう、チンチナーンでいぬ名前なま前まへ付つち

よーん。チンチマー小こ。あんさー、ハブおまたしでい

変かゆんでい。くのーやー、ハブおしでいーる答こたどー。

注 ①チンチマー・・・方言でチンチナーとも言う。(和名:せっか)しかし、沖縄ではセッカを通称雲雀と呼んでいるので、ここで

は雲雀として語っている。

②ハブ・・・沖縄に生息する陸生毒蛇のうち、ハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。毒性は非常に強い。

③栗・・・栗のこと。または他の穀類も含むのか。

④トージミ・・・唐黍のこと。

⑤しでい変かわる・・・すでる。脱皮すること。

⑥若返りの水・・・村の神聖な井戸から、元旦の朝、初めて汲む水のことをいう。沖縄では、この水をあびると若返るといふ信仰が残っている。

雀は。そして、また、ハブは脱皮するって。

平成二年七月六日 上門博之・武嶋昭子・宮城昭美・宮里信勇聴取 山城綾子翻字 T79A7

## 10 雀孝行

## □ クラー（姉妹・アンマー）

池原 幸島マツ（明治四二年一月二五日生）

昔、ある所にあつた親孝行のお話やし。あのねえ、ゆめ姉妹やていん、親戚達やていんどー、あんそーりーや、あぬー……。

「親ぬ大病氣なてい、今な、けー亡しがーたーやくとう、早くなー見舞しーが来。」

① ンでい言ちさくとう、一人ぬ姉妹や、清ら装いし、ハイカラーし、行ちゅんでいち親ぬミーウトウイ見うーさんたんでいしが。

一人ぬ姉妹や、

「なー親ぬくとうでーむん。早くなー行じやーに、親ぬ顔あ見じゆしえーまし。私ねーかきたまかきし、ちやーぬやな着物着ちん、早くなー親ぬ顔あ行じ見じぶさんどー」

んでい、急じ行じえーるふーじ。行じやくとう、親あうつさし、

「あいな、いやー顔ぐわー見ちやるやー」  
んち、

昔、ある所にあつた親孝行のお話ですがね。同じ姉妹でも、親戚でもね、あんなことをする人はねえ……。

「親が大病して、今にも死にそうだから早く見舞いにおいで」  
と連絡すると、一人の姉妹はきれいに着飾って、ハイカラしてから行くといつて親の死に目に間に合わなかったそう。

ところがもう一人の姉妹は、

「親のことだもの、一刻も早く行って、親の顔を見た方がいい。私はどんなに見すばらしい着物であっても早く行って親の顔は見たいよう」

と急いで行つたらしい。すると親はとても喜んで、

「ああ、あなたの顔を見ることができたねえ。私はもう、今度の病氣は治すことができそうにないから、母さんの言うことを遺言だと思つて聞きなさいよ。あなたは親孝行者だから、親孝行だから」

と雀に言つた。雀は布を織つていた途中であつたんだろ

「なー私ねーなー、くぬうていぬ病気え治ゆーさんくとう、あぬー、アンマーが遺言でいしえーや、いやーんかい聞かすぐとう、聞ちくいり。な、いやーややー、親孝行者やくとう、親孝行やくとう」

「んち、うりんかい言ちさくとう。うれー認、布さーやてーんてーひー。あんさーに認掛きてい、認まーひー、親ぬ前んかい行じえーるふーじー。行じやくとう、やつばし、あぬークラーンでいしえーやー、認なような物、白い物掛きとーしえーやーひー。やくとう、あのまんまにして、あれは本当に、

「いやーや倉ぬ下なーでい、居て、米粒ね、米食でい暮らしよー」  
 「んでい親のー言ちやんでい。あん言ちやくとう、またあぬ、ハイカラーし、いつも奇麗な着物着けて来た者はなー、

「な、いやーや、親孝行あらんくとう、いやーや、清ら装いすんでいち、親ぬミーウテイん見だんぐとう、いやーやなー、川なーでいーや、流りーる川なーでいーから、虫小取てい、虫小取やーに、ちやー、うぬ生活し暮らちいきよー」

「でいち言らつたぐとう、やつばし、あれー、清ら着物着

うね。連絡がきたので、そのまま、認を掛けたまま駆けつけたので、雀の首のあたりには認をかけたように白いものがあるでしょう。そのままの姿で駆けつけてきたので、

「あなたは倉の辺りで、米粒を拾って食べて暮らしなさいねえ」

と言われたらだつて。

また、ハイカラしてきれいな着物を着た者にはね、

「あなたはきれいに着飾るといつて、親の死に目にも間に合はず親孝行じやないから、川原辺りで虫を拾って食べて生活していきなさいね」

と言われた。だから、ほら、あれは青い羽根をして奇麗でしよう。だけど、寒い日だろうと、雨の降る日だろうと木がホサツとおい茂っている川原の辺りから、歩いてチュツチュ、チュツチュして羽根をふるわせて悲しそうな顔をして、天を向いてはまたチュツチュ、チュツチュして暮らしているそうです。昔話はそれだけ知っています。

ち、青い羽根でしよう。だから、あれ着けておつても、寒い日にも、雨降りにも、やつぱし、川にね、木のすぐホサツと生えている川原な—でい—から、歩いていつて、そうして、チュツチュ、チュツチュして、羽根をこんなにこんなにして、チュツチュして、また、悲しそうな顔をして、天を向いたりして、また、こつちにチュツチュツ、チュツチュツ、チュツチュツして、あれは、あの暮らししているつて。だ、昔話はそれだけ知っています。

注 ①ハイカラ・・・おしゃれ

②総・・・総。機械りに使う紡いだ糸を巻いておく道具。

③総をかけたように白いもの・・・雀の首には白い輪があり、それをこの時の糸の跡だと言っている。

昭和五五年五月一八日 安里和子・仲松庸尚聴取 宮城昭美翻字 T4B2

## ② クラーとカンブヤー

な—で—じな親ぬ孝やて—るぐと—ん。クラーでいる鳥れやんど—、うぬ、クラーでいちよ—る。昔え米ん作てい—や—百姓や、米ぬ喰いんでいちちや—倉からん歩ち、ま—からん歩ちゆたんよ—、クラーんち。うれ—何んりちクラーやがんでいね—、やな着物着ち、あれ—

池原 盛島五郎（明治三九年二月一〇日生）池原

もう、たいそう親孝行者であつたらしい、雀という鳥がだよ、雀という。昔は百姓は米も作っていたから、米を食べるといつて、いつも倉の辺りや、いろんな所から歩いていたよ、雀は。その鳥がどうしてクラー（雀）と—のかというかね。みすばらしい着物を着て、あれは、

な一、鳥ぬ一番服装や悪さしえーや、いー。親ぬ孝しちや、な一どうくうりなやに鳥や孝行なやにや、まーからん親ぬ巢んかいちよる、くーてい行じ、親ん物くいてい腹うくしみてい。あんさーに、孝行ん子なやに、

「いやーや、とうまでいん雨ん濡でいらんきよー」  
でいる。倉ぬ下から歩ちえーくとう、クラーんりちあらんがや。

また、だーな一ちえー、カンブヤーやよー、あれーどうく、今ぬ女わらば一たーがや、化粧しちよー、な一ハイカラびかーんさーにや、あまくまんけー歩ち、むる男びかーん搜めーあんべー。化粧さーに川ぬ端からちやー浴みてい清ら支度ななくとうや、

「うれー、親ぬ孝んしやーくとう、いやー、ふいーじーいり」

んでいち、川ぬ端んじ巢や作くていやー、うまんじ生活おそーるちむえーやーるーばー。うっさるやんどー、昔ぬ話や。

注 ①カンブヤー・・・翡翠のこと。ヒスイ科の鳥。体の上面は美しいコバルト色を呈する。雀より大きく、くちばしは太く長い。水

面に突き出た棒や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水面に急降下し捕らえる。

昭和五年五月一八日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A6

鳥の中でも一番服装が悪いさあねえ。親の孝をしてね、もう、あんまりにも雀は親孝行者でね、どこにいても、親が巢にいる時には食べ物をくわえて持って行き、腹一杯食べさせていた。このように孝行の子どもであったので、

「お前は、ここで雨に濡れないようにしなさい」と言われて、倉の下で暮らしていたからクラーと言われるようになったのではないかねえ。

また、もう一つの翡翠はね、あれは、あまりにも、今の女の子たちが、化粧してね、もう、ハイカラばかりしてね、あっちこっちに行つて、男ばかりを捜しているように化粧をして、川の端でいつも浴びて、きれいな恰好していたからね、

「これは親の孝行もしないので、冷えなさい」

と、川端で巢を作つてね、そこで暮らしているという意味であるわけ。それだけなんだよ。昔の話は。

## ③ クラーとカンジュヤ

〔親が病氣〕やくとう、親あ見舞しーが来んりち、連絡んじやくとう、クラーやそーぬぎてい、

「なー、親ぬ病氣ぬんやれー」

んでいち、ふーじーし行じよーしが、また、うぬカンジュヤーんでいしえー、また、

「私ねー、清ら装いしる、着物ん着ちる行かりー」でいるふーじーしやくとう、

「いやー親不孝やくとう、なー、川端んじ、魚捕てい喰れー」

また、クラーや、クラーやまた

「いやーや親孝行者やくとう、屋敷内どう米拾てい喰り」

でいぬふーじーぬうりがあしが、あとさきがあんまり、簡単、はつきりしない。

## 池原 与那嶺朝英（明治三九年七月二〇日生）池原

〔親が病氣〕だから、親を見舞いしに来なさいと連絡がきたので、雀はびつくりして、

「もう、親が病氣なら」

と言つて、なりふりかまわずに行つたが、また、その翡翠という者は、

「私は美しく装つてから、着物もちやんと着てからしか行けない」

というふうな感じだったので

「お前は親不孝者だから、もう、川端で魚を捕つて食べなさい」

また雀には、

「お前は親孝行者だから、屋敷内で米を拾つて食べなさいね」

というふうな簡単な話があるが、話の前後があんまりはつきりしない。

注 ①カンジュヤー・・・カワセミのこと。沖縄各地の川辺に生息する留鳥で、春から夏にかけて川辺などによく見られる。水面に突

き出た棒や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水面に急降下し捕らえる。

昭和五年五月一日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A4

#### ④ クラー小

池原 又吉松八（明治三八年四月八日生）池原

きれくないでしよう、あのクラー小は。この毛は。古いでしよう、フクター（ぼろ）みたように。だから、自分はフクターはいて、親孝行やりたいという伝え話聞いているんですよ。それ、別にはあまりないです。

それから、ソーミナー小（めじろ）や、もう、家に入ったら、必ず一晩は外に、どこか、家より外に出て、一晩は向こうに泊まって、また、晩の五時後、家にかい戻てい来たるばー、ソーミナー小が入ったら。ソーミナー小はもう、あれは、あんまり良くないから、今あ家うていむる養なとーせーやーな、ソーミナーは。世変わいなやーに（今は家で飼っているでしよう、めじろは。世の中も変わってしまったから）。

昭和五五年五月一八日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A3

#### ⑤ カンジュヤーとクラー（姉妹）

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

雀と翡翠、うったー二人や女ん子姉妹だったって。うりが親の病氣さくとう、

雀と翡翠の二人は、姉妹だったって。その親が病氣になつたから、

「なー、危篤状態やくとう、早くなー、来」

「もう、危篤状態だから、早く来なさい」

んでいちさくとう、すぐ、雀え、昔ぬ布織いし、総、総は今の縦糸、うぬ総掛きとーる半ばやたんでいしが、くぬ、

と云つたから、雀はすぐに、昔の布を織るときの総ね、総は今の縦糸か、その総を掛けている途中だったそうだが、この、

「危篤状態やくとう、早くなー、来」

「危篤状態だから、早く来なさい」

んでいち、通知来くとう、すぐ、総えー、首んかい掛

といつて通知が来たから、すぐ、総を首に掛けて、急い

きやーに、そーまりー、着物ん替らんぐとう、着ちよーるままー、仕事する場合に、着ちよーるままー、親ん前んかい行じ、さくとう、あんすかまでいぬ危篤おあらんしが、

「な、いやーや、親ぬ孝ぬしじやくとう、いやーや、親ぬ孝そーくとう、雨ぬ降ていん、晴りていん、くぬ倉ぬ下なーりー、お米拾てい、食でい、暮らしよー」

んでい、お母さんがぬ、あぬ伝えさつとーるばーて。

だ、翡翠んでいせー、沖繩口しえーカンジュヤーでいやりーたん。あれー川端んかい居んよ、きれいな小鳥ですよ。それはまた、きれいに着物も替えて、化粧もして、親の前に行じえーくとう、なー、時間のー遅くなとーるばーて。あん、うりが、行けーからーなー、危篤状態、本當ぬなー危篤状態てい、

「いやーや、親不孝やくとう、でえーくとう、雨ぬ降いん、風ぬ吹きん、川ぬ水ぬみーから餌取てい、喰てい暮らしよー」

んでい、親ぬ言ちきなやーに、翡翠や、川端うてい暮らち、川から獲物お餌あ取てい喰いしが、雀え、ちやー家ぬ下なーりー、米倉とうてい昔えーあてーくとうや、

で、着物も着替えないで、着ているまま、仕事しているときに着ていたまま、親の所に行ったら、そんなにまでの危篤ではなかったが、

「もう、あんたは親孝行だから、あんたは親孝行しているから、雨が降っても、晴れても、この倉の下から、お米を拾って食べて暮らしなさいよ」

と、お母さんが言つたと、伝えられているわけ。

ほら、翡翠というのは、沖繩口ではカンジュヤーというさあね。あれは川端に居るきれいな小鳥ですよ。それはまた、きれいな着物に着替えて、化粧もしてから、親のところに行つたから、もう時間は遅くなっているわけ。これが行つたときはもう、危篤状態、本當のもう危篤状態なつていて、

「あんたは、親不孝だから、であるから、雨が降っても、風が吹いても、川の水の中から餌を取って喰って暮らしなさいよ」

と、親の言いつけだったので、翡翠は川端で暮らして、川から獲物の餌を取って喰うが、雀はいつも家の下から、米倉といて昔はあつたからね、

「その倉の下から、米や粟なんか拾って食べて暮らしなさいよ」



「うぬ倉ぬ下な一りー、米や、粟なんか、拾てい、食てい暮らしよー。」

んでい。あんさーに、あんなとーん、うぬ伝えから。クラでいしえー、今ぬ雀てー。あれー、米粟拾てい喰いしが、翡翠え、カンジュヤーんでいせー、川端うてい暮らち、魚捕てい喰いん、うれー、親ぬ遺言やるばー。

### ⑤ クラ一小とカンジュヤー

清ら装いや好かんしが、親ぬ孝やしわるないるんでい。ち、親孝行すしえークラ一小や、やいびーたんでい。カンジュヤーやまた、川端な一りー清ら着物小、水色とうか、黄色とうか混ちよーる清ら着物小着ちよーるカンジュヤーんち居いびーたんよーやー昔え。今んで一な一見ちえーんじやびらんしがてーうりん。いっぺー、清ら鳥小、あれー。カンジュヤーでい言びーたしが。うれーまた、親孝行し、やな装いそーしやかねーてー、親孝行さんたんで一私ねー、ちやー清ら着物着ち、清ら装いやましんでい言に。あんさーに、うれーな一

と言われて、そうして、そうなっているって、その伝えから。クラ一というのは、今の雀さ。あれは、米粟を拾って喰うが、翡翠は、カンジュヤーというの、川端で暮らして、魚を取って喰う。これは、親の遺言だけ。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美馳取 宜保勝翻字 T 15 A 13

### 登川 仲宗根トミ（大正二年五月五日生）登川

美しく装うのはきらいだが、親孝行をしないとイケないからといって、親孝行をするのは雀だったんだって。翡翠はまた川端辺りから、美しい着物で水色とか、黄色とか混ざっている美しい着物を着ている翡翠という鳥がいましたよね、昔は。今ではもう、見ることもなくなっしまいましたけどねえその鳥も。大変きれいな鳥ですよあれは、翡翠といっていましたね。その鳥はまた、親の孝行をして、みすばらしい恰好でいるよりはね、親孝行をしなくても私はいつも綺麗な着物を着て、美しく装っていたほうがいいと言って。それで、その翡翠は親

親ぬん突き放さつとーぐと、ちゃー、川ばたーなり、水ぬ上なーりー、清ら装いし歩ちよーしが。くぬクラー小や、親孝行やくとーうんでい言ち、ちゃー家ぬ雨垂なーりー、倉んけーある物食でい。また、人ぬ落てい、親ぬ落ちちりー食り、ないんでい、あんし、親孝行そーるたみなない、着物やな着物着ちよーてい、家ぬ内なーりー、雨垂なーりー、庭なーりー、ほーりーとーる物食でい育だかりーるぐとーうんでい言んどーでい。うぬ話や、親からどう私ねー聞ちよーぐと。

昭和五五年五月一日 大本敬子・西江美智子聴取 山内智子翻字 T1B1

## ㊦ カンジュヤーとクラー

親ぬ寝じやびたくとーうてー、親ぬ寝たくとーうてー、  
「えー、いがたー親あ寝とーくとうてー、いヤー早く  
なー行じヤーに見舞しわるやさに」  
でい言ちやくとーう、カンジュヤーが、  
「あーあー、私ねー清ら着物織ていからの親見舞する。  
清ら着物着ちからの行ちゆる」  
んり言ちや。

にも突き放されてしまったので、いつも川の側あたり、水の上あたりを、美しく装って暮らしているのだが。この雀は親孝行者であるということ、いつも家の軒下から、倉にある物を食べている。また、人間や、親のおこぼれを食べて生きていくことができるといつて。そうやって親孝行をしているために、着物ははろの着物を着ているが家の中や、軒下、庭辺りに散らばっているおこぼれを食べて、生きることができるといふことらしいよと。この話は親から私は聞いたので。

## 登川 高良カマ（明治二四年一〇月五日生） 具志川市

親が病氣になつたのでね、  
「ねえ、私たちの親は病氣して寝ているのでね、あなたも早く行って、見舞をしないといけないんじゃない」と言うのと、翡翠は、  
「ああ、私は美しい着物を織ってから親の見舞には行くつもりだよ。美しい着物を着てから行くのよ」  
と言つてね。また雀は、

また、クラヤー、

「あーあー、私ねーフクター着ちよーていん親ぬくとーしわるなくとうやー、私ねー親ぬくとすせーましーんり言ちやくとう。うれー親ぬ孝ぬ子なていやー、あんしえーくとう。カンジュヤーや親不孝な子やくとう、

「川から歩ち、魚捕てい喰よー」

また、クラヤーや親ぬ孝ぬ子やくとう、

「あまくまぬ倉な一りー糶食り、頑丈し」

でい言たんり。あんしやいびーたは。

昭和五年五月一八日

富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子

山内智子翻字

T2A3

## ④ クラヤーとコーカル

クラヤー、親ぬ病ろーていから、あんねつし、やな着物着ちん、すぐそーまりーんち、あぬ親見じーが行ちゆしが。また、コーカルでい言たんんどー。うれー、また、川端な一りーうり取てい喰てい、魚捕てい喰ていなー、

「清ら着物着ちる親見じーがん行ちゆる」

り言ちやくとう、あんさーに、

「ああ、私ははろの着物を着ていても、親のことはしないといけない。私は親のことをするほうがいい」

と言つて、雀は親孝行の子だから、そうしたんだが。翡翠は親不孝な子なので、

「川辺で魚を捕って食べなさい」

また、雀は親孝行の子もだから、

「あっちこっちの倉で糶を食べ、元気に暮らしなさい」

と言つたつて。そんな話でしたよ。

## 登川 仲宗根チル（明治三一年五月一〇日生）登川

雀は親が寝込んでいるというので、あのように汚い着物を着ていても、すぐさま、親を見に行くのだが。また赤シヨウビンといつていたよ。その鳥は、また、川の側から魚を捕って食べてねえ、

「美しい着物を着てから親を見に行く」

と言つたので、それで、

「お前は川の側で餌を取って食べなさい。また、雀は倉の

「いやーや、川端から物お取てい喰わ。また、クラーや倉ぬ下から米拾てい喰わ」

んりいちぬ話やたんりいるば一てー。

注 ①コーカール・・赤ショウビンのこと。カワセミ科に属する鳥。体色は鮮やかな赤褐色である。琉球列島の奄美大島まで分布する。

昭和五年五月一日 富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子 山内智子翻字 T2A7

## ⑨ カンジュヤーとクラー

親ぬ孝すしやかにんどー、清ら着物着ちすせーましんでい。あんしる川端んじあれー、カンジュヤー清らさたげーのー。

また、クラーやよー、クラーや、やな着物ん着ちん親ぬ孝すせーましんり。あんし、あれー、家ぬ上、家ぬ内に育ていしむんり。カンジュヤーやまたあねーあれーあらんな、反対なやーにる川端んじ育ちよーんり。

昭和五年五月一日 比嘉和男・崎原有美恵・辺土名美智代聴取 山内智子翻字 T1A1

下から米を拾って食べなさい」という話であったというんだがね。

## 登川 仲宗根蒲助（明治三四年一〇月三日生）登川

親の孝行するよりもね、美しい着物を着ているほうがいいんだと。だから、川端辺りにいる翡翠はきれいでしよう。

また雀はね、雀はほろの着物を着ていても親の孝行をするほうがいいと。それで、雀は屋根や家の内で暮らしてもいいんだと。翡翠はまた、そうではなくて、雀と反対なので川端で暮らしているんだと。

Ⅱ 雀とカンブヤー（兄弟）

登川 平田嗣光（大正六年五月五日生） 登川

私たちが小さいとき、親たちから聞いた、聞かされた話だが、ま、たぶん親たちとしては、子どもたちに、孝行のあれ「教訓」を教え込もうという意味で、話されたとは思われるが。

ある所に、雀とカンブヤー、ま、これは兄弟だという意味あいで語っておるが、まあ、この、いつかの日（ある日）に親が、急病になって、そしてもう臨終まじかになったときに、来るようにという使いを受けたが、たぶんその方（カンブヤー）は、そういう親の所へ行くんだから、と言って、着物にとらわれて、色付けしたりして、着物を作って、着けて行ったために、とうとう親の臨終に間に合わず、なつたと。

しかし、雀の方は親のことだから、もう、そのままの姿で駆けつけて行って、やっと親の死に目に合うことができたので、そのときは、その親は、死なないうちさあね、死ぬ直前に、

「お前は、本当に孝行だ。そのままでもいい、親の死に目に合うように飛んできてくれたから、非常な孝行である」と。しかし、カンブヤーの方は、親の死に目に対してでも、自分の着飾りをするから、

「もう、お前は、これからあと、川に行つて、自分で餌を拾つて、取つて食べて、生きなさい」

と。しかし、雀の方は、親孝行だから、これは、米の飯が食べられるようにということで、お米のこぼれ、糞うんちの落ちているのを与えられたために、今でもよく、糞の刈り取りや、その時期には雀が寄つてたかつて、餌を取りに雀が集まるのも、その理由だというようなことが、親孝行せよという意味あいを含めて、母たち、昔の人はそういうふうに、子どもたちに話をしておつたことになるだろうな。

注 ①カンブヤー・・・翡翠のこと。

昭和六〇年九月三〇日 辺土名初美・真栄城栄子・宮城昭美聴取 宜保勝嗣字 T 16 A 4

## Ⅱ 翡翠とクラ―（兄弟）

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

昔はよ、翡翠もクラ―〔雀〕も兄弟であつたつて。だが、親が病氣して、もう危篤なつたが、あの翡翠は、親の病氣に  
であるが、

「もう、着飾って行かないとできない」

と言つて、着飾って行くまでには、親はすでにこと切れていた。

そして、また、クラ―は、飾らないで先に行つて、着けたままの着物で駆け寄つて行つて、親のミーウトウイ〔臨終〕  
に間に合つて行つたから、

「あなたは、もう良い子だから、いつも倉の下でお米を食べて暮らしなさい」

というが、翡翠の方は、

「あなたはもう、自分のハイカラばかり知っているから、あなたはもう川端に行つて、自分で魚を取つて喰いなさい」  
と言つて、こういうふうになつたというような話はあつたんですよ。

これも、子どもの親の話なんかのそれから始まつたんですよ。昔はこんなこともあつたと、鳥と人間とのそれを掛け  
て話やつたというような、そういうもんであるし。

昭和六〇年八月二二日 辺土名初美・仲松唐尚聴取 宮城昭美翻字 T12A10

## ⑫ クラーとカンジュヤー

登川 平田フミ（明治三五年四月一〇日生） 具志川市

クラーは、倉の下から歩くから親孝行者と言いつたがねえ。また、あのカンジュヤー（翡翠）というきれいな鳥はたくさんいたよ、川に行ったら。これも今は見たことないが、たくさんいたよ川行ったら。これがチムエー（意味）は分らないがね。カンジュヤーは、あれは親不孝者だから、

「あんたは川の側から歩いて、すだき（育ち）なさいねえ」と。

この法律だようでい（この意味だそうだ）。これは聞いたよ、覚えている。

昭和五年五月一日 崎崎一郎・湧川紀子・金城あつ子・緑間直美聴取 山内智子翻字 T1A9

## ⑬ カンジュヤーとクラー小

知花 鳥袋タケ（大正七年九月一日生） 知花

うれーよー、あぬー、カンジュヤーんちよ、カンジュヤーんち、じこー清らさぬ鳥小ぬうたんよ。うれー、川端からよ、川からたつちヤーにや、魚小んでー、かん、チッコイみかさーに喰てーしーしふるカンジュヤーんでいち、尾やファイター、ファイターし、飛でい歩ちゆる鳥小がうたんよ。くれー、なー、じこー清らーてーなー。うまんでー、しぐなー赤小、青小し、なー、尾小うりし。とー、うりとう、カンジュヤーとう、く

これはね、翡翠とって、とつても美しい鳥がいたよ。あれは、川端からね、川の辺りで歩いて、魚などをついて、捕って食べたりしている翡翠とって、尾を振り振りして飛び回っている鳥がいたわけさ。これはもう赤い色や青い色をした尾をしてね、とつても美しいさあ。その翡翠とこの雀の話聞かされたわけさ、私たちは、これはね、あの雀という鳥は、たいそうな親孝行者で、ある日のこと、化粧をして、もう、どこかに出かけよう

ぬクラ一小ぬ話聞かさりーたんよー私たや。

うれーよー、クラ一小んでいる鳥えー、大変な親孝行者なてい、あんさーに、な、化粧小し、化粧小し、な、別けーな、出じーんちやたんでい。あんししやくとう、

「親や今、今死にー目にかかていねーんくとう、早くなー来よー」

さくとう、うぬクラ一小んでいしえー、あぬ白なとーる所、おや、其処までー化粧すんちやたしが、けー残さーにや、けー残さーにすぐ、「親ぬ、ミーウテイーふし見ちくーんねーならん」でいやーに、慌ててい親ぬ、うり、見じーが行じよーるばー。様子見じーがな一行ちえーんてー。あんさーにどう、あぬ首ぬくつべー白やよーい残とーきさんでいぬ話やたるばー。

カンジュヤーでいしえー、また、反対に、逆にまた、「立派小装てい行かんねーならん」

んでいち、なー上から下までい全部立派小し行じやくとう、うにととうーねー親あもーらんけーなてい、あんし、やたんでいんどー。あんさーにあれー、親不孝者でい言やらーに、

「いやーややー、冬にん寒さガタガタさーにや、川

として準備をしていたんだって。そうしたからもう、

「親はもう、今にも死にそうだから、早く来なさいね」と言われたから、この雀という鳥の首の辺りが白くなっているのは、そこまで化粧するつもりであったが、途中でやめてしまつてね、すぐ、「親の死に目に間に合わな」といけな」と言つて、慌てて親の所に様子見に行つたわけさ。それで、あの雀の首に白い部分が少し残つているとの話なんだけど。

翡翠つていうのはまた、反対に、逆にまた、

「きれいに装つて行かないといけな」

つて言つて、もう上から下までみんな立派にして行つたから、その間には親は亡くなつてしまつていたというこどらしいんだ。それでも、あれは親不孝者つて言われ

て、  
「お前はね、冬でも寒さでガタガタ震えながら、川端から歩きなさいね」

つて言われてね、あれは川からね、川端から飛び回つて

いるんだよという話があつたわけ。

雀はまた、

「お前はもう親孝行者だから、金持ちの人の家の下から歩いてね、そうして、米や麦なんか散らばつてい



な—でい—歩きよ—」

でい言らつてゐる、あれ—川からや、川端な—り—歩ち  
ちしやんでいち、話やあたるば—。

クラ—やまた、

「い—や—やな—、親孝行者やくとう、ウエ—キン人ぬ家  
ぬ下な—でい—歩ちや—にて—、あんさ—に、あぬ米  
小ん、麦小ん、ぬ—んちりと—しや—、うり拾つてい  
喰や—に育てい—くわ—や—」

んでい、親ぬ言つてい—どうよ—、クラ—小やウエ—キ  
ん人ぬ家な—でい—や、あれ—家ぬ中んかい入つちや  
んて—ん、ぬ—ん、あんくとう、何んあらんでい。あん  
さ—に、倉ぬ下な—でい—や—、あぬ米小ん、粟小ん、  
何や—く—い—や—、穀物さ—ね、

「これ食べてね、暮していきなさい」

と言われたから、こんなをやっているつて。だから、ク  
ラ—小場合は親孝行者、あぬカンジュヤ—という鳥は  
親不孝者つて。

を拾つて食べて生活していきなさいね」

つて親が言われたのでね、雀は、金持ちの人の家の辺り  
でよく見かけるでしょう。雀が家の中に入つても、何も  
災いをもたらさないつて。何でもないつて。そうして、

「倉の下の辺りには米や粟などいろんな穀物があるから、  
これを食べて暮らしていきなさい」

と言われたから、こんなをやっているつて。だから、雀  
の場合は親孝行者、あの翡翠という鳥は、親不孝者つて。

## Ⅳ クラーとカンジュヤー

クラー（雀）やいっぺー親孝行やたんでい。あぬカンジュヤーんちうふえーや、川端なけーいっぺー清らーが、青し。あれーまた親不孝者やたんでい。いっぺーハイカラんやい。あれーいっぺーハイカラやてい、な、親ぬ病氣ん見だん。

クラーやまた、なーあぬハイカラんあらん。いっぺー親孝行者なてい、あんさーに、

「いやーや、なーやー、くぬ総さーに、あぬ着物織てい着しーんちやひがー、親やなー病氣し、着物お織てー着しゆーさんくとう、此ぬ、総やていん、うりはちよーきーぬー温ふあくとう、いやーやなー、着物織ていー間に合わんぐとう、くぬ総さーはちよーき」

んち、クラーやあんしるくつさ真つ白らそんでい。あれー、総はきらつとーるばーやんでい、クラーや。

カンジュヤーでいしえー、

「いやーや、なーやー、親不孝者やくとう、いやーや、川端なーりー、寒さおーいし」

んでいち、あんさーに、あれー川端なーりーうりやんでい。

## 知花 栄野比トヨ（大正五年七月一二日生）池原

雀は、とつても親孝行だつたつて。あの翡翠といつているでしよう、川端に、とつてもきれいなのが、青い色の（鳥が）。あれはまた親不孝者だつたつて。とつてもハイカラでもあるし。それで、翡翠はとつてもハイカラだつたので、もう親が病氣でも世話もしない。

雀はまた、もうハイカラでもない。とつても親孝行者で、それで、

「あんたはもうね、この総で、あの着物を織つて着せようと思つているがね、親はもう病氣して、着物を織つて着せることができなから、この総でも掛けていたら温いから、あんたはもう、着物を織つては間に合わなから、この総を掛けておきなさい」

と言つて、雀はそれで「首は」真つ白くなつていって。あれは総を掛けていからだつて、雀は。

翡翠というのは、

「あんたはもう、親不孝者だから、あんたは川端で寒くしなさい」

と言つて、そうして、あれは川端にいるつて。

雀はねえ、昔は米倉、粟倉といつて、倉があつたから、

クラヤーやや、昔えー米倉、粟倉んち、倉ぬあてーくとう、

「いやーや倉ぬ下なーりー、米ぬ物食り、ふるいーりよー」

んでいち、あんさーに、クラヤーやよー其処んでーなーりー歩ちゆしえー、うぬたみやんでい。

四 ユム鳥小とターカンジュイ(姉妹・アンマー)

雀、クラヤー小。

「アンマー、わったーなーふどういーとーくとう、旅んでい儲きていきち、親孝行さーいー」

んでい言ち、行じやくとう、四、五日ないや、またアンマーが病気かかやーい、隣ん人ぬ達が手紙やらちやーなかい、あんさーうつとー、また姉さんぬみーんかい行ちやーい、

「アンマーや病気かかとーんでいひ、家かいはらなー、でいか、でいか家かい帰らでいか」

んちやくとう、

「あんたは倉の下から、米粒を食べて大きくなりなさい」

と言われて、それで、雀がそこら辺から歩いているのは、そのためだそうだ。

昭和六一年七月一〇日 宮里信男・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 27 A 3

宮里 上根ウサ(明治三二年二月五日生) 与那城町

雀、クラヤー小が、

「お母さん、私たちは、もう大きくなっていくから、旅に行つて儲けてきて、親孝行しようねえ」

と言つて、行つたが、四、五日すると、またお母さんが病気になつたと、隣の人たちが手紙を送つてきたので、妹は、姉さんの所に行つて、

「お母さんが病気だというから、家に行こう。さあ、さあ、家に帰ろう」

と言つたら、

「わかつた。だけど、あんな遠くに行くなら、きれいな

「えー、あがとぅーきちからー、清ら着物ん着ちー、髪ぬん立派捌ち行ちゆくとう、いやー、先なとーけー」

んでい言やーい、うつとー行ちやーに、なー、親ぬミートウインさーなかい、また、しーじやー後から来ちえーや。しちやくとう、だー、ミートウイえーしーうーはな、いやーや、親不孝ぬ子やくとうやー。うつとー人ぬ作いむじゆくい食でい、暮らしよー。いやーや、親不孝ぬ者やくとう、①クムイン端んかい行ちやー、うみしじ魚捕てい、夏ん冬ん喰ば」

いやーなかい、ちようどう、クムイン端なりー腹小や赤真つ赤小ひち、②ターカンジュイ小どう、かんさーかんさーひち、しゆく、魚捕つていくむーふあ。

雀んかいやユム鳥小んでい言うでんひやー、ハネル言葉。また、燕え、マッテラー小んでい。また、腹小や赤鳥や、ターカンジュイ。羽小んかんさーい、腹小や赤真つ赤小さーなかい、かんさーかんさーひち、魚捕ゆいんでい。

注 ①クムイ・・・自然の、あるいは人工的につくられた溜池。

規模は小さく、防火や手洗い、家畜の水浴びに利用する。ここでは川の深くなっていることを言っているのか。

②ターカンジュイ・・・翡翠のこと。

着物を着て、髪もきれいに梳いてから行くので、あんた、先に行つておきなさい」

と言われたから、妹は行つて、もう、親の死に目に会つた。

また、姉は後から来た。だけど、ほら、死に目に会えなくてね。

「あんたは、親不孝な子だから。妹は人が作る農作物を食べて暮らしなさい。あんたは、親不孝者だから、池の側に行つて、夏も冬も自分で魚を捕つて喰いなさい」と言われた。ちようど（今でも）、池の側辺りで、お腹が真つ赤になっている鳥で、ターカンジュイ小というのが、こんな、こんなして、魚捕つて食べているさあ。

雀にはユム鳥小と言うさあ、ハナレ（宮城島）の言葉では。また、燕にはマッテラーと言う。また、お腹の赤いターカンジュイという鳥は、羽をこんなして、お腹は真つ赤で、こんなこんなして魚を捕るつて。

規模は小さく、防火や手洗い、家畜の水浴びに利用する。ここでは川

16 ユム鳥小とターカンジュイ(姉妹・アンマー)

宮里 上根ウサ(明治三十一年二月五日生)与那城町

① ユム鳥小や、ハナリうてーユム鳥小んてい言しが、雀。また、マッテラーや燕や。雀んでいうしえー、クラー小、其処から飛でい歩ちゆる、ユム鳥小。クラー小や親孝行者。

ユム鳥小や親孝行、いったー池ぬクムイから遊ぶぬ、腹赤小、だーうりんかい何んでいえーが。腹赤鳩小、池ぬクムイから魚捕つてい歩ちゆる、うりんかい何んでいゆが。

ちよーどうゆぬ、カンジュエー雀やしがよ、二人雀やしがよ、アンマーやな、年ととうてい、

「私達や、二人、あぬー姉さぬん妹ん二人、旅んでい儲きてい来ととう、なーんも心配しんそーんなよー」  
んでい、二人儲きーがんでい出たととう、四、五日ないーやまた、アンマーや病気かかやーに、けー隣人ぬ、妹んかい手紙ぬ来んでー。あんさー、妹やまた姉さんにーんかい行ちゃーに、

ユム鳥は、あれは宮城鳥ではユム鳥小と言うよ、ユム鳥と言うのは雀。また、マッテラーというのは燕ね。それは燕。雀というのはクラー小、そこら辺から飛んで歩いてユム鳥のこと。雀は親孝行者。ユム鳥は親孝行、あなたたちの池のクムイで遊んでい腹の赤い鳥これには何て言うか。腹の赤い鳥、池のクムイで魚捕つて歩いてい、これには何て言うのか。

ちよーどこのカンジュエーも同じ雀だがよ、二人とも雀(姉妹)だけどね、母親がもう年ととて、

「私たちは、二人、あの姉さんも妹も、二人で、旅に出て儲けて来るから、何も心配しないで下さいよ」

とて、二人儲けに出た。また、四、五日したら、母親が病気になったから、隣の人が、妹に手紙を出していき。そうしたら、妹は姉さんの所に行つて、

「お母さんが病気というから、さあ、家に帰ろう」と言つたら、姉さんは、

「アンマーや病氣んじうんでーひや。でいか、家んか  
い帰らな。」

「でいやくとう、姉さの。」

「ん。旅んかいくれ、髪ん捌ち、化粧んひち、清  
ら着物ん着りわるやくとう、いやーや先なてい行じよ  
け。」

「んでいあーい、うぬ次女ぬクラ小や、先なてい行ち  
や、親んメントウいんひつちやん。」

「あんさーいまた、うぬ清ら姉さの、行ちゆる間、  
アンマー、亡ち居らな。とー、アンマーがや。」

「いやーや親不孝ぬ者やくとうや、いやーやクムイん  
でい魚捕てい喰よ、ターカンジュイ。いやー、ター  
カンジュイ、田んじ魚捕てい、うみしり喰よ。」

「また妹や、あぬユム鳥小や、妹やまた、  
「とー、いやーやや、人ぬ作いむじゆくい作ゆる、  
粟唐黍喰てい生ちきよ。」

「んでいあーに、うれーあぬ、うぬふーじー作くいむじゆ  
くい喰しえ、うぬ道理んでい。」

「あんさー、ターカンジュイ、ターカンジュイんでい  
言んば、うりんかい。ターカンジュイんでい言ふあ、  
うりんかえ。ターカンジュイや親不孝者。また、ク

「うん。旅するには、髪も梳いて、化粧もして、きれいな  
着物も着けないといけなから、あんたは先に行きな  
さい。」

「と言ったので、この次女の雀は先に行つて、親の死に目  
に間に合うことができた。」

ところが、この美しい姉さんが行く間には、お母さん  
は亡くなつてしまつた。それで、お母さんがね、

「お前は親不孝者だからね、池で魚を捕つて食べなさい  
よ、ターカンジュイ。ターカンジュイ、お前は田で魚を  
取つて、それを食べなさいよ。」

また妹には、あのユム鳥の妹には、  
「さあ、あんたはね、人が作る農作物を食べなさい。粟  
や唐黍を食べて生きなさいよ。」

と言つて、あのユム鳥が農作物を食べるのは、この道理  
つて。

それから、これにはターカンジュイ、ターカンジュイ  
イと言うわけ。このターカンジュイというのは親不孝  
者だわけ。また、雀は親孝行者。

ねえ、私も池味にいたわけだから、こんな話は、よく、  
私たちは、夕飯を食べたあとで、隣の家に行つて聞いた  
よ。今も、その人は池味にいるよ。

ラー小や親孝行者。

ぬー私ぬんハネル居い。私達、ゆい、夕飯食めし、隣んかい行ちゆたちえー。今、どーにんうんどー、池味なかい。

注 ①ユム島・・・沖縄中南部方言では、かつて、雀を意味した。今でも、沖縄本島周辺の離島や奄美方言では、ユムドゥイ系が多い。  
②池味・・・与那城町、宮城島の北部に位置する字。与那城町は沖縄本島中部の東海岸勝連半島に位置し、宮城島はその北東にある島。古くは高離島と呼ばれた。

平成二年三月二日 豊岡早苗・宮城昭美聴取 山城綾子翻字 T47B3

17 雀とターカンジュー（姉妹・アンマー）

宮里 上根ウサ（明治三十一年二月五日生）与那城町

うぬー、雀んでい言いしえー（親孝行者）、ターカンジューやあれー不孝ぬ者。うれ、雀からなとーる。

雀二人居くとう、

「アンマー、なー私達や大人なとーくとう、旅んでい儲きてい来に、儲きていアンマー孝行さびーくとう、行ちやびらーい」

んでい行ちやーに。さくとう、一週間ないーねー、アンマーが病気なやーに、けー隣ん人ぬ世話さーに、手紙ぬ来に、あんさー、うぬー、うっとー（妹）また、

雀というのは親孝行者、ターカンジューは不孝な者。これは雀からなっている。

雀が二人いたから、

「お母さん、もう、私たちは大人なっているから、旅に行って儲けてきて、儲けてお母さん孝行しますから、行きましようね」

と言って、旅に出た。そして、一週間したら、お母さんが病気になって、隣近所の人が世話をしてくれて、手紙が来たので、その妹はまた、

「でーじなとーんむんなー」

んでい、姉さんぬひーんかい行ちやーに、

「姉さん、アンマーや病氣んでいいうんでー。でいか、  
でいか、家かい早く帰らな」

んちやぐとう、

「いー、いー。あがとー旅からーや、髪ん捌ち、清

ら着物ん着りわるないくとう、いーや、先なとーけー」

んでい言ち、うつとー先なてい行じやくとう、親めみー

トワイ見ちやーに。

また、装いたていてい、しーじやー、来くとう、

「いーや親不孝ぬ者や。うつとーや、人ぬ作ゆる

米、粟、トーンチン作てい、拾つてい食みよー。い

やーや、親不孝ぬ者やくとう、池からや、うみしらー魚

捕つてい喰よー」

ターカンジュえー、腹小赤まーに、<sup>①</sup>頭小被とーしえー。

とーうりから親不孝ぬ者、ターカンジューんじうるーや、

親不孝ぬ者。

注 ①頭小被とーしえー・・・カワセミは河川や池沼辺に住む、全長一七センチくらいの小形の鳥で、頭と翼はやや緑色味をおび、身

体の上は美しいコバルト色、腹部は赤色を呈する。頭部は琉球王の冠に似ている。繁殖時期は三月から七月頃で、川の土手や崖などに一メートルくらいのトンネルを掘って巣を作る。沖縄各地に生息する留鳥。水面に突き出た樺や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水中にダイビングして餌を捕らえる。

「たいへんなことになってしまったねえ」

と言つて、姉さんの所に行つて、

「姉さん、お母さんは病氣だというよう。さあ、さあ、  
お家に早く帰ろうよ」

と言つたら、

「うん、うん。あんなに遠い旅だからね、髪も梳いて、  
きれいな着物も着ないといけないから、あんたは、先に

行きなさい」

と言つた。妹は先に行つたから、親の臨終に立ち会つた。

また、きれいに装つて姉が行つたら、

「あんたは親不孝者だ。妹は、人が作つてある米、粟、

唐黍を拾つて食べなさい。あんたは親不孝者だから、池

からね自分で魚を捕つて喰いなさい」

ターカンジューのお腹は赤くつて、頭にも被つているさ

あ。だから、それからターカンジューというのは親不孝

者と言われている。

者と言われている。



㊦ ターカンジュヤーとクラ

カンジュヤーは、普通語では翡翠。あれがよ、話えー、大概んな、うんぐとーやる筈やっさー。ある親孝行、不孝者の話やぬばてーうれー。

「親め病氣そーくとう、重体やくとう」つち、いえいさくとう、えーでいん、まじゅーのー居らんでーるばーるやさに。いえいさくとう、クラーんでいしえー、

「はー、親め重体やれーなー、生ちちよーいにうてい話んないる、行きわるやる」

んち、着ちよーぬまーまー、フクターんぬーん着ちほちよーるばてー。

また、この翡翠んでいしえー、ターカンジュヤーんでいしえー、あぬー、清ら装いし、着物んぬーん清ら装いし、行ちゆんとうー親あけー亡ちねーん。あんしから、クラーや、あぬー、

「いやーや親孝行者やくとう、倉うてい暮らち、あぬ、シジぬ達が作てい米ぬ米食でい、楽に生活をし」

古謝 島袋義堅（大正三年二月一日生）具志川市

カンジュヤーは、共通語では翡翠という。あれの話は、たいがいみんなこんなだはず。ある親孝行と、不孝者の話だわけね、これは。

「親が病気だから、重体だから」と連絡したら、つまり、一緒には住んでいなかたわけでしょうね。連絡したら、雀というのは、

「あれまあ、親が重体だつたらもう、生きている間にしか話はできないから行かないといけない」

と言つて、着の身着のまま、ぼろを着て行つたわけよ。また、この翡翠というのは、（方言で）ターカンジュ

ヤーというのは、もう、きれいな格好して、着物なんかもきれいに装つて、行くまでには、親は亡くなつてしまつた。

それで、雀は、

「あなたは親孝行者だから、倉で暮らしてね、人間が作つてある米を食べて、楽に生活しなさい」

倉育ちすんでいるばー。えーでいん、あいないねー、人間ぬ作とーし、まじゅーんし落ちていし、散らかちそーしや、食でい暮らしんでいる意味えーやんでー。楽にし。また、翡翠んでいしえー、ターカンジュヤーんでいしえー、

「いやーや、親不孝者やくとう、暑さん苦りさんや、寒さいにん、川んじひやー物おー捕てい喰えー。食ていーしかきー」

んでいち、あんしし、ターカンジュヤーやちやー、田うてい、冬ん夏ん、あんし暮らちよーんでいぬ話。うんな話やな、大体や似ちよーん。

### 四 クラ小とターカンジュヤー

「雀は孝行者だから、倉で暮らして、育て」

と言われて、それからクラ小と言ったんじやないんですか。

その話です、昔よ、クラ小とですね、ターカンジュヤーは知っていますか。あれは、普通語で何と言いますかね。ずっときれいな鳥ですがね。翡翠は上がって行って魚を見て捕る奴よ。その親が病気で、危篤で、(連絡が)きたもんですからね、このターカンジュヤーは、「親が死んだら」と言って、きれいな姿して、上手に化粧もして行ったもんだから、

と言われて、倉で生活しているというわけね。つまり、言うなれば、人間が作ってある作物、積んである物から落ちて散らかっているのを食べて暮らさないという意味だろうね。楽にしなさいって。

また、翡翠というのは、ターカンジュヤーというのは、「あんたは親不孝者だから、暑くて苦しいときも、寒いときにも、川でいつも食べ物を捕って喰いなさい、食べなさい」

と言われて、そうして、ターカンジュヤーはいつも、田んぼで、冬も夏も、あんなして暮らしているという話。こんな話はもう、だいたい似ている。

平成二年七月六日 照屋京子・平教美恵子聴取 宮城昭美翻字 T 85 A 4

古謝 烏袋義堅(大正三年二月一日生) 具志川市

間に合わなかったわけ。

それから、クラーというのは、「あ、これ大変だ」と言つて、着の身着のまま、フクターフクター小着こぎやりに間に合ったわけ。それで、クラーが親のあれをして、やったもんだから、

「お前は孝行者だから、人の倉で育つて、生活していきなさい」

つて、クラーは言われているわけですよ。それは神が言いつけたわけですよ。それは分からんがね。

それからターカンジュヤーは

「お前は不孝者だから、毎日、暑さ寒さ、川に行つて生活しなさい」

と言われて、川かわななししー、チョツ、チョツ、チョツして、魚捕つて食べている。

平成二年三月二日 宜保勝聴取 宮城昭美翻字 T 63 A 3

② 雀とターカンジュヤー（お母さん）

大里 永山ウシ（明治三十七年七月一五日生）高原

「親がねえ、もう危篤だから、あんた方早くおいで」

つて言つたつて。雀にも、何と言うか、きれいな鳥がいるでしょう、昔はターカンジュヤーと言いよつたねえ。ああいうふうな、鳥の話だけどね。

「お母さんがね、あなたの親が危篤だから早くきなさい」

言つたらね、

「はい」

と言つてね、雀はね、

「親の危篤だったらね、すぐ行こう。ぼろぼろ着物着ていてもねえ」

また、あの青い鳥はね、

「親が危篤だったら、私、今から糸繫いでね、きれいな着物を着けて行くからね」  
つて。

そうしたら雀はね、あの親の危篤だったら死に目に合わんといけなからね、どんなほろ着を着ていてもね、タオルを首に掛けて、そのまま行つたらしいですよ、親の所に。雀は首にタオル掛けたまま。あの雀の首は白いタオルが付いているでしょう、白い毛が。あの伝説でね、雀は、

「親の危篤だったらね、きれいな着物を作る必要はないから、それよりは私早く行って、親の死に目にあう」と言つて行つたらしいですよ、雀はよ。そつたら、

「あなたは親孝行者だからね、あなたは瓦葺きで、瓦屋の雨垂（軒）に巣を作つてね、そうして、エーキ（金持ち）の米を食べてね、成長しなさい」

と、親の遺言だったつて。それでね、雀は今でもね、首だけは全部白いでしよう、これはそのタオルを付けてね、親の死に目にあつたからつて、そういうで聞いたことがある。

だから、青い鳥はね、着物作つて着けて行くまでは親の死に目に合わんわけさあ。だから、親の遺言はないわけさあ。親不孝と、親孝行というのがあるでしょう。雀は親孝行者だからね、

「もう、あなたは瓦葺の雨垂（軒）に巣を作つてね、あの瓦屋の、エーキ（金持ち）の米を食べて成長しなさいねえ」と親が言つたらしい。ほいでね、その雀がこの家に入つてもね、何でもないらしいよ、雀は。

ただ、あの青い鳥が入ってきたらね、浜下りしてね、厄払いうて浜下りしよつたわけよ。この青い鳥が家に入ってきたらね、厄だからいうてね、家族全部家から出てよ、家も閉めて、浜に出て浜下りしよつた、青い鳥が入つたらね。雀は入つてきて何もでないらしいです。青い鳥は親不孝な者だからね、青い鳥が家の中に入つたら厄だからね、こつちに居たらいへんだつて。この鳥はね、「あなたはこつちは厄があるからね、こつちに居たらいへんだからね、こつちに避難しなさい」という合図であるというふうな話聞いたんですよ。この青い鳥がこつちに入つたら、こつちは厄だからね、あ

んた方は余所に避難しなさいって。家族で浜に出てよ、今はテントもなくてつね、こうくって、せんとうばりみたようにして、あそこの浜でね、三日ぐらい向こうで寝泊まりしよったんですよね。浜でもご飯は炊かれるんですからね。

注 ①浜下り・・・災厄を払いのけるために海に下りて禊ぎをすることをいう。沖縄では、小鳥類が部屋に飛び込んで来て、位牌に留まったりすることを極度に忌む風習がある。

平成二年三月一日 平良真也聴取 宮城昭美翻字 T 46 B 1

## 四 カンジュヤーとクラ

カンジュヤーは清ら装いなやりに親孝行さん。さくとう、クラヤまた、いつべ親孝行なやりに、

「いやーや倉ぬ下んじ、米物食りし、よー」

んち、カンジュヤーや、

「いやーや川んじうてい育ていよー」

ち、あんしるカーラコッコイや付きらったんでい。アタビーが鳴くだろう、「カーラコッコイ、カーラコッコイ」して。こんなやつたつて。カンジュヤー親孝行あらん、さんたんでい。あんすくとう、

「川んじ、いやーや住まりよー」

んでい。だー、川んじ住まてい、あんさーに、うぬカ

高原 鳥袋カメ（明治四一年一〇月一九日生）高原

翡翠は、いつも着飾ってはかりいて親孝行はしない。

そして、雀はまた、とつても親孝行だったから、

「あなたは倉の下で、米粒を食べて暮らしなさいね」

と言われたが、翡翠は

「あなたは川にいて育ちなさいよ」

と言われて、それでカーラコッコイと名付られたつて。

蛙は「カーラコッコイ、カーラコッコイ」して鳴くだろう。こんなだつたつて。翡翠は親孝行ではない、しなかつたつて。それで、

「川で、あなたは住みなさいよ」

つて。それで、翡翠は川で住んで、また雀は

ンジュヤーや川んじ住まてい、またクラヤー、

「倉ぬ下んじ、いやーや、米物食みよー」

んち、親孝行しえーんち、あんしやたんでいる話。

カンジュヤーはね、清ら装いーなてい、親孝行はんた

んでいー。あんさくとう、

「いやーや、クラヤーや倉ぬ下んじ居てい、米物食でい、

親孝行しえーん」

でいち。また、カンジュヤーや、親孝行さんくとう、

川んかい住まーたんでい。さくとう、うりから「カー

ラコッコイ、カーラコッコイ」すしえー、うぬたみんで

い。あぬカーラコッコイんち鳴ちゆしがうしえー、あり

やさ。

カンジュヤーは、いっべーきれいさー。クラヤーは小さ

い鳥だから家にも入るさー。だから、あれは親孝行そー

くとう、

「いやーや倉ぬ下んじ、米物食でい、親孝行しえー」

んち、功もーきはつてーるばー。

「あんたは、倉の下で米粒を食べなさいよう」

と言われたつて、親孝行したから。そんなだつたつてい

う話。

翡翠はね、いつも着飾る者だつたので親孝行はしな

つたつて。それで、

「雀は親孝行したから、倉の下に居て、米粒を食べな

さい

つて。

また、翡翠は親孝行しないから、川に住んだつて。そ

れで、そのときから「カーラコッコイ、カーラコッコ

イ」と言うのは、そのためつて。あのカーラコッコイと

いつて鳴くのがいるでしよう、あれさあ。

翡翠は、とつてもきれいさあ。雀は小さい鳥だから家

にも入るさあ。あれは親孝行しているから、

「あんたは倉の下で米粒を食べなさい」

と親孝行しているからといつて、褒美をもらっているわ

け。

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T 44 A 7

㊦ クラーとカンジュヤー

あのね、クラーの親が病氣したからね、カンジュヤーとクラーと二人呼んだから、クラーは急いで来て、カンジュヤーは、

「私ねー清ら着物お着ちからる、親め面会しーが行ちゆる」

んり言ちやくとう、カンジュヤーが行ちゆんとうーねー親は亡くなって。そうして、クラーは親め孝しといつてね、

「米倉から、あんたは米を食べなさい」

といつて、親に遺言されて、カンジュヤーというものはね、

「川の端の魚小、雨に濡りてい、あんたは親め孝しな

いから、あんたは悪い所から歩きなさい」と言つてね、こんなにされたという話だけれど。

高原 鳥袋ヨシ（明治四四年三月一〇日生）高原

あのね、雀の親が病氣したからね、翡翠と雀と二人呼んだから、雀は急いで来て、翡翠は、

「私は、きれいな着物を着けてから親の面会しに行く」といったので、翡翠が行くまでには親は亡くなった。そうして、雀は親の孝行をしたといつてね、

「米倉から、あんたは米を食べなさい」

と親に遺言された。翡翠は、

「川端の魚などを雨に濡れて（捕つて暮らしなさいね）あんたは親孝行はしないから、あんたは悪い所から歩きなさい」

と言われてね、こんなふうになってしまったという話だけれど。

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T44A8

## 23 クラーとカンジュヤー

これはね、聞いていると思いますが、親たちからいつも、この話聞かされよつたんですよ、両親から。

クラーや、

「親ぬ病氣やくとう来」

んち連絡ぬんじやくとう、連絡ぬめーんかいんじやくとう、クラーや、

「親ぬ病氣やれー」

でいやーに、昔えー着物作って着けよつたから、クラーや緯うちえーる布、しぐ、うぬまま引つかきてい、糸ぬまま引つかきてい、親ぬ面会かい行じやくとう、親あ元氣やたんでい。あんし、病氣しなーだ亡さん。

また、カンジュヤーや、親ぬ病氣んさくとう、

「私ぬ織てーる布おしこーてーん布おー、作やーに着ちからどう行ちゆる」

んちさくとう、カンジュヤーや、しぐ、グワラ、グワラ、布おー、機織りで布お織つてい、縫てい着ちちゆるえーかー、親あ、なー、けー亡そーたんでい。あんさくとう、親ぬ遺言ぬ、クラーんかいや、

「いやーや、親孝行者やくとう、米倉うてい、米、エー

## 比屋根 城間文字（大正七年一月七日生） 具志川市

この話は聞いていると思いますがね。親たちからいつも、この話を聞かされよつたんですよ、両親から。

雀は、

「親が病氣だから来なさい」

といつて連絡が子ども所に来たから、雀は、

「親が病氣だつたら」

と言つて、昔は自分で着物を作つて着けていたから、雀は緯（よこ糸）を置いてある布を、すぐ、そのまま引つ掛けて、糸のまま引つ掛けて、親の面会に行つたから、親は元氣だつたつて。まだ、病氣で亡くなつていなかつたつて。

また、翡翠は、親が病氣と聞いて、

「私は、織っている布は、準備してある布は作つて着けてから行く」

と言つて、翡翠は、すぐ、ガラ、ガラと機織りで布を織つて、着物を縫つて着て来るまでには、親はもう亡くなつていたつて。それで、親の遺言で、雀には、

「あんたは親孝行者だから、金持ちの米倉の下で烏米飯を食べて、あんたは大きくなりなさいよ」



きん人ぬ米倉ぬ下うとーてい、島米飯喰でい、いやーやふどういりりよー」

んち、親からの遺言が。

また、カンジュヤーんかいや、

「いやーや親不孝な者やくとう、海うとーてい、海クジーンクエーし、いやーや食みよー」

んでいち、親譲りの言葉があつたから、あんなにして、海の浜辺りで、上等の着物着けて、あれしているでしよう。親譲りの言葉があるつて。親孝行すしえー、クラーや親孝行、あまー(カンジュヤーは)親不孝んち。あんさーに親譲りぬ言葉ぬ残とーるばーよー。あんさーに、あんぐとーし、浜なーでい。海クジーンクエー。今はそうでないでしよう、昔は海あつちやーやウミクジーンクエーつて言よつた。土地もなにもかもない祖先が、子どもだちが、海クジーンクエーでい言たるばーてー昔えー。あんさぐとー、カンジュヤーんかい、

「いやー、海クジーンクエーし食みよー」

んでいやーに、あんし浜なーでい、清ら装いし、カンジュヤーや浜なーでい、海なーでい歩つちよーるばー。これは、親の言葉が、遺言があつたつて。そしてあの暮らししているつて。いつも親から聞かされよつた。

といつて、親からの遺言があつた。

また、翡翠には、

「あんたは親不孝者だから、海で、漁をして食べなさい」

といつて、親の遺言の言葉があつたから、あんなふうにして、海の浜辺で上等の着物を着けているでしよう。親譲りの言葉があるつて。雀は親孝行、翡翠は親不孝つて、それで、親の遺言の言葉が残っているわけよ。それで、あのように浜辺で餌をさがして食べている。今はそうでないが、昔は漁師には海クジーンクエー(海ほじくり食い)と言いよつた。畑のない人たちや、子どもたちに、海クジーンクエーと言いよつたわけ、昔は。それで、翡翠に、

「あんたは、海で餌をさがして食べなさいよ」

と言われて、それで翡翠はきれいな着物を着て海辺から歩いていくわけ。これは、親の遺言の言葉があつたつて。そしてあのような暮らしをしているつて。いつも親から聞かされよつた。昔は親孝行、いつも親孝行と言いよつたもんだから、今と反対に。今はそうでないが。

昔は親孝行、いつも親孝行と言ったもんだから、今と反対に、今はそうでないが。

注 ①海クジーンクエー・・・直訳すれば、「海ほじくり食い」だが、ここでは、海で餌を捕って生活することを意味している。

平成二年三月一三日 上門千賀子聴取 宮城昭美翻字 T 68 A 1

#### 四 クラーとカンジュヤー

越来 仲宗根初子（明治三十九年一月二十九日生）越来

何というかねえ、クラーは、着けるのは汚いのを着けているけどね、人間から見たら悪い着物さあ。また、あのカンジュヤー（翡翠）といってね、きれいな服を着けているけど、あれは、青いのも、黄色いのも、赤いのも、ちゃんときれいにしているから、あれカンジュヤーというわけさ。またクラー（雀）というのは、親孝行ではあるけど、見たらあまり毛は上等でないさ。だ、これ沖繩口で言ったら、「クラーは①フクター着ちよーていん（雀はボロを着ていても）、親孝行、カンジュヤーは、きれいな着物着けていても親不孝」と言われているさ。

これはね、なんでこんな言われているかと言ったら、カンジュヤーというのはね、

「水汲でい来ーわ。お水を汲んでおいで」

と言ったらね、潮、海の潮汲んで担いで来るし、また、クラーはね、

「水汲でい来ーよー（水を汲んできなさい）」

でい言ねー、水汲でい来、親ぬ孝し、あんさーに（と言ったら、水を汲んで来て、親の孝して、そうして）、この親がね、言えば人間と例えばよ、

「いヤーややー、親孝行やくとう（あんたは親孝行だから）、米ぬ上から米食べて生活していきなさい。また、あんた（カンジュヤー）は親不孝だからね、川のね、川端あつちで、寒い時でも川端に住んで、自分で魚捕って食べて生活しな

さい」

と言つてね。これは人間と例えたら、クラは汚い服を着けても、親孝行と言われて、いつもあの稲マジン、(稲マジン) といつて米刈りてきて、こんなして、みんな(稲を積んで置いた物に)、稲マジンって言いつつたさ、昔は) これの上からいつも歩いてよ。人間が食べる御飯食べて生活する。

また、カンジュヤーヤーというのは、どんな寒いときでもよ、川端から、落ちては、水の中から魚捕つて食べてね、あんなして生活するから、こんな話よく、親たちから聞いているさ。例えばさあ、お母さんがよ、何というかなあ、仕事いーちけー(言いつけ)するわけさあ、

「あなた、今日は忙しいから、お水を汲んでおいで」

といいつけたから、もう、このカンジュヤーは悪い人だから、悪い人間だから、例えばよ、海の潮を担いで来るわけさあ。わざとてー(わざとさ)、親に対して反抗して。親が言うのはもう真面目に聞かないわけさあ、むる(みんな) 反対して。

また、このクラは、親の手伝いもよくして、親がいうこともよく聞いて、「お水も手伝いしてちょうだい」と言つたら、お水も汲んで来るし、「今日はまた、潮が入り用だから」、豆腐するとき潮使いよつたから昔は、潮は担いで来るし、こんなしてもう親孝行だから、あなたは、例えばお金持ちの、お金持ちにしか、この米倉はなかったから、

「ウェーキン人ぬ米ぬ上から歩つち、いヤーや、親孝行だから生活していきなさい(雀は親孝行だから金持ちの米倉の上から歩いて米粒を食べて、生活しなさい)」

また、このカンジュヤーというのは、

「あなたは、親不孝者だからね、寒いときでも、もうガタガタ震えても、あなたはあの川端で生活していきなさい」と言つてね、昔の人は、そう伝えられていたつて。これはよく聞かされてました。

注 ① フクター・・・ばろ。裂をつきはぎして仕立てた着物。

平成二年八月二日 新垣孝幸・謝敬勝美・新垣登季子・知念美佳子・喜瀬智美聴取 香村夏子翻字 T 133 B 1

## 四 カンジュヤーとクララ小（お父さん）

中央 金城初子（大正五年二月二四日生）石川市

あのね、カンジュヤー（翡翠）とクララ小（雀）、二人あのおう、膝染めるといって、着物作る膝染めるといって、遠い所に飛んで行って、半ばごろ行っているときに、また、

「あなたのお父さんはもう、病気が強くなっているから早く来なさい。あなた方二人来なさい」  
つて、呼びに来ているわけ。したら、カンジュヤーという鳥はね、

「せっかくこつちまで来ているのに、私は戻らん」

と言って。クララ小という鳥はまた、雀である。いつも、（家の）二階からも飛んで歩く、鳥小がいるさ。あのクララは、

「戻って行かなければ、親たちどうなるか分からんから、私はじゃあ、お家行こうね」

と言って、二人別れたわけ。別れたからカンジュヤーという鳥は、もう膝染めてきてあるから、きれいな洋服着けているわけさあ。羽よ、とてもきれいよ、青々として。

そのクララ小という鳥は、あれは膝、この首に巻いたのが、強く見たら首に、何か印があるよ。こんな巻いた毛になっているけど、白くしているような、あれが見えるよう。あの親孝行の鳥は染めてないから、膝首に巻いたまま。また、親不孝の鳥は、染めてきているからもう、きれいな洋服着けているわけさ。そうしたから、あれ親孝行しているから、神様がね、

「あなたはね、いつもあの食べ物がいい食べ物、もし稲刈る所に、（稲の中にもよく来るよ、あの鳥は。稲刈るいうて、マシン作るでしょ。今、マシン作ってないかねえ。昔は、お家の周囲に、稲倉といって作りよった）この稲倉の下、周囲から遊びなさい。また、瓦葺の家の上から歩くでしょう。あんな所から、下から歩かないであんな所から歩きなさいねえ」と言うて、神様に教えられて、あれはもう、いい所、ずっと歩いているけど、カンジュヤーという鳥は、親不孝な者だから、

「あなたはいつも、あのジャカジャカしている、水の所で暮らさない」

と云うて、それで、カンジュヤーは水のある所にお家も作って、寝泊まりしている。

「親がこれほもう、親の言うことも聞かないから、雨蛙と一緒だから、反対で言わなければ分かん」と言つて、

「地面の下で暮らしなさい」

と云うたらしい。それで、いつも温気かかっている所から歩いていくわけ、カンジュヤーは。

「クラー小はまた、いつもいい所から、人が見え、倉の見える所から歩きなさい」

と言つて、いつもあんな所から飛んで歩く。クラーとカンジュヤーは兄弟違う。もしかしたら、兄弟だったかね。倉の下から遊ぶからクラーになったかね。このことははっきり分かんけど。

注 ① 膝・・・ 総に掛ける前の一束にした糸、膝を染色した後、総に掛ける。

平成三年五月三日 宮城昭美・香村夏子・謝敷勝美・石川小百合・大川清子・照屋京子聴取 石川小百合翻字 T 189 A 3

## 四 クラーと翡翠（兄弟）

嘉間良 安次嶺ツル（大正六年一〇月八日生）北谷町

これは、赤や青してね、とつてもきれいな鳥だったけど、今頃はね、見たことないさあ。戦前はね、戦が始まる前まではいたよう、川の所に、鳥よ。あの鳥とね、クラー（雀）、あの雀よ。雀は、こっち（首）には白いのがあるさあね。

昔の伝え話だけど、雀は、あれ（翡翠）とね、本当は兄弟だったって。で、この雀はとっても親孝行の鳥でね、また、この翡翠は、親不孝者だったって。そうしたらね、親が死ぬときの遺言でね、

「私が死んだ後はやー、クラー小あんたは、人の家の雨垂（軒）なーりー、家に入つてね、物を取って食べなさい。また、あなた（翡翠）はね、親不孝者だから、きれいな着物を着せるから、川に行つてね、ミミズを取って暮らしなさい」  
つて。だから、親不孝者だからね、も、遊んで暮らしているから。遊ぶ人はやっぱしあの、昔でも今でも、上等な着物つ

けて歩き回るさあね。この伝えだと思ふさ。うん、うん。

「翡翠は」親不孝者だから、あなたはね、いつもきれいなふうして、遊び回るから、あなたは、川に行つて、ミミズ取つて食べなさい。また、雀はね、親孝行するからね、人のお家から物を取つて食べなさい」

といつて、この伝えでね、雀はこつち（首）に袋さげられていた。親に袋を、白い袋をさげられてね、あれ（翡翠）はまた、きれいな着物を着せられたといつて、伝えあつたんですよ。うん、これだけさ。

注 ①翡翠・カワセミ科の川辺にすむ小形の鳥

平成二年八月二日 新垣孝幸・有銘和江曉取 照屋京子翻字 T148 A1

## 四 カンジュヤーとクラール鳥小

親が今死ぬといつて、

「目つぶらんうちに早く来い」

んでいちゃくとう、装や大概どうやる、総掛きーたんでい、総はちやーに、親ぬミーウトウイ見じゅんち、そーぬぎてい、総、着物作る総はち行じやくとう、うぬ親ぬ言い分ぬ、

「いやーや、親ぬ孝ぬ子やくとう、ちやー倉ぬ下から米拾てい喰よー」

でいちやたんでいしが。

カンジュヤーや、カンジュヤーんでいしえーいっべー

## 住吉 座間味マカト（明治四一年三月五日生）白川

親がもうすぐ死ぬからといつて、

「目つぶらんうちに早く来なさい」

と言われたから、（雀は）身なりはどうでもよいといつて、機織りの総を掛けているところだったので、その総を掛けたまま、親の死に目に間に合うようにと、慌てて、着物を作る総を掛けたまま行つたから、その親の言い分は、

「あなたは親孝行な子だから、いつも倉の下から米を拾つて食べなさいよ」

と言つたそうだが。

清ら鳥小やたしがてー、うれーまた、

「清ら装いする親ぬミーウトウイ見じーが行ちゆる」

んちやくとうよー、

「いやーや、夏か冬か川なでいー魚捕てい喰よー。

いやー親ぬ不孝ん子やくとう」

んでいち、うぬ話やたんでい。

あんさーに、クラー鳥小や、かーげー悪つきしが、

カンジュヤーでいしえー、清らさしえーやー。うぬ、意

味えーやん。

鶺鴒は、鶺鴒というの、とつても美しい鳥だったが  
ね、これはまた、

「きれいに装つてから親の死に目に会いに行く」

と言つたからね、

「あなたは、夏も冬も川端で魚を捕つて食べなさいよ。

あなたは親不孝な子だから」

と言つたという話だつた。

それで、雀という鳥は姿は悪いが、鶺鴒という鳥は美

しいさあね。その意味あいからきているんだ。

平成二年八月二日 石川小百合・仲里香・謝敷勝美聴取 宮城昭美翻字 T157B1

函 クラーとカンジュヤー（お母さん）

住吉 徳里 静（明治四四年三月五日生）安慶田

クラー（雀）はよ、親の亡くなる前によ、お母さんが病気だからと言つて呼んだけだよ、自分の着物を作るといつてや  
つていけるけどよ、間に合わないで、親が病気、もう死にそうになつたからよ、昔、機織るのに繻というものがあつて、そ  
れを肩に掛けて行つたらよ、この人は親の死に目に間に合つていけるわけさあねえ。しているけど、カンジュヤー（鶺  
鴒）はよ、カンジュヤーは親が亡くなるといつてもよ、自分の機あるさあねえ、立派な織物作つてから着て行くとい  
つてよ、その間には親は亡くなつたからよ、亡くなる時の遺言でよ、親の遺言で、（雀は）

「あなたは親に孝してよ、こんなに親の亡くなるのも見ているから、倉の側なでいー（倉の側から）、米を拾つて食べ  
て生きなさいねえ」

カンジュウヤーは親不孝なっているからねえ、

「川かわからよ、自分で餌捕って食べて歩きなさい」と言つて遺言しているわけさあねえ。」

だけど、クラーは親孝行で、親のあれに間に合わないから、昔の機織る時のおこを掛けてからに行つて、親の亡くなるのは見ているさあねえ。だからよう、あれは倉の前、側から歩いて、あれは首に何かこんなにしてはいるような形してあるさあねえ、少し白くしているさあ。あれはおこと言ふんだ。

カンジュウヤーは見えないからよ、親不孝なっているからよ、

「いやー、川かわなでいー、うり食うりくでい、捕とつて食くでいいき（あんたは、川端から餌を捕つて食べていきなさい）」

でいち、あれー遺言いごん付きらつとーん（という遺言だつたつて）。だからクラーは親孝行、カンジュウヤーは親不孝という、昔の人の話は。それは分からないけどよ、これは、昔の年寄りたちから話聞いたんだよ。

平成二年八月二日 山城綾子・大川清子聴取 宮城昭美翻字 T 156 B 4

## 四 クラーとカンジュウヤー

クラーはクラー、「カンジュウヤーやカンジュウヤー」わかつているよ。あぬよー、親おやがいつべー病びやうどーたんでいー。親おやが病びやうどーたくとう、カンジュウヤーや、海うみぬ物もの魚いしんぬーん海うみから捕とつてい喰くいしえーやー。カンジュウヤーや海うみ鳥とりやんどー。

クラーやよ、親おやぬ病びやうだくとう、うれーいっべーしく、

## 安慶田 神里マカト（明治四五年八月一日生）胡屋

雀は雀、（翡翠は翡翠）つて別ですよ。翡翠ひすいはね、海うみの物、魚いしなんか海うみから捕とつて食くべるさあね。翡翠ひすいは海うみ鳥とりだからね。

雀はね、親おやが病びやうんだから、とっても急いで、会いに行つて。着物も、汚よごい着物を着て、親孝行するために、親が亡くなりそうなきに行つて、親に会うことができた



やすく、家ぬ倉、家ぬ内んかい入つち来ゆーしえーや。  
うんぐとーし、喰いたんでい。

くぬクラーとうカンジュヤーや兄弟やあらんさに。

似らんしえーや。似らんしが、兄弟るやたがやー、  
ぬーがやら、分からんしが。うれー、分からんさー。

平成二年二月一日 崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美聴取 照屋京子翻字 T180A1

### ④ カンジュヤーとクラー

安慶田 仲村渠シズ(明治四二年七月一三日生) 照屋

カンジュヤー(翡翠)はね、親不孝であつたつて。昔、親が病氣して、今日にでも亡くなるいう時に、着物ないから、作つてから行くまでには、お母さんはもう亡くなつたつて。

そして、あのクラー(雀)いうのはね、(着物を)作らんで、総を首に掛けて行つたから、こつち(首)に白いのがあ  
るつて。それで、

「あんたはね、親孝行だから、倉の米食べなさい」

言われたつて。また、カンジュヤーは、

「親不孝だから、川の魚捕つて食べなさい」

言われたつて。こんな話よ。

平成二年八月二〇日 照屋京子・有銘和江・岸本かおり聴取 宮城昭美翻字 T119A2

ありしーが行じやーに。着物ん、やな着物小着やーに、親ぬ孝しーがんち行じやーに、親ぬけー亡しがたーそーんでいち行じやーなかい、うりそーるばーてー。あんすくとう、またうぬ、カンジュヤーやまたよ、清ら装いしなし、すぐ、いっぺー清ら装いさーなかい、親ぬ端かい行じ、さくとうや、親あけー亡ち、ありさくとう、

「ぬーがいやーや、今でいーから来る」

んちやくとう、

「な、私ねーなー着物ん着ち、来んどー」

んちやくとうてー、

「ぬーが、親ぬ亡しーにん、必じ清ら装いし来る」

んち、叱ったんでい。あんさーなかい、ちやー、うり、うりやるばーてー。

あんさーになー、クラーやまた、あんさーにすぐ、

「いやーややー、いやーや、何処んか行かんくとう、家ぬ上から物ん取てい食みよー」

んでいち、親なかい言やつてい。またうぬカンジュ

やーや、

「いやーや、親ぬ不孝者やくとうやー、海んかい行じ魚捕てい喰わ」

でいたんでい。あんさーい、うんにんからなー、クラー

わけさ。

そしたら、またこの翡翠はまたね、きれいに装って、もう、とつても着飾ってから、親のところに行つたからね、親はもう亡くなつていていた。それで、

「なんでお前は、今ごろから来るか」

と言つたら、

「いや、私はもう着物を着替えてから来たんだよ」

と言つたからね、

「なんで、親が亡くなる時にも、必ず、きれいに装つて来るか」

と言つて叱られたつて。それで、いつもこうなんだつて、

そして、雀はまた、すぐ、

「お前はね、お前は何処にも行かないで、家の上から物を取つて食べなさいよ」

と、親に言われてさ。親に言われて。

また、この翡翠は、

「お前は、親不孝者だからね、海に行つて、魚を捕つて食べなさい」

と言われたつて。それで、そのときからもう、雀は、すぐ、家の倉、家の中に入って来るさあね。こんなして、食べよつたつて。

やすく、家ぬ倉、家ぬ内んかい入つち米ゆーしえーや。  
うんぐとーし、喰いたんでい。

くぬクラーとうカンジュヤーや兄弟やあらんきに。

似らんしえーや。似らんしが、兄弟るやたがやー、

ぬーがやら、分からんしが。うれー、分からんさー。

平成二年二月一日

崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美聴取

照屋京子翻字 T 180 A 1

この雀と翡翠は兄弟ではないでしょう。似ないさあね。  
似ないけど、兄弟だったのか、何なのか分からないが。  
これは、分からないなあ。

### ⑨ カンジュヤーとクラー

安慶田 仲村渠シズ (明治四二年七月一三日生) 照屋

カンジュヤー(翡翠)はね、親不孝であつたつて。昔、親が病氣して、今日にでも亡くなるいう時に、着物ないから、作つてから行くまでには、お母さんはもう亡くなつたつて。

そして、あのクラー(雀)いうのはね、(着物を)作らんで、総を首に掛けて行つたから、こつち(首)に白いのがあ  
るつて。それで、

「あんたはね、親孝行だから、倉の米食べなさい」

言われたつて。また、カンジュヤーは、

「親不孝だから、川の魚捕つて食べなさい」

言われたつて。こんな話よ。

平成二年八月二〇日

照屋京子・有銘和江・岸木かおり聴取

宮城昭美翻字 T 119 A 2

四 クラー小とカンジュヤー（お母さん）

室川 佐久田千代（大正七年八月二五日生） 倉敷

クラー小（雀）はね、あれはあんまりきれくないさあね。また、あのカンジュヤーは翡翠（ひすい）というさあね。翡翠はきれいさあねえ。あれはハイカラーで、カーギー（美人）と言うより、清（きよ）ら装（ま）い（きれいな格好）やるわけさあ。あれはいつも、きれいな着物を着ているさ。だから、

「お母さんが病気だから、すぐ来てくれ」

と言つてもよ、来なかつたつて。そうつて、あのクラー小はね、一番来てなあ、こんなしてお母さんのお手伝いもなにもしてあげてから、お母さん亡くなつたけどね。死ぬ前に遺言（いごん）するさあね。だからね、その話から、クラー小に、

「あんたは親孝行だからね、エーキン人の、お金沢山ある家は瓦屋根造つてね、倉（ぐら）にいっぱいいなー米も積んでね、ある中はやっぱし散れるでしょう。取つたり入れたりする時、お米が沢山散れるでしょう、これを拾つて食べなさいね」

つて。そつてね、カンジュヤーは遅く来ているわけさあね。だからあれにはね、

「あんたもう親不孝だからね、いつもきれいな着物着けているから、餌はね、自分であつちこつち、雨の降る日も、風の日も川の所から拾つて食べていきなさいね」

つて、親の遺言（いごん）で、あれはずつと川端から飛んでいるつて。クラー小はいつも家の周辺から飛ぶさあねえ。

平成二年二月一四日 上門千賀子・石川小百合・新垣孝幸聴取 宮城昭美翻字 T 172 A 3

## 32 クラーとカンジューヤー（兄弟）

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

クラーの話というのは聞いたことある。本にも出てはいるよね、これね。僕らはこう聞いたわけよ。上地での話よ。クラーというのは雀だよな。カンジューヤーというののは翡翠なんだよな、今のね。クラーとカンジューヤーの話。どういことかというのと、昔々、クラーとカンジューヤーは兄弟だったって。方言でやろうか。

昔、クラーとうカンジューヤーや兄弟やたんでい。あんし、互に、いっぺー、親ぬ前から離れてい別んかい暮らちよーたんでい。親が年取いみそーやーに、病氣しみそーち、

「なー今日、明日、けー亡しがたーなとーくとう、来てうらし」

と。来てくれと、いえいがあつたつて。いえいというのは連絡ね。あんされー、うぬクラーや、

「アキサミヨ、でーじなとーん」

でい、すぐ、仕事んうつちやんぎやーなかい、すぐ走えーし戻たんでい。あんさくとう、親ぬけー亡さんまーる間に合てい、ミウトウイする前うてい、親会てい、あんし、生ち別りし、其処うとーてい、立派孝行ん

クラーの話というのは聞いたことある。これは本にも出ているよね。僕らはこう聞いたわけよ。上地での話よ。クラーというのは雀だよな。カンジューヤーというのは、今の翡翠だよな。クラーとカンジューヤーの話は、どうい話かというのと、昔々、クラーとカンジューヤーは兄弟だったつてよ。方言で話そうね。

昔、雀と翡翠は兄弟だったつて。そして、互いに、親の所から離れて別の所で暮らしていたつて。親が年とられて、病氣なさつて、

「もう今日、明日にも亡くなりそうになつていから、来てくれ」

つて、来てくれという連絡があつたつて。そうしたから、この雀は、

「あれまもう、たいへんだ」

と言つて、すぐ、仕事もうつちやつて、すぐに走つて戻つたつて。それで、親が亡くなる前に間に合つて、臨終の前に親に会つて、そうして、生き別れをして、そこでちゃんと孝行もしたが。

翡翠は、

そーしが。

カンジューヤーや、

「なー、いかな親子やたんでーまん、家庭ぬ分かれーからー、いひえーありやるんでいヤーに、あんしえー、あんやらーなー、いひえー、しぐんちえー行かんむん」

ち、家かい行ちヤーに、しこーいむこーい、清ら装いぐわーし、着物替たいぬーさいし、あんし行じやんでい。うんにんとうーねー、親ぬ死に目んかい会らん、間に合らんたんでい。親が、

「クラーや孝行ん子、いやーや孝行やくとうやー、今からー、雨風んけー濡りらんぐとう、家ぬ側なーしー、米倉ぬ落ていくくぶー食まーに、暮らち行きよー」

でい。あんさくとう、クラーや今ちきてい、家ぬ周囲、軒下んかい暮らち。あんさーに、人、人間ぬ食むる物、あやかーてい食でいんじ、いつべー、安楽に暮らちよーん。

うぬカンジューヤーや、親不孝者なてい、親ぬ死に目んかい会いーさん。親不孝なたるたみなかない、雨降い風降い、雨んかい濡でいてい、川ぬ側なーしー、魚小捕つてい暮らしんじ、あわりそーん。あんすくとうそーい

「もう、いくら親子といつても、家を出たら、少しはなんだよ。と言つて、親が病氣といつても、これはすぐにといつては行けないから」

と言つて、家に行つて、いろいろ準備して、きれいな格好して、着物を着替えたりなんかしてから行つたつて。そうするうちには、親の死に目に会えないで、間に合わなかつたつて。

そうしたら、親が、

「雀は親孝行な子、あんたは孝行だからね、今からは、雨風に濡れないように、家の側から、米倉から落ちた米粒を食べて、暮らして行きなさいよう」

と言つた。それで、雀は今でも、家の周りの軒下で暮らして、そうして、人間が食べる物をあやかつて食べていつて、とつても安楽に暮らしている。

翡翠は親不孝者で、親の死に目にも会えない。親不孝者だつたために、雨降り風吹きにも雨に濡れて川で魚を捕つて暮らして、苦勞している。だから、いい子にしなさいよ。これが、雀と翡翠の、いわゆる教育の民話でね、僕はすばらしいもんだと思つている。

りよ。これがね、クラールとカンジュヤーのね、いわゆる教育の民話でね、僕はすばらしいもんだと思つている。

平成二年八月二三日 宜保勝・宮平聴取 宮城昭美翻字 T 165 A 2

### 四 クラール小とカーラカンジュヤー

中の町 石川富子（大正一一年一月三〇日生） 読谷村

雀と翳翠カササギの話があるでしょう。あれはね、幸いに、親にもよく聞かされているし、また、学校でもね、小学校のときに劇をやったからね、学芸会によく覚えていたのよね、これは。うん。だからあれが、まあ、教訓みたいだね、親がよく、「親不孝したらね、こういうことになるんだよう」ちつて言われてね。

私たちが劇でやったのは、雀が集つてね、子どもたちより早く起きて竹藪でチュン、チュン、チュンして遊んでいるときに、

「雀のお母さんが」病気で亡くなったから、すぐ帰つて来い」

ちつて、それで、結局言うわけさあね。雀さんは、慌ててすぐそのまんま飛んで行ったわけよ。そんな着替える間がないから、すぐ出て行くんだけど。もう着の身着のままよ。

そして今度は翳翠ね、沖繩語であればカーラカンジュヤーつて言うのよ。もう、今だにきれいでしょ。このカーラカンジュヤーは、

「さあ、支度しよう」

言うて、きれいに着替えて、それでお洒落していく間に、もう親の送りも済んでいたつていうわけさあ。それで、そこに神様が出てきてね、

「二人とも、よく来た」

ちつて。そこに並ばして。それで、

「その来た心がけに、褒美をあげよう」

ちつて、二人に言うわけさあね。そうしたら、

「ありがとうございます」

して、カーラカンジュヤーはすぐ飛び出してきて、手出すわけさあね。そうしたら、神様に手叩かれてね。

「雀のチュン、チュン聞きなさい。親の不幸にすぐ駆けつけたのはね、とってもいい心掛けだつて。だからね、あんまりあげるものは上等ではないけどね、その気持ちだけはね、とっても見上げたものだから、これを上げる」

ちつて、それで、地味な着物を上げるわけさあね。したら、翡翠には、

「あんたはもう、着るもんからして派手でね、親不孝した上に、親が死んだいうても、すぐは来てくれないし、こんなしてお洒落しているから、あんたには派手な着物あげる」

したら、

「ありがとうございます」

つて。二人をまた、そこに並ばしてね、雀には、

「あんたは親孝行だから、一生困らんようにね、倉の軒端でね、巢を作つて、それで、お米なんか食べてね、一生楽に暮らしなさい」

ちつて。それで、翡翠には、

「あんたは親に不孝する上にね、何も知らないから、あの川端居とてね、餌をあさつて、一生苦勞して暮らしなさい」ちつて、それで今だにほら、もう色もきれいだしね。だからカンジュヤーいうのは、たてがみさあね、あれのことを言うと思うよ、カーラカンジュヤーというのは。あの、クラー小とカーラカンジュヤーつて。

そんな話もう何べんも聞かされたけどね、年寄りには。うん。だから親を大事にしないと、自分がさういう目に合うからね、どんなことでもね、常識外れのことしたらいかんちつてね。まだ、五つ六つぐらいのとき、この話よく聞かされた



ね。そして、学校行つてから、結局はそれを学芸会でやるようになって、「ああ、この話はよく聞いたよ」して、だからね、

「この話とはとても大事だから、また、やることもね、みんな真面目に、一生懸命練習しなさい」

って、先生に言われた覚えがあるんだけどねえ。この話はよく聞いてる。うん、こういうのはね。だから、あんまり私も、長いことこっちにいなかったからさあ。おばあちゃんが忙しいから、たまーにしかこんな話、今みたいに電気点いているわけじゃないしねえ、夕方なつたらすぐ夕飯食べて、寝るだけでしよう。だから、そんなにはもう、うちの親はまた歳しかつたからねえ、夜遅くまで起きていたらバチ、バチだから。(笑い)

平成二年八月三日 通事美香・宮里英樹聴取 大川清子翻字 T164A1

## 四 クラーとカンジュヤー

中の町 町田宗勇（大正六年七月二五日生）森根

クラーというのは雀ね、カンジュヤーというのは鶺鴒せせり。あんな話もあつただけどね。でも、ちょっとだけしか覚えてない。よう、教訓は、人間はね、カンジュヤーというのは、鶺鴒は、非常にきれいさあね。うん、模様がきれいさあね。

それからまた、雀は、もう言えは着物に對したらほろほろでしょう。しかし、雀は、米を食べるね米粒食べるね。それから、カンジュヤーは、魚捕つて喰うでしょ。それで、親不孝か、孝行か、それは分からないけどね、その親がもう亡くなるとみて、早く来てくれと言つたらね、雀の方は、

「親おやぬミーウトウイすていから、早く行いきわるやさやさに家いかい（親が亡くなるんだつたら、早く行かないといけないんじやないか家に）」

んでいやーなかい（と言つて）、もう、機織つておつたがね、機織つておつたが、親の亡くなるといつて、これは早く行つたわけさあね。これ（布）作らんで。あんと、ほろほろなっているさあね。（それでほろを着ているさあねえ）

だが、翡翠はね、同じ機織っていたが、

「ああ、うれし、とうじみていからどう、うり着ちり行ちゆるでいやーに。(いや、この着物を織って仕上げから、これを着けて行く)。それ着てしか行けない」

と言って、それで、あれを織り上げてね、もう、着物を作って着て行ったら、亡くなつた。もう、その前に亡くなつてしまつて。それで、その遺言がね、遺言が、雀には、

「君はね、もう親孝行したからね、いつも倉の下に居てね、倉の下に居て、お米を食べなさい」

と言われて、それから、カンジュヤーにはね、翡翠にはね、

「君はもう、親のあれ(臨終)も見ないからね、君は、川端(かわがは)でいー歩(あ)でもし、魚(い)捕(と)つてい喰(く)わいー(川端で暮らしてもう、魚を捕つて喰いなさいね)」

んでい(つて)。こういう話もありました。これはもう親不孝者になつておるわけさ。親のもう最期のその、死ぬ間際のあれを、死ぬときには、最期のお水といつてあげるさあな。それができなかつたと、カンジュヤーは。また、あの雀はやつたつて。

平成二年八月三日 加島三史・平田明子聴取 大川清子翻字 T162A1

### ⑤ 雀ときれいな鳥

中の町 新崎カマド(明治四二年三年一五日生)北谷町

雀の話ねえ。また、もう一つの鳥は、川の水の上で遊んでいるわけさあ。きれいな鳥は、青くしてとつてもきれいな鳥は、青くしたり、赤くしたり、きれいな鳥がいるわけ。こつちの雀はもう、きれくはないけど、いっもお家の前で遊んでいるでしょう。だから(この雀が)、

と言つて、このきれいな鳥に言うたわけ。そうしたら、

「うちはまだ着物を仕立てているから、この着物を仕立ててから私は行きます」

と言つて。また、今度はこの雀は、

「私は着物は着けなくつてもいい。このままでいいから、親の死ぬのを見るのが当たり前」

と言つて行つたから、親の遺言が、

「お前は屋根の下の倉でお米を拾<sup>ひろ</sup>つて食べなさい。また、あのきれいな鳥は、川からすすんで〔自分で〕魚を取つて食べな

さい」

と言つて遺言<sup>いごん</sup>だそうだ。これは、うちのお父さんから聞いたさ。

平成二年八月三日 栗国実・久保田聡子聴取 宮城昭美翻字 T 160 A 5

### 36 クラーとカンジュヤー（お母さん）

團田 喜友名 春（大正八年九月五日生）嘉良川

クラーやよ、うまんかい印<sup>いん</sup>小ぬあしえーやー。白いのがあるさあ。

クラーんかいや雀<sup>すずめ</sup>りる言<sup>い</sup>んな。あれーあぬ、親<sup>おや</sup>ぬ印<sup>いん</sup>んでい、白<sup>しろ</sup>小<sup>こ</sup>や。（雀<sup>すずめ</sup>はね、ここに小さい印<sup>いん</sup>があるでしょう。白いのがあるさあ。クラーには雀<sup>すずめ</sup>と言うのか。あれは親<sup>おや</sup>〔孝行〕の印<sup>いん</sup>つて。〔雀<sup>すずめ</sup>の首のところにある〕白<sup>しろ</sup>いものは）

カンジュヤーや川<sup>がわ</sup>から、いつも川<sup>がわ</sup>の中<sup>なか</sup>から歩<sup>あ</sup>ちゅしえーやー。ありんよ、〔翡翠<sup>ひすい</sup>はいつも川<sup>がわ</sup>の中<sup>なか</sup>から歩<sup>あ</sup>くさあね、あれもね〕

「今、お母さんが、死ぬから、もう、重<sup>おも</sup>体<sup>てい</sup>だから早く帰<sup>かえ</sup>つておいで」

んち言<sup>い</sup>ちやくとつてー（と言<sup>い</sup>つたからね）、クラーは、カンジュヤーと畑<sup>はたけ</sup>して、嫁<sup>よめ</sup>さんになつて外<sup>そと</sup>に出<sup>で</sup>ているがね。だ、クラーは、そのまま、養<sup>やし</sup>着<sup>ぎ</sup>けまま、自<sup>みづか</sup>分の<sup>ぶん</sup>自<sup>みづか</sup>宅<sup>たく</sup>に行<sup>い</sup>つて

「お母さんの今死ぬところ見る」

言うて走って行くけど、カンジュヤーは自分の家で、もう、きれい着物着けて行くって、そつてもう遅くなっているでしょ。だからあの、クラーは、その裏着けたまま行つてからに、

「あんたはね、偉いから、親孝行だから、いつも人の米作る家で、米を拾つて食べて」  
遅く来たカンジュヤーは、

「あんたはもう親の不孝だから、いつももう、川の中で自分で何かも拾つて食べて」

言うて、あれは親の不孝だから、一日あんなして、川の中で、寒いときもあつちに行き、こつちに來して。クラーはもう、寒い時にも人の家に巢も作つて、ぬくぬくして、人が作った米を拾つて食べるって。あれは親の孝行って、この白い印は付いているって。こつちの羽は糞つて。畑からすぐ急いで来たから。裏着けまま親の所に行つたから、あれは親の孝行つて。それだけしか分からない

平成二年八月一九日 通事美香・萩堂剛聰取 石川小百合翻字 T110A6

### ㊦ カンジュヤーとクラー（姉妹）

諸見里 宮島真良（大正四年一月九日生） 諸見里

カンジュヤー（翡翠）というのは川辺におつたきれいな鳥だったよ。あれとよ、クラー（雀）はずうつと昔は姉妹だつたらしいですよ。ただ、おじー、おばーたちの話聞いたけどね。

ある親がよ、お母さんか、父さんかは分からんけどよ、病氣といたつた時に姉妹二人とも呼んだらしいですよ。呼んだらね、このクラーというのはすぐそのまま走つて行つて、親の看護をやつてね、親の孝行やつたらしいですよ。だけど、このカンジュヤーというのはね、まあ、今でいう化粧したりしてね、遅れて来たらしいよ。その間には親が亡くなつてしまつて。親の遺言と言いますかねえ、



と云つて、真先に、親孝行しに行つたらしいんだが。あの翡翠の方はね、非常に着飾って行かなければいけないということで、着飾って、青、青、白というふうな模様を付けた着物を着けて、親のミーウトウイ（臨終）に行つたらしいんだ。それから、

「いやーや、親め孝め者やくとう、とうーち倉ぬ梯上てい、米食でい育きよー（お前は親孝行者だから、いつも倉の梯上つて、米を食べて育ちなさい）」。

翡翠の方は、

「いやーや、親不孝な者やくとう、とうーち、あぬカークムイきじやーち食みよー（お前は親不孝な者だから、川をあさつて餌を取つて食べなさいよ）」

と言われたと。昔話。それで、あのカーラカンジュヤー（翡翠）は川の中からしよつちゆう歩いてるんだ。で、クラー小は、家ぬ倉なーりー（雀は家の倉の辺りから）飛んで歩いている。それに、クラー小は、染めてない認をはいたから、首の周りだけは白くしてる。

平成二年八月二日 平藏美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 6

## 99 雀は嘉利

池原 鳥袋シズ（明治四一年二月二〇日生）具志川市

伝えて私たちは聞いていたけどね、年寄りからは。クラー（雀）がたくさん集まったら、やっぱし、その家庭がたいへん幸福になるということをおっしゃっていたもんだから、それが、はっきり、うちも分らないけど、クラーがいたら、みんな喜んでいたんですよ。また、食べ物があるからね、お米なんか作つて、これを食べるためにたくさん集まってきたわけ。今は、お米なんか作らないでしょう。だから、あんまりないさあね、クラーというのも。クラーというのは、たいへんかりー（縁起がいい）な鳥で、雀であるということであつたんですよ、昔は。

昭和五五年五月一八日 池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ聴取 山内智子翻字 T 4 A 1

## 11 雨蛙不孝

## ① 雨蛙（カーク、カーク）

雨蛙、雨蛙分かる。雨降がたないねー、カーク、カークちゅって鳴くの、あれ雨蛙。え、あれはまた親の言うこと全く聞かない。な、横着なもんだで。

「今日や海んじ、潮汲でい来よー」

んでい言ねー反対に雨水汲でい来、うりから

「水えー無んくとう、雨水汲でい来よー」

んでい言ねー反対にまた、海ぬ潮、潮水汲でい来しーしー、親不孝にそーてるふーじやしが、うりが親ぬな一年とうてい亡しがたななくとう、「くりんかい、やるくとう言ねー、ちやーがすらー分からんくとう」んでい言やーに、親あ

「私が死にーねー川端んじ送りよー」

んでい。あんしーねー、あん言いねー、川端あらん所んじ送いくとうんちやてーるばてー親のー。

あんやしが親あ、あんしえー考げーらん、くりがー私あが言しえー反対にどう聞ちゅくとう、川端んじ送りよーんでい言りわるやるんでい言やーに、

## 登川 平田盛水（明治四一年六月六日生）登川

雨蛙、雨蛙って分かる。雨が降りそうになるとカーク、カークって鳴いているもの。あれを雨蛙というんだが。あの雨蛙はまた、親の言うことは全く聞かない横着者でね、親が、

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

と言いつけると、反対に雨水を汲んで来る。また、

「水が無いので雨水を汲んで来なさい」

と言うと、反対に海の潮、潮水を汲んで来たりして、親の言いつけを聞かない親不孝の者であつたらしいんだ。ところがその親不孝者が、親が年をとり死にそうになつたとき、「この子に、私の思いをそのまま告げると、どんなことをしでかすか分からない」と思つて、親は、

「私が死んだら川の側で葬つてね」

と言われた。そう言つておくと、川の側ではない所に葬るはずだからと親は考えて言つたわけね。

それで、親はこの時も「子どもが」素直に聞くとは思えないから、いつものように私が言うこととは反対のこ

と云つて、真先に、親孝行しに行つたらしいんだが。あの翡翠の方はね、非常に着飾つて行かなければいけないということで、着飾つて、青、青、白というふうな模様を付けた着物を着けて、親のミーウトウイ（臨終）に行つたらしいんだ。それから、

「いやーや、親め孝め者やくとう、とうーち倉ぬ梯上てい、米食でい育きよー（お前は親孝行者だから、いつも倉の梯上つて、米を食べて育ちなさい）」。

翡翠の方は、

「いやーや、親不孝な者やくとう、とうーち、あぬカークムイきじやーち食みよー（お前は親不孝な者だから、川をあさつて餌を取つて食べなさいよ）」

と言われたと。昔話。それで、あのカーラカンジュヤー（翡翠）は川の中からしよつちゆう歩いてるんだ。で、クラー小は、家ぬ倉なーりー（雀は家の倉の辺りから）飛んで歩いている。それに、クラー小は、染めてない糞をはいたから、首の周りだけは白くしてゐる。

平成二年八月二日 平藏美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 6

### 99 雀は嘉利

池原 鳥袋シズ（明治四一年二月二〇日生）具志川市

伝で私たちは聞いていたけど、年寄りからは。クラー（雀）がたくさん集まったら、やっぱし、その家庭がたいへん幸福になるということをおっしゃつていたもんだから、それが、はっきり、うちも分らないけど、クラーがいたら、みんな喜んでいたんですよ。また、食べ物があるからね、お米なんか作つて、これを食べるためにたくさん集まつて来たわけ。今は、お米なんか作らないでしょう。だから、あんまりないさあね、クラーというのも。クラーというのは、たいへんカリー（縁起がいい）な鳥で、雀であるということであつたんですよ、昔は。

昭和五五年五月一日 池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ聴取 山内智子翻字 T 4 A 1



## 11 雨蛙不孝

## ① 雨蛙（カーク、カーク）

雨蛙、雨蛙分かる。雨降がたないねー、カーク、カークちゅって鳴くの、あれ雨蛙。え、あれはまた親の言うこと全く聞かない。な、横着なもんだで。

「今日や海んじ、潮汲でい来よー」

んでい言ねー反対に雨水汲でい来、うりから

「水えー無んくとう、雨水汲でい来よー」

んでい言ねー反対にまた、海ぬ潮、潮水汲でい来しーしー、親不孝にそーてーるふーじやしが、うりが親ぬな一年とてい亡しがたなたくとう、「くりんかい、やるぐうとう言ねー、ちゃーがすらー分からんくとう」んでい言やーに、親あ

「私が死にーねー川端んじ送りよー」

んでい。あんしーねー、あん言いねー、川端あらん所んじ送いくとうんちやてーるばーてー親のー。

あんやしが親あ、あんしえー考げーらん、くりがー私が言しえー反対にどう聞ちゆくとう、川端んじ送りよーんでい言りわるやるんでい言やーに、

## 登川 平田盛水（明治四一年六月六日生）登川

雨蛙、雨蛙って分かる。雨が降りそうになるとカーク、カークって鳴いているもの。あれを雨蛙というんだが。あの雨蛙はまた、親の言うことは全く聞かない横着者でね、親が、

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

と言いつけると、反対に雨水を汲んで来る。また、

「水が無いので雨水を汲んで来なさい」

と言つと、反対に海の潮、潮水を汲んで来たりして、親の言いつけを聞かない親不孝の者であつたらしいんだ。ところがその親不孝者が、親が年をとり死にそうになつたとき、「この子に、私の思いをそのまま告げると、どんなことをしでかすか分からない」と思つて、親は、

「私が死んだら川の側で葬つてね」

と言われた。そう言つておくと、川の側ではない所に葬るはずだからと親は考えて言つたわけね。

それで、親はこの時も「子どもが」素直に聞くとは思えないから、いつものように私が言うこととは反対のこ

「川端んじ送りよー」

んでいちやくとう、うぬ親不孝者お、

「今んとうーや、親ぬ言しん反對し、親ぬ言しどく

とーしえーねーんくとう、今ねー、親ぬ言らつてーる

通い、川端んじどう送りわるやる」

んでいち、あんさーに、川端んじ、送ていさるために、

雨降いがたないねー、

「私親あ水ぬけー流さらのーあがやー」

でいち、心配しカーク、カークし鳴ちゅんでい。うぬ

話ん聞ちやる。

注 ①カーク、カーク・・・雨蛙の鳴き声。

②「潮を浚んでおいで」・・・海の潮は、主に豆腐を作るときに、

豆腐を固まらせる凝固剤として使用していた。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T 15 A 14

としかしないはずだから「川の側に葬りなさいね」と言  
わなければならぬと思つて、

「川の側で葬りなさいね」

と言ひ残した。すると、その親不孝者は、

「今までは親の言いつけに反對のことはかりして、親に

言われたことを素直に聞かなかつたので、この時ばかり

は親の言われた通りに、川の側で葬つてあげよう」

と思つてその通りにした。そうして川の側で葬つたため、

雨が降りそうになると、

「私の親は川の水で流されないかなあ」

と心配してカーク、カークと鳴くんだよという話も聞い

た。

## ② (ガークガーク)

登川 仲宗根カナ(明治三〇年二月三日生) 登川

くふあはてーるばてー、あんしるー、

「いやーやけー死ぬる場合や、川端んじ送ていとうら  
しよー」

りやーに。親め言へー聞かんなやーに、子んけーやな口  
やるばてー。

「私がけー死ぬる場合や、川端んじ送りよー」  
んり言やつたぐと、

「おー」  
んり言やーに、けー死じえーちく、「私たー親あーうぬ

さ、うりやてーい。生ちちめーる聞け、ちよん、うぬ  
肝ひがしふあんでーるむん。今やな、けー亡はつとー  
くとう、うりー川端んじ送い」やたんり。

あんしえーちく、雨ぬ降てーちく、「私たー親あけー  
流りはやー」し鳴ちゆちんどーりる話や聞かはつてー

たん。うぬガークガークや、あんでーちんどーり。あん  
すくとう、親め物うぬ言ひえー、むる、人ぬむのーあ  
らんでいんどー、わらばーたー。うぬふーじーるーやっ

ちんどーでい。雨降いがたーないねーうぬガークガーク  
ガークーし、「私親あけー流りはやー」し鳴ちゆてーち

(親子の) 仲が悪かったんだろうね、だから、

「お前は、私が死んだら川の側に葬むつてちょうだい  
ね」

と言われて。親の言うことを聞かないので、子どもに悪  
い乱暴な言葉をはいているわけさあ。

「私が死んだら川の側に葬むつてちょうだいね」  
と言われたから、

「わかった」  
といつて。親が亡くなったので、「私の親は生きている

時にあのように言っていたし、生きている間は、満足さ  
せることができなかつたから、今はもう、亡くなってし  
まつたから、言われた通りに川の側に葬ろう」と葬った。

そうしたら、雨が降ると「私たちの親は流されてしま  
うねえ」と鳴くんだよという話は聞かされていた。その

ガークガークして鳴くのは、そういう意味があるんだよ  
つて。だから、親が言われることは、人ごとの話ではな  
いんだよ、子どもたちよ。そのようなことがあったから

なんだようつて。雨が降りそうになると、ガークガーク  
ガークーと「私の親は流されてしまうねえ」といって鳴

んでーでい、いる話どう聞かはってーたんどー。

くんだつてよ、という話を聞かされていたんだよ。

昭和五五年五月一八日 富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子 山内智子翻字 T2A6

③ (カーラコッコ)

昔、親不孝の子がいてね、その子が、親の言いつけを聞かないで反対ばかりして。親が「あっち行きなさいの」、こっちに来て、「こっち来なさいの」あっちに行つて、親と反対した子であつたからね。

もう、その親が死ぬ時にはね、「川端んじ送りよー」でいち、言ちきーねー陸んじ送いんねー考えやーに、あんさーに

「川端んじ送りよー」

でいちゃくとう、うにーや、本当ぬ心いじやー、川端んじ送やーに、うにーから、カーラコッコでい鳴くんり。くつさぬ話聞ちよーびーさー。あんすくとう「親ぬいやぎーゆー聞きよー」んち。

登川 仲宗根カメ (明治四二年六月二三日生) 登川

反対ばかりしていた。親が「あっち行きなさい」というと、こっちに来て「こっち来なさい」というとあっちに行つて。親に反対する子であつたからね。

もう、その親が死ぬ時にはね、「川端で葬りなさいね」と言いつけると陸で葬ってくれるだろうと考えて、それで、

「川端で葬りなさいね」

と言うと、その時は素直な心で聞き止めて、川の側に葬つたので、その時からカーラコッコと鳴くんだつて。それだけの話を聞いているんですよ。だから「親のいうことはよく聞きなさいね」と。

昭和五五年五月一八日 遠藤庄治・大城直樹・幸喜愛 山内智子翻字 T1B6

## ④

昔親ぬけー亡ちやくとう、墓あなー川端んじしか送らん、川端んじる送てーくとう、大雨ぬ降てい水ぬ出じーねーな、うぬ墓ぬ流りーねー親ん流さりーんり言やーにる、うり心配しるあんしん・・・。

昔、親が亡くなったので、墓はもう川端でしか葬れなくて、川端で葬っているが、大雨が降って、川の水が氾濫したら、その墓が流されてしまうと親も一緒に流されてしまふといって、そのことを心配して、あのように〔鳴いているって〕。

昭和五五年五月一八日 大本敬子・西江美智子聴取 山内智子翻字 T1B3

## ⑤ アマガカー

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

① アマガカーね、アマガカー分かいんでしよう。雨が降りがたに鳴く蛙、あれはもう親不孝で、親の言うもの全部反対で言葉を返しよったと。そしたから親は、「これは自分の言いつけに、もう何でも反対で言うから、これには、反対に言うたら真面目に言うでしよう」と思ってね。

「もし、私が死んだときには、川端に行つて葬りなさい」と思ってね。そうやったら、親がそう言えば立派な所に、葬るんでしようと思つて、親は、そう言うたつて。

そしたから、そのアマガカーはね、これは、

「私は親のいるときは、不孝したから、死んでからでも孝行やろう」

と言つて、親の言うとおりに、よく守つて、川端に親を葬つたつて。そうやつたから、大雨が降つたら、親の棺も一緒に流れてしまつて、もう、親が流れてしまつて、なくなつたから、もう苦しんで、雨降りには、またも親が、流れはしない

かと言うて鳴くって。昔の子どもは、親の言うものは、逆に考える人もいるし、また、死んでから親の孝行をやりたいと思っても、死んでからは、親孝行にはならないという。これは、生きている時の孝行しか孝行にはなれないという、こんなしつけの話だったんですよ。

注 ①アマガカー・・・蛙のこと

昭和六〇年八月二二日 辺土名初美・仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T 12 A 11

⑥ カーラコッコ

登川 仲宗根フミ（明治四二年七月一〇日生）登川

あれは、親不孝者で、親の言うことを、普段は聞かない。これは反対者だから、もし、これに、どっかのいいところに私を埋めなさいと言ったら、悪いところに持って行くからと言って、それで、

「私が死んだら、川端に埋めなさい」

と言ったので、これは、

「今までは、親のことを聞かなかつたから、今度は聞いてあげる」

と言って、川端に、親の死体を持って行って埋めたので、「親が今までの反対のことを、私に言い聞かせてあったんだね」と思って、それからは気づいて、雨降りになったらもう、

「私は、これまでも親不孝になるかねえ」

と言って、あれは、雨降りそうになったら親のことを思って鳴くそうだという、そういう意味の話だったよ。

また、カーラコッコ チビトウガイ

イヤーガ ナチネー アミフユンドー

ナーカイアイネー アミハリユン という歌もあったよ。

昭和六〇年八月二六日 仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T 13 B 3

## ㊦ アマガク（ガークガーク）

アマガクぬガークガークすしえーや、鳴ちゆしえーや、雨降いがたないねー、ガク、ガク、ガク鳴ちゆしえーや、とーうりがむのーうりやるばーてー。

アマガクんでいるむのー、アタピチャーなかい似ちよーるーむぬ、うぬ、アマガクんでいしえーやーな、でーじな、反対、反対がんでーるば。まとうむねー、まとうむねーむる聞かんや、親ぬ、ぬーしくー、

「水汲でいくーよー」

んでいーねー、あらん物、あらん物取つちちえーしーしーしな、むる反対、反対しなくぬアマガクやてーるふーじ。人ぬ言しえー聞かんでーるばーてー。あんさーに、どうくな反対がんでさくとう、うぬ親やよー、なーかんねーる重えな、くれーな、親ぬ物言しん聞かん、あんしよーるむん、にーかやや、にーかー私が亡しーねー、亡しーねー反対に言ろわるや、くりがー上等ぬ所んけーな、し、とーうらするむん、でい言やーに、あんさーに、

「とー私が死にーねーや、川端ぬや、川端ぬ穴んけー埋みりよー」

## 知花 鳥袋タケ（大正七年九月一日生）知花

雨蛙がガークガークするでしよう、鳴くでしよう。雨が降りそうになるとガク、ガク、ガクと鳴くでしよう、それにはこんな話があるわけさ。

雨蛙というものは蛙に似ていて、その雨蛙というものはね、もう、たいへんな反対、反対のことばかりする者であつたわけ。まともには、まともには何も聞かないで、親が、

「水を汲んできなさい」

と言いつけても、違うのを、全く違う物を持って来たにして、すべて反対、反対のことばかりをその雨蛙はしていたようだ。人の言うことは素直に聞かなかつたわけさあ。それで、あまりにも反対のことはかりするので親はね、もう、こんな子どもはもう、親の言うことも聞かないで、こんな奴は私の死後、私が死んだあと、死んだら反対のことを言っておかないと、この子がは私を上等の所に葬ってくれないだろうと思つて、それで、

「ねえ、私が死んだらね、川端のね、川端の穴に埋めなさい」

と言われたらしいさ。そうしたら、その時から子どもの

でい言やっつていよー。あんすぐとう、うにーから肝おけー治やーにや、とーなり、親やあん言らりてーひんな、まんけー送らわどうないさやー、んでい言やーに、川端ぬ所んけーうぬ親や埋みてーるふーじ。

あんさくとうなり、雨ぬ降てい大水ぬなー出じーねー、「私達親やなり、けー流らさつてーさやー、な、今時分のー、な、けー流らさつてーさやー」

んでい言やーにどう、雨降いがたないねーガク、ガクし鳴ちゆんでい。ガークー、ガークーし。うぬアマガクんでいしえー、うんぐとうーぬ、やたんどーでいち話あたるばー。あんしる人ぬ言し聞かんしえーや、「アマガクとーゆぬむん」でい言らりーたんよー。昔ん人おあん言いたさ。

「いやーや、アマガクでーひん」でい言やりーたんよ。あんしやんだりーたさ。

気持ちには治つてさ、親はあのように言われていたから、もうそこに葬らないといけなねえと、川端の所に親を葬つたらしいさ。そうしたら、雨が降って大水になると、「私たちの親はもう流されてしまったんだろうねえ、今ごろはもう、流されてしまったんだろうねえ」

と言って、雨が降りそうになるとガク、ガクと鳴くんだけ、ガークー、ガークと。そのアマガクというのは、こんなだったよといって話があつたわけ。だから、人の言うことを聞かない人のことを「アマガクと同じだね」と言われていたよ。昔の人は、そのように例えていたよ。「あなたはアマガクだ」と言われていたよ。そんな言われよつたさ。

昭和六一年七月九日 宮里信勇・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 26 A 8



## ⑧ アマガコー（カークカーク）

知花 栄野比トヨ（大正五年七月一二日生）池原

でーじな、反対者やたんでいへーや、反対。あれー  
 なー何やていんむる反対んけーすたんでいアマガコー。  
 な、何やていん言ちきーるうつきーむる反対んけーさー  
 に、あんさーになー、今度おな、親が病氣さくとう、  
 くれーなー反対んけー言らんねーやーならんむんでい、  
 「いやーや私がやー、くぬ病みうてい亡しーねー、川  
 端んじ送りよーやー」

んでい言ちやくとう。あんしーねーなー、かーま上ぬ毛  
 んじ送いがふらーんち

「川端んじ送りよー」

んでい言ちやくとう、

「おー」

んでい川端んけー送たくとう。なー、雨降いがたな  
 いねー、「あいえなー、わったースー、アンマーや、  
 なー、川端んじどういつちめーひがなー大水出じー  
 ねーなーけーちかいはやー」、でい思やーに、うにーか  
 ら雨降いがたないねーカークカークしあびーたんでい。  
 うぬアマガコー、でーじな、うり、反対やたんでいよー。  
 むる反対んかいどうふたんでい。

たいそう反対のことはかりする者であつたていうさ  
 あねえ、反対者。あれはもう、何をするにしてもみんな  
 反対のことばかりしていたんだつてアマガクは。もう、  
 なんでも言いつけられるものはすべて反対のことばかり  
 して、そしてもう、今度はおな、親が病氣になつた時に、  
 これにはもう反対のことを言わないといけないと、  
 「あなたは私がね、この病氣で死んでしまつたら川端で  
 葬つてちょうだいね」

と言つた。そう言うたらずうつと上の原つばで葬つてく  
 れるだろうからと思つて、

「川端で葬りなさいね」

と言つと、

「はい」

と言つて、川端に葬つたそうだ。そうしたら、もう雨が  
 降りそうになると「ああ、どうしよう、私たちのお父さ  
 んやお母さんはもう川端に葬つてあるから、大水が出た  
 ら水びたしになつてしまふねえ」と思つて、その時から、  
 雨が降りそうになるとカークカークして鳴いていたつて。  
 そのアマガクはたいへん反対者だつてよ。全部反対は

かりしよったって。

昭和六一年七月十日 宮里信勇・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 27 A 9

⑨ アマガクガークー（カークーカークー・アンマー）

宮里 上根ウサ（明治三二年二月五日生）与那城町

女ぬ親とう居てー。あんさーに、うぬ男ん子あなー、

アンマーや豆腐さーやちが、

「えー、いやー潮汲でい来よー」

でい言ねー、水汲でいちつち、むる反対なてい。また、

「水汲でい来」

んでいえー、潮汲でいちつち、「はあー、くぬひやーや、

私が亡ちえーからー、陸ぬ墓んかい葬式しんでい言ねー、

クムイんかいどう葬式えしゆるむぬん」でい思やーい、

反対やくとう。あんさーい、くりうつてーなー、反対

えーなてーねーぬ。「しゅーや、お母や、くりうてーな

らんくとう、いやー、亡さわ、ちようどうクムイんでい、

陸んかい」ちけーちゅーや反対なていし、

「クムイんかい葬式えし、よー」

んちやくとう、反対なやーい、クムイんかい葬式えさー

にや、あんさーアンマー流りていねーぬばー。あんさー、

アマガクガークーや、うりが雨降らんでいしーねーカー

〔息子が〕母親と息子が一緒に住んでいた。その息子のお母さんは豆腐作りをするので〔息子に〕、

「ねえ、お前、潮水を汲んで来なさい」

と言うと、水を汲んで来て、みんな反対なことばかりを

していた。また、

「水を汲んで来なさい」

と言うと、潮を汲んでくるので、「まったく、こいつは私

が死んだら、陸の墓に葬りなさいと言うと、池に葬るだ

ろう」と思った。（いつも）反対のことばかりしていた

から。ところが、今度ばかりは、反対のことはしなかつ

た。「お母さんが、今度ばかりはもう治りそうもないか

ら、私が死んだら、池と言ええ、陸の方に葬ってくれる

だろうから」と思って、

「池に葬りなさいね」

と言つたら、思いとは反対に言われた通りに池に葬った

からね、お母さんは流されてしまったわけ。それで、ア

クーカークー鳴ちゆしえー「はあー雨降る。私アンマーや流りてい行ちゆさやー」んでい言ちぬカークーカークーや鳴ちゆんどーでい。

うぬ話え、うれー誰からん聞かんむん。私達揃てい、話会どうちゆるむん。島ういや、夕飯食でいから、けー隣かい行じやーに。あんさーうれー、親子男ん子居るうったーからさーに、あぬ、アタビーがや雨降らんちんじ鳴ちゆしえー「雨降らんちやー、私親あ流りーさやー」でい、うぬ事さーい、カーク、カーク鳴ちゆんでい。

注 ①島・・村里・部落のこと。ここでは、話者の出身地である身那城村宮城島池味のこと。

平成二年三月一日 豊岡早苗・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T47B6

## 四 アタコー（カーク、カーク・アンマー）

男ん子とう、女ぬ親とう居しが、女ぬ親あ豆腐さーやてい、

「潮汲でい来」

でー、水汲でいきつち、「くぬひやーや、あとー私が亡へーからー、陸んかいそーりーんでい言や、クムイんか

マガクカークーが、雨が降りそうになるとカークカークーと鳴くのは、「ああ、雨が降る。私のお母さんは流されていくんだね」といつて、カークカークーと鳴いているんだよと。

この話は誰からも聞いてないよ。私たちは、皆揃って話会をするんだけど。島にいる時は、夕飯を食べてから隣近所に行つてね。そして、この話は、親子、男の子が居たという話から、蛙が雨降りそうなときに鳴くのは「雨が降っている。私の親は流されてしまっえ」と、その心配でカーク、カークと鳴くんだった。

## 宮里 上根ウサ（明治三二年二月五日生）身那城町

男の子と母親がいるが、お母さんは豆腐作りをする人で、

「潮を汲んできなさい」

と言うと水を汲んで来るので、「こいつは、私が死んだら、陸に葬りなさいと言うと池に流して、また池に葬り

い流らちゆくとう、またクムインかいそーりんでい言  
やー陸んかい置くとう、むる反対どうやくとう、あん  
さーに

「どー、今日やならんくとうや」

クムインでいえーからーまた、陸んかい置ちゆでい思  
やーなかい、潮汲でい来んでー水どう汲でいちゆーくと  
う、あんさーに、な、うぬ子んかいな、クムインで  
いえー陸んかい置ちゆん考えーさーに、

「どー私のークムインかい置きよー亡はば」

んじやなーかー。あんさーうりん、反対やならんくーと  
うーうぬ子あアンマーやクムインぬ端んかい置ちやくと  
う、雨なかい流らあ、ふたぐとう、流らさつていねーら  
ん。あんさー、うぬ子んでいうる者おな、

「私アンマーや、やー、陸んかい置ちよーけーやたるむ  
ん。なクムインでい言たくとう、クムインかい置ち  
やーに、側なかい置ちやーい流らさつてい」

雨ぬ降れ「私アンマーや流りーさやー、カーウ、  
カーウ、カーウ」んでい。雨ぬ降らんでいちやアタコ  
鳴ちゆんどー。

注 ①アタコ・・・蛙のこと。

なさいと言えは陸に葬つて、すべて反対のことばかりす  
るだろうから」と思つて、

「もう、今日で死んでしまふからね」

と。池と言えはまた陸に葬ると思つて。潮を汲んできな  
さいと言えは水を汲んでくるので、それで、もう、その  
子どもに池といえは陸に葬つてくれるだろうと考えて、

「ねえ、私が死んだら池に葬りなさいね」

と言つた。だけど、その時は反対はできないので、その  
子どもは、お母さんを池の側に葬つたから、雨で流され  
てしまった。そうしたもんだから、その子どもという者  
は

「私のお母さんは陸に葬ればよかつたのに。もう池に葬  
りなさいと言つたから、池の側に葬つたら流されてしま  
つた」

それで、雨が降ると、「私のお母さんは流されてしま  
うね、カーウ、カーウ、カーウ」と鳴くんだった。雨が  
降りそうになると蛙は鳴くんだよ。

## 田 (アンマー)

豆腐さー、親あ。親子あんさーに、

「とーいやーやや、潮汲でい米よー」

んでい言ねー

「うー」

んでい言やーに水汲でいちつち、

「とーいやーやや、水汲でい米わー」

んでいえー、また潮汲でいちつち。

「はー、くぬひやーがーなー、あとー私ぬん死にーねー  
海んかい、クムインかいどう流すらー分からんくとう」

んでい、反対言葉言やーにや、クムインでい言ねー陸ん  
かい置ちゅーや。あんさーな自分ぬ親ん正直反対言葉言  
やーに、

「私ぬん死にーねークムイぬ端んかい置きよー」

んでい言ちやくとう、

「うー」

んでい言やーなかい、なー陸んかい置かんぐーとうー、  
クムイぬ端んかい置ちゅーに。雨ぬ降たぐとうアンマー  
流りていねーらな。あんさー雨降いなれーな、

「私アンマーや、やー、雨降いしが」

宮里 上根ウサ（明治三二年二月五日生）与那城町

豆腐作りをしている親子がいたって。そうして、

「さあ、あんたは潮を汲んで米なさいね」

と言うと、

「はい」

と言って、水を汲んで来る。

「さあ、あんたは水を汲んで米なさいね」

と言うと、また潮を汲んで来る。

「ああ、こいつは私が死ぬと海や池に流すかも知れな  
い」

と、反対の言葉を言つてね。池と言うと陸に葬つてくれ  
るだろうと思ひ、そうして、親は本当の気持ちとは反対  
の言葉を言つて、

「私が死んだら池の側に葬つてね」

と言つたら、

「はい」

と答えて、もう、陸には葬らないで、池の側に葬つた。  
雨が降つたら、お母さんが流されてしまったので、それ  
で、雨が降ると、

「私のお母さんはねえ、雨が降ると流されてしまうよ」

んでいち鳴ちゅんでい。

と言って鳴くんだって。

平成二年七月六日 宮城昭美・宮里信勇・上門博之・武鳴昭子聴取 宮城昭美翻字 T 79 A 15

## ㊦ カーラッココイ（カーラクックイ・お母）

高原 鳥袋サゲ（明治三六年九月五日生）高原

蛙はね、お母<sup>おぼ</sup>思<sup>おも</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>や。お母<sup>おぼ</sup>思<sup>おも</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>、あ  
んすくとう、あぬカーラッココイよ、川<sup>かわ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>側<sup>がわ</sup>な<sup>な</sup>ー<sup>り</sup>り、  
① アタ<sup>あ</sup>ビ<sup>び</sup>ー、カーラクックイ、カーラクックイ、鳴<sup>な</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>し  
② エーや。あれはね、何<sup>なに</sup>や<sup>や</sup>が<sup>が</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>ー<sup>ね</sup>や、あれはね、  
「私<sup>わたし</sup>達<sup>たち</sup>親<sup>おや</sup>や、川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>送<sup>おく</sup>て<sup>て</sup>ー<sup>し</sup>が、雨<sup>あめ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>降<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>ねー<sup>流</sup>さ  
りー<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>。カーラクックイ、カーラクックイ」

んちや<sup>や</sup>、あんし、うにカーラッココイでいしエーや、  
うぬ時<sup>とき</sup>からよ、あぬ川<sup>かわ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>側<sup>がわ</sup>な<sup>な</sup>ー<sup>り</sup>りカーラッココイち  
あびーんでい。

嘘<sup>うそ</sup>物<sup>もの</sup>言<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>ー<sup>な</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>、親<sup>おや</sup>が<sup>が</sup>死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>時<sup>とき</sup>には、平生<sup>へいせい</sup>は<sup>は</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>  
き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>たら<sup>ら</sup>海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>し、海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>  
つ<sup>つ</sup>たら<sup>ら</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>し、そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>嘘<sup>うそ</sup>つ<sup>つ</sup>いた<sup>いた</sup>から、

「私<sup>わたし</sup>が<sup>が</sup>死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>きは、川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>置<sup>お</sup>きな<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>ね」

で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>言<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>やく<sup>く</sup>とう、そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>には<sup>は</sup>誠<sup>まこと</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て、川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>置<sup>お</sup>  
いたら、

蛙はね、お母<sup>おぼ</sup>さん<sup>さん</sup>思<sup>おも</sup>いで<sup>で</sup>ね。だからね、あのカーラコ  
ッコイ<sup>こ</sup>さ、川<sup>かわ</sup>の<sup>の</sup>側<sup>がわ</sup>辺<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>から、蛙<sup>か</sup>が<sup>が</sup>カーラクックイ、カー  
ラクックイ<sup>こ</sup>つて<sup>て</sup>鳴<sup>な</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>で<sup>で</sup>し<sup>し</sup>ょう。あれは<sup>は</sup>どう<sup>う</sup>して<sup>て</sup>か  
と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>ね、あれはね、

「私<sup>わたし</sup>たち<sup>たち</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おや</sup>は<sup>は</sup>川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>葬<sup>おぼ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>が、雨<sup>あめ</sup>が<sup>が</sup>降<sup>ふ</sup>ると<sup>と</sup>流<sup>なが</sup>さ<sup>さ</sup>れ  
て<sup>て</sup>しま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ね<sup>え</sup>。カーラクックイ、カーラクックイ」

と<sup>と</sup>鳴<sup>な</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>ね、そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>で、カーラッココイ<sup>こ</sup>という<sup>う</sup>のは<sup>は</sup>ね、そ  
の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>から、川<sup>かわ</sup>の<sup>の</sup>側<sup>がわ</sup>辺<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>から<sup>ら</sup>カーラッココイ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>鳴<sup>な</sup>くん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>つ  
て。

嘘<sup>うそ</sup>つ<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>から、平生<sup>へいせい</sup>は<sup>は</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>たら  
海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>し、海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>たら<sup>ら</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て、い  
つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>嘘<sup>うそ</sup>つ<sup>つ</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>いた<sup>いた</sup>から、親<sup>おや</sup>が<sup>が</sup>死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>きは、

「私<sup>わたし</sup>が<sup>が</sup>死<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>ら、川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>葬<sup>お</sup>り<sup>り</sup>な<sup>な</sup>さい<sup>い</sup>ね」

と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>ので、そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>には<sup>は</sup>素<sup>す</sup>直<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て、川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>に<sup>に</sup>葬<sup>お</sup>つ<sup>つ</sup>た  
から、(雨<sup>あめ</sup>が<sup>が</sup>降<sup>ふ</sup>ると<sup>と</sup>親<sup>おや</sup>が<sup>が</sup>流<sup>なが</sup>され<sup>れ</sup>ると<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>鳴<sup>な</sup>いた<sup>いた</sup>ので)

「カーラコッコイが鳴くときに、また雨降るよー」  
 って言よったのは。

この道理は始めは蛙が嘘つきだったからね、山に行きなさいと言う時には、海に行くし、海に行きなさいと言つたら山に行くし、したら、私が死ぬ時にはくれー反対みだから、

「川の側に置きなさい」

と言つたら、その時に誠になつて、川端かわはたに置いたら、

「もう、私の親おやあむち流ながえらさんがやー」

と言つて、カーラコッコイ、カーラコッコイこいって言って、鳴くなくいって。昔の人はカーラコッコイが鳴くときに、「また雨降るね」と言よったさ。その意味だよ。

注 ①アタビー・・・蛙、またはおけらのこと。

②カーラクックイ・・・蛙の鳴き声。

「カーラコッコイが鳴くとまた雨降るよう」  
 って言いよった。

その話の始めは、蛙が嘘つきだったからね、山に行きなさいと言うと海に行くし、海に行きなさいと言つたら、山に行つて、こいつは反対のことばかりするので、私が死ぬ時には

「川の側に葬りなさい」

と言つたら、その時は素直になつて、川端かわはたに葬つたので、「もう、私の親は川の水で流がされてしまわなにかねえ」

と言つて、カーラコッコイ、カーラコッコイと鳴くんだけ。昔の人は「カーラコッコイが鳴くときには、また雨が降るね」と言いよったさ。その意味だよ。

平成二年七月六日 平良真也・大川清子・豊岡早苗・与那嶺昭郎・富平恵智子聴取 宜保勝翻字 T 84 A 3

13 蛙（カークカーク・お母さん）

越来 高島邦子（大正二年八月一六日生）名護市

蛙はね、親不孝でね、この子どもはねあんまり親孝行でなく、親といつても反対物言いしよったって。親がこう言うたら、この子どもはまた親に反対物言いしてね、反対に言葉使って。そう、こうしたからね、だからこの親がね「あなたは孝行者じゃないからね、私が死んだら墓は浜辺に造りなさい」と。潮のくる所に造りなさいって。あつちで。

蛙はカークカークして鳴くでしょう、蛙は親不孝者といつて、この子どもがねえ、お母さんが言う言葉をね反対にみんな使ってしまったよ、このお母さんは、とつても、もう、悔しかったんでしよう。だから、いつも喧嘩でなかったかねえ。そしたら、

「あんたは親不孝者だから私が死んだら浜辺、潮の満つ所、あつちに私を埋めてちょうだい」と言うたさあ。あつちに墓造つてきてちょうだいと言ったらね、この蛙はいつでもね、カークカークして、この潮、内際でね鳴きよったって。それが、この子どもなつてないかねえ。子どもはもう、心配して、お母さんあつちに埋めたけどもう、いつでも、心配しているんじゃないかねえ。

平成二年八月二日 照屋京子・有銘和江聴取 宮城昭美翻字 T132 B 2

14 (カークカーク・お父さん、お母さん)

安慶田 屋宜カメ（明治四一年一月一〇日生）安慶田

あぬー昔さ、お父さんとお母さんが亡くなったが、お墓が、なかったかねーどんなか分からんけど、川の側んじ、またうぬお母さんもお父さんも、此処んじ葬ったく

あのう昔さ、お父さんとお母さんが亡くなったが、お墓がなかったのか、どんなか分からんけど、川の側で、そのお母さんも、お父さんも、そこで葬ったから、



とう「ああ、雨が降りそーやるむんなー、雨ぬ降いるむん、ちやーすがやーなー、私達親あくぬ水にけー流さりーねーちやーすがやー」

んち、あんしガークガークーしあびーんでいさんちる、話あたる。

「ああ、雨が降りそうだねえ、雨が降るのにどうしようかねえ、私達の親は川の水で流されてしまったら、どうしようかねえ」

って、それでいつもガークガークーして鳴くという話があったよ。

平成二年八月二〇日 平良真也・新田尚子聴取 照屋京子翻字 T120 B3

#### ㊦ アマガクー（ガークガークー）

中央 湧田トミ（大正五年一二月二五日生）嘉良川

親の言うことを聞かない人のことをガーシュー（意地っ張り）と言うわけさ。ガーシューな者だから、聞かないでね、何時も、親の言うことに反対していたって。だから親が死ぬときに、「私は川端に埋めてねえって言ったらね、これ反対に上上げるはずだから」と思ってね、アマガクー（あまのじゃく）だから。言うことを聞かないからね。

「川端に埋めてねえ」

と反対に言った。そうしたら、

「今まで言うことを聞いてないから、元気なときにはお母さんの言うこと聞かなかったから、今度は言うこと聞く」

と言って、川端に埋めたって。だから、雨が降ったらこのアマガクは、埋めた親を心配してガークガークーして鳴くって。

平成二年八月一九日 謝敷勝美・平安名邦裕聴取 石川小百合翻字 T116 B1

Ⅷ (カライコッコ)

室川 新城安平(大正二年二月二日生) 今帰仁村

「浜辺に葬式しなさい」言うたら、川の側にやる(葬る)。(親が言うことに) 反対だからね、浜言ゆたら海、海言ゆたら川という子だから、だから「海の側に葬式しなさい」と、これの親が言ゆたら反対だから、川の側でやった(葬った)わけ。そしたら、今でも蛙はね、雨降りそうになったら、「自分の親は流されはしないか」言ゆて、いつもカライコッコ、カライコッコと鳴くそうや。

平成二年八月二日 通事美香・仲里香聴取 宮城昭美翻字 T 143 A 3

Ⅸ 雨蛙

胡屋 島 千代(大正四年一月一日生) 胡屋

雨蛙は親が右といったら左、左といったら右、上と言ったら下ってね、反対者だったって。それでね、最後になったら、親が死にそうになつたらね、これは私とずつと反対しているから、「川端かわはたに埋めなさいねえ、葬ってちようだいねえ」と言つたら、反対に上の方のいい所に葬ってくれるはずだけどと思つて、最後に(親が)「こう言つたからさ、(子どもは)、「最後に親の言うことを聞かないといけない」

というので、お互いに親も子もこうなつたわけであるって。これ聞いた覚えがあるわけさあねえ。それで、親のいうことを聞かないといけないという意味で川端かわはたに葬つたから、大雨の時は鳴くでしょう、あれは。だから、「私の親はもう、雨が持ち流らすん筈はずとーやー(雨が流してしまうだろうねえ)」と思つて鳴くって。あんな話聞いた覚えがあるんだけどね。本当か嘘か分からないけど私は。

平成二年八月一九日 照屋京子・岸本かおり・田本かおり聴取 宮城昭美翻字 T 102 A 7

## 四 蛙（親父）

胡屋

知念真章（明治四二年三月二〇日生）嘉手納町

蛙の子どもがとても親不孝者でよ、「水汲んで来い」と言ったら潮汲んで来るし、「潮汲んで来い」と言ったら水汲んで来るし、もう、親父がよ、

「自分が死んだら、川の縁に埋めなさい」

と言った。（そしたら、蛙の子どもは）もう自分は親不孝したから、死んでからは親孝行せんといかんて、その川の縁に葬ったら、大水が出てきて流されてよ、それで泣いたというような話。本当か嘘か私にも分からん。

平成二年八月一九日 諸喜田綾子・嘉陽田尚行聴取 宮城昭美翻字 T 101 B 13

## 四 アマガク（ガーク・ガーク・親父）

中の町

山城清輝（大正一二年五月二七日生）嘉手納町

蛙、蛙だと思ふ。あれにアマガクと言つとつたがね。雨降りの時にガーク・ガークして鳴くんだよ。それでそのアマガク（雨蛙）の話をされたんだがね。

昔、ある放蕩息子がね、親の言うことはちつとも聞かない息子がおつたらしいんだなあ。それで、もうとにかく親が言うこと反対のことをするわけだ。東に行けと言つたら西に行くと。砂糖買って来いと言つたら、塩を買つて来るといふうな、そういうたぐいの反対のことはっかりしないへーへー者（いい加減な奴）がおつたそうだよ。それでねえ、もうこの親父は死ぬ間際に大変心配してね、これはもう将来どういふことになるか、私が死んだ後ね、どんなことするかなあといつて大変心配しながら、そして、

「私が死んだらね、死んだら川の側にね、川の側に墓を造つてあそこに葬りなさい」

と。そう言えば、川は溢れてあれは大雨のとき大変でしょう。だからね陸に、いわゆるそのう陸地の方に造りなさいと言

つたら、これはもう、また、反対のことするかといつてさ。逆のことを、

「川の側んかい、私墓あ造とばや〔川の側に私の墓を造つてくれ〕  
と言つたそうだ。」

そうしたら、この息子は、生ちちよーる間ちやー親んかい反対ぬくとばつかししてきたから、今からんちよん、親ぬ死じらんちよん、親ぬ言し遺言のー聞かねーならのーあらにつち（生きてる間親には反対なことばかりしてきたので、今からでも、親が死んだあとからでも、親の言うことを、遺言は聞かないといけないのではないかと思つて）、わざとその川の側んかい墓造つてね葬つたつて。うん。それで、雨降りそうになるといけなると、また、あまーめーや（あそこら辺は）、澄れて、うちの親父は流されなかなあと、もう心配で、雨降りそうになると、蛙鳴くでしよ、ガクガクし。そういうことで鳴いておる。親ぬ言うことをね、生きてる間聞かないというと、死んでもそういうふうには、かえつて親不孝になるふうなこと。これ、戒めの話を小さい時ね、そういう話を・・・。

墓を造つてほしいと言つたのは、お父さんです。息子がね

「墓あまーんかい造くいびーがやー〔墓はどこに造りますか〕」

と言つたそうだよ。あんされー、とーうりがーいー所んかいでいーねー、また、やな所んかい造いるはじ。（そうすると、こいつがは、いい所にと言うと、また、悪い所に造るはず）。いつも親の言うことを反対のことはかりするからそれで、

「あ、川の側んかい造くれー〔川の側に造れ〕」

と。川の側んかい私墓あ造くるように。あんしゅんしえー（そうすれば）川の側じゃなくて、水の浸からないようないい所に作るだろうという考えさあね。あんされー（そうしたら）この息子は、

「あんしえーあんさびーさ（そういうのならそういたしましょう）」

ということで、亡くなつてから、さちえーあの一墓を造ろうとしたら、今からでもけー亡ち後ん、親ぬ言しえー聞かねーならんむんと（今からでも、亡くなった後からでも親の言うことは聞かないといけない）ということで、川の側に墓を造

つたら、大雨のときは、これ流される心配があるでしょう。それで、心配してね、いつも雨降りそうになるといって、蛙はガクガクして、一生懸命鳴くでしょ。そういうふうなことで、死んでから、親の孝行をしようとしたと。が、しかし結局は、生きてる間不孝なことばかりしたのは、死んだ後も不孝な結果になったと。いうふうなことでそういうふうな話だったね。聞かされたのはね。

平成二年八月三日 照屋京子・諾喜田綾子聴取 大川清子翻字 T159 A1

## ② アマガク（ガーク、ガーク）

アマガクんてい言ち、沖繩口さーに、アタビーぬ鳴ちーねーアマガクんち。ぐすーより、アマガクの話、色々あいびーしが、くぬアマガクの話、いっぺーうむさいびん。

昔、くぬアマガクんちやる者お、いっぺー親不孝者なてい、親ぬ言しえーむる聞かん。親ぬ、

「水汲りくー」

んでいーねー、潮汲りち、

「今日や豆腐すくとう、潮汲りくーよー」

でい言ねー、水汲りち、むる親ぬ意思んかい逆らてい、親不孝者なてい。いっぺーやなんじやり者やてーるふー

じー。

## 中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

アマガクと言つてね、沖繩の言葉では蛙が鳴くとアマガクと言う。皆さん、アマガクの話は色々ありますが、このアマガクの話は大変おもしろいです。

昔、このアマガクという者は、たいそう親不孝者で、親の言うことは全く聞かない。親が、

「水を汲んで来なさい」

と言うと、潮を汲んで来るし、

「今日は豆腐を作るから潮を汲んで来なさい」

と言うと、水を汲んで来るし、すべて親の意思に逆らう親不孝者で、大変いやな乱暴者であったらしい。

そのアマガクの親が年をとり病気になる時、親は、「このアマガクに自分の気持ちを素直に言うとは絶対に聞

うぬアマガクが、自分ぬ親ぬ、な、年いみそーち、病氣し、年いがたーなつていさるばーに、くぬ親ぬ、

「くぬアマガクが、やる通い言ねーじよーい聞かんくとう、な、くりんけーやる通い頼みーねー大事ないくとう、反対がんちかやーに、さんあいねーならんむん」。あんさーにアマガクあびやーに、

「とーなー私にんなー病氣ん強くなつてい、なくぬうちやるはじ。私が亡しーねー、川ぬ側んかい埋みていとうらしよー」

ち頼でーるふーじ。川ぬ側んかいでい言ねー、反対がんちかてい、上びんかい、山んかい埋みーるはじやくとう。

「川ぬ側んかい埋みていとうらしよー」

ち頼でい。あんされー、くぬアマガクやまた、なー親が元氣やる間全部親ぬ言しんかい反対がんちかてい、右んでいねー左、左でい言ねー右。潮んでいれー水、水んでい言ねー潮でい、むる反対がんちかてーくとう、な、一番終いぬくとうんりかーじんちよん、親ぬ言る通い守らんとーならのーあらにんでい。

「親ぬ亡しーねーでいち、川ぬ側んかい埋みりよー」んでいやぎーるむんぬ、親孝行今度ばかりじんち

いてはくれないだろうから、もう、これにはやつて欲しいことをそのまま頼むと大変なことになるので、反対のことを言わないといけない」と思い、そうして、アマガクを呼んで、

「もう私の病氣も重くなって、もう、近いうちに死んでしまふであらう。私が死んだら川の側に葬ってちょうだいね」

と頼んだようだ。川の側と言え、反対のことを言っている、上の方に、山に葬るはずだから、

「川の側に葬ってちょうだいね」

と頼んだ。そうすると、このアマガクはまた、もう親が元氣でいるうちはみんな親の言われることには反対のことばかりして、右といえ左、左と言え右、潮と言え水、水と言くと潮という具合にすべて反対のことばかりしてきたので、もう、臨終の時だけでも親の言われる通りのことを守らないといけないのでないかと、

「親が死んだら川の側に葬りなさい」と言われるので、親孝行と思つて今度ばかりでも親の言うことを聞いてあげよう」

と。それで親が亡くなると、親が言われた通りに川の側に葬ったようだ。アマガクはそうしたら、雨が降るたび

よん親ぬ言しちかな」

んでいち、あんさーに、親ぬ亡ちやくとう、親ぬ言る  
通い川ぬ側んかい埋みてーるふーじうりや。あんさ  
れー雨降いぬかーじ、川ぬ水ぬいっばいちるがってい、  
あんさ、うぬ墓んかいむる水ちるがってい。さくとう、  
くぬアマガクんでいる者お始めてい分かてい、

「あいえーな、私親ーなーまた水びたしなとーさ  
やー」

ち、雨降いぬかーじ、ガークー、ガークーんでいち、哀  
りそーんでい。あんさくとう、アマガクなてーならん  
どー、子ぬ達、そーいりよー。

## 四 (ガークーガークー)

いつも自分勝手に遊んでおるので、親の死に目になっても、行くこともできないという意味だね。が、親がもう亡くな  
ってしまつたら、もう、いつも雨ばかりなつてね、それで、雨が降りそうになつたらガークーガークーやつたらしいん  
で、

に川の水がいつばいになり、墓まで水びたしになつた。  
そうしたらこのアマガクはその時になつて始めて分か  
つて、

「ああどうしよう。私の親はもう、また水びたしになつ  
ているんだねえ」

と、雨が降るたびにガク、ガクと鳴いてつらい思いをし  
ているそうだ。だから、あまのじやくになつてはいけな  
いよ、子どもたちよい子にならさいね。

平成二年八月三日 宜保勝・宮平聴取 大川清子翻字 T 165 A 5

山里 伊佐安弘(明治四一年六月八日生) 白川

22 (ガークーガークー)

山里 伊佐安弘(明治四一年六月八日生) 白川

これはねえ、親不孝者の話だよ。

親がいくら病氣なつても来てくれない。この、蛙だけはね。その時に親が死んでしもうたから、そのときは、また心入れ替えて、親の言うことを信じてやったら、

「お前は、親不孝しておるから、お前はもう水の所で育ちなさい」

という神様からの命令を受けて。それから、雨の降るときはガークーガークーして鳴くという。

平成二年二月一六日 平藤美恵子・奥野雄昭郎・仲尾由美聴取 石川小百合翻字 T 182 A 4



## 12 犬の足

## ①

必<sup>かならず</sup>じ、あれ一前<sup>まへ</sup>かにてい、足<sup>あし</sup>上げてい小便<sup>せうべん</sup>するば一  
て一なり。片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>上げてい、小便<sup>せうべん</sup>すしえー。ちゃーしん、  
足<sup>あし</sup>あ三本<sup>さんぽん</sup>あてーるば一よー。あんさーに、とー、くぬ今<sup>いま</sup>  
香<sup>か</sup>炉<sup>ろ</sup>、仏壇<sup>ぶつだん</sup>ぬ前<sup>まへ</sup>ぬ香<sup>か</sup>炉<sup>ろ</sup>、

「いやーや、何<sup>なに</sup>処<sup>ところ</sup>ん歩<sup>あ</sup>かん、ちゃー居<sup>い</sup>どうそーくとう、  
いやー物<sup>もの</sup>から一本<sup>いっぽん</sup>えー取<sup>と</sup>りやーに、犬<sup>いぬ</sup>んかい付<sup>つ</sup>きらやー。  
いやーや何<sup>なに</sup>処<sup>ところ</sup>ん歩<sup>あ</sup>かんくとう」

うにーから、犬<sup>いぬ</sup>お足<sup>あし</sup>四本<sup>よっぴん</sup>なたんでいぬ伝<sup>でん</sup>え話<sup>わ</sup>聞<sup>き</sup>ちや  
るば一。うぬ小<sup>こ</sup>那<sup>な</sup>霸<sup>は</sup>先生<sup>せんせい</sup>から。

昭和五五年五月一八日

喜納弘子・岡田浩・新城悦子・鳥袋美奈子聴取

山城綾子翻字 T3A5

## ②

ウコールんでいしえー、線<sup>せん</sup>香<sup>か</sup>立ていーるウコールぬあ  
しえー。あれー、昔<sup>むかし</sup>えー、始<sup>はじ</sup>まいや、足<sup>あし</sup>あ四<sup>よ</sup>ちあたん  
でいよ。あんしが、片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>あ取<sup>と</sup>りやーに犬<sup>いぬ</sup>ん小<sup>こ</sup>んかい、うり

池原 又吉松八（明治三八年四月八日生）池原

必ず、犬<sup>いぬ</sup>は前<sup>まへ</sup>もつて、足<sup>あし</sup>を上げて小便<sup>せうべん</sup>するわけさあね  
え。片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>を上げて小便<sup>せうべん</sup>するさあ。たぶん、足<sup>あし</sup>は三本<sup>さんぽん</sup>しか  
なかつたはずよ。それで、もう、今の香<sup>か</sup>炉<sup>ろ</sup>ね、仏壇<sup>ぶつだん</sup>の前<sup>まへ</sup>  
の香<sup>か</sup>炉<sup>ろ</sup>に（神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>が）、

「お前は、どこも歩<sup>あ</sup>かない、ずつと座<sup>ま</sup>っているから、お  
前の物<sup>もの</sup>から一本<sup>いっぽん</sup>取<sup>と</sup>って犬<sup>いぬ</sup>にくつつけようね。お前はどこ  
にも行<sup>い</sup>かないから」

そのときから、犬<sup>いぬ</sup>は足<sup>あし</sup>が四本<sup>よっぴん</sup>になつたという伝<sup>でん</sup>え話<sup>わ</sup>を  
聞<sup>き</sup>いたわけ。この小<sup>こ</sup>那<sup>な</sup>霸<sup>は</sup>先生<sup>せんせい</sup>から。

登川 平田盛水（明治四一年六月六日生）登川

ウコールというのは、線<sup>せん</sup>香<sup>か</sup>を立てる香<sup>か</sup>炉<sup>ろ</sup>のことだよ。  
あれは、昔<sup>むかし</sup>は、足<sup>あし</sup>が四本<sup>よっぴん</sup>あつたそうだよ。だけど、  
片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>は取<sup>と</sup>って犬<sup>いぬ</sup>にあげたので、犬<sup>いぬ</sup>は足<sup>あし</sup>が四本<sup>よっぴん</sup>になつたわ

しえーくとう、犬小四ち足なとーるばーて。あんさくとう、ウコールからうんちえーむんしえーる足やくとうんでいやーに、うり、汚しーねー罰当たいたくとう、汚ちえーならんでいやー、片足あ上げていしつこすんでい。うぬ話や冗談話や、あたるばーて。

③

① 五徳からね、五徳からよ、一ちえー取やーに、四ちあたんでい、五徳は、足が四ちあたんでい。犬おー三ちどうあたんでいよー。あんさーに、あんしえー歩つち苦さんむんでい言やーに、五徳から、神様がてー、五徳から取やーに、犬んかい呉たんでい。五徳お動かんしえーやー。動かんぐとう、なー三ちしえーしむんでいやーに、あんさーい犬んかい呉たんでい。あんさくとう、犬お、  
「御神から、神様からうたびみそーちえーる足あ、上ぎりわるやる」  
んでいやーに、あんさーに小便しーくわーちえーならんでいやーに上ぎとーるばーて。

けさ。それで、ウコールからお借りした足だから、それを汚したら罰が当たるから、汚したらいけないといって、片足を上げてしつこをするんだって。この話は冗談話ね、あつたわけさ。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T 15 A 12

知花 宮里秀栄（明治四一年九月一〇日生）知花

五徳（の足は四本あつた）からね、五徳から足一つを取つたつて。犬は三本しかなかつたつてよ。それで、そんなでは歩きにくいからといって、神様がね、五徳から足を取つて、犬に呉れたつて。五徳は動かないでしよう。動かないから、もう三つでいいといって、そうして犬に呉れたつて。そうしたから、犬は、

「御神から、神様からいただいた足は（小便するときに濡らさないように）、上げんといけない」  
と言つて、そうやつて、小便かけてはいけないといつて（片足を）上げているわけ。

注 ①五徳・・・火鉢の中に置く、鉄またはせともの3本か4本の足のある輪型のもの。

昭和六〇年一〇月一三日 照屋寛信・山本啓子聴取 宮城昭美翻字 T 23 A 10

## ④

泡瀬第一 善久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

犬は、しっこするときは、片足<sup>かたあし</sup>上げてするさあね。これは小さい時にただ聞いただけであつてね、犬ぬ足<sup>いぬあし</sup>あ最初<sup>さいしょ</sup>おー三ちるやたんでいしがやー、くぬ五徳ぬ足<sup>ごとくぬあし</sup>あ四<sup>よ</sup>ちあたくとう、（犬の足は最初は三つだったそうだがね、この五徳の足が四つあったから）あれから一つ付けて、この犬に付けたから、この犬は、今しっこするときはまた、片足上げて、この足は汚<sup>よご</sup>したらいけないということ、やっているらしいよということ、ただ聞いたわけ。

だから、こんなのはね、私たちが小さいときに、ただ集まって、こんなやつたよと聞いたよ。これは短い話。このぐらしいしできないわけ。これは、夜、友達同志でやつた。

「とー、私<sup>わたくし</sup>ねーうっさ（はい、私の話はこれだけ）」

と言って、また、次は、

「いやーや何すが（あんたは、何を話すか）」

と言って、やるでしょう。いい話小せー（楽しい話会）というがね。

平成二年三月二日 豊岡早苗聴取 宮城昭美翻字 T 56 A 3

五徳はね、五徳の足は四本あつても、三本にしても別にかまわなけれど犬は、ちよつと三本ではかわいそうだからといって、一つ五徳からくれた。あんさーに犬いんさー小便せうべんしーねーや、貰かてーしるやぐとうんち、上あぎやーに小便せうべんすんでいーやーんち（それで犬は小便するときには、貰かつた足だからと、足を上げて小便するそうだよと）、これも例え話でないかな。本当の話かどうか知らんけど、これ貰かつたものだから、おしっこかけちゃいけないと。

昔は火鉢があつて、その火鉢に五徳というのがあつて、それに薬くすり罐かんかけてやりよつたのよ。だから、あれは三本（足）でもできるでしょう、こんなしてね。あれは足が四本あつて、あれの足から神様が、犬にくれたつて。だから、片足上げてしっこするといふんですが、あれもねえ、（これもこんなつてよう）といふが、これは嘘かも分からん。

平成二年七月六日 山城綾子・崎山用彰・栗国実・通事美香聴取 宮城昭美翻字 T 83 A 6

自分おれぬお祖母さんたーからーあらん（自分のお祖母さんからではない）。小那覇ブーテン（舞天）先生ていう、歯医者がいらっしゃつたつて。あの人がかつちの公民館で講演があつたときに聞いた話だけど。

犬は何で足三本しかなかったのかね。三本しえー不自由でしょう、歩けないわけさ。だから、この仏壇に、神様に、もう一本はお願ねがひしてあるわけさ。それから、神様は考かんえてからに、この香か炉ろの足は、昔は四本あつたつて。だからこれはもう、いつもこつちに座まつていただけだから、三本で大丈夫だから、

「一本はじゃあ、犬に上げよう」

つて。で、犬に上げたからさ、この犬は、もう足を貰かつて四本なつたといつてね。そしたら、しっこするときはこんな

してやるでしょう、片足を上げてこんなして。この足は神様から貰った、授かったもんだからね、濡らしてはもうたいへんって、いつもこんなして足上げて、濡らさないようにしているって。私もこれ、小那覇先生からの話、ただ覚えてるだけです。

平成二年二月一六日 平良真也・加島三史・香村夏子聴取 大川清子翻字 T 187 A 4

## ㊦

嘉間良 善久原ウシ（大正二年一月二五日生）嘉間良

あのう、御香炉は四本あるけれど、犬の足は三本だったね。してから、もう、片足ゲットゥー（びっこをひく）するさーね。だからこんなしていけないからというて、火の神の御香炉は足が四本あるから、あつちから取って、で、犬にあげたっていう話はあったね。これは神様が取ってあげたかねえ。あれから譲られたという話はあるけれど。そして、犬が小便するとき、片足上げてやるのは、あれは、神様から貰った足を濡らしてはいけないって。御香炉からもらった足だから。この話は誰からも聞かない、もういろいろ、何かのときに集まるさーね、四、五名も、五、六名も。そのときに話出たはずよ。冗談話からそれは出たはず。友達同志が集まったときにね。

注 ①火の神・・・沖縄に仏壇が普及する前から、家庭を守る大切な神様として台所に祀られてきた。石三個を鼎型に並べたもの。何か願うことがある場合は「仏壇」より「火の神」を先に拝む。

平成二年二月一四日 豊岡早苗・諸喜田綾子・稲嶺悦子聴取 照屋京子翻字 T 178 A 7

本当はあのう、御竈加那志<sup>①</sup>、火の神加那志<sup>②</sup>の足は四つあったって。今、三本になっているでしょう。犬の足が三本あったから、この御竈加那志<sup>①</sup>が見てからに、

「あんたはよく歩くのにね、三本でよくこんなに歩くのに、私はもう一本、多いからね、私はあんまり歩かんから、私のもから一本分けてあげるから、四本になしなさい。」

と言って、御竈加那志<sup>①</sup>から一本は買ったから、「犬は」おしっこするときにも、

「思、思があるから」

と言ってね、濡らさないようにして、片足は上に上げてしっこするって。この話は聞いた。これもお父さんから聞いた。

注 ①御竈加那志・・・ここでは香炉のこと。加那志は、敬意を表す接尾辞。

②火の神加那志・・・火の神。神繩に仏壇が普及する前から家庭を守る大切な神様として台所に三個の石をよりましたとして祀られてきた神。加那志は、敬意を表す接尾辞。

平成三年五月二三日 宮城昭美・香村夏子・謝敷勝美・石川小百合・大川清子・照屋京子聴取 石川小百合翻字 T189B7

買った足だからね、大事にしよう言うて、片足上げておしっこするそうです。そういう話。神様からいただいたねえ、あのう、いいことでもしたんだらう。で、四本になった。

「あんな歩きにくいだらう」

と言うて、神様が四本足にしたからね、

「これは神様からいただいた足だから大事にしよう。濡らしたらいけない」

て、こうして片足は上げておしっこするだろう、今でもさあ。そういうまあ、おとぎ話、おもしろいお話があるんだけど。この足は、お釜からんでい言たんや、んちゃ（うん、そうだ）。お釜はね、三本足よう。ね、あれは三本でも立つからね。あれから取って付けたとか何とか。それは、はつきり覚えてないけど。何か、はつきり分らないよ。気にしないけど。何からか取って付けたそうだよ。

平成二年八月一九日 山城綾子・安次嶺寿・崎山須麻子聴取 香村夏子翻字 T 103 A 5

## 10

胡屋 當真アキ（明治四三年七月一〇日生）泡瀬

犬は三本足であつたてな。これは昔話、みんな知っているよ。三本足であつたいゆてね。犬は、昔、三本足であつたそうだからね。このウカマガナシー（お竈様）は四つあるだろう。この火の神の神様（香炉の足）は四つこう、立つてゐるだろう。それ三つにしてね。犬は、

「三本では不便だから、もう一本足を出して下さい」と言つて、神様に頼んだら、

「そんなら、火の神のあの（足）四つあるのは取つて、火の神は三つにして、あれ動かんから、あんたの足につけようねえ」言ゆてね、神様が（犬の足を）四つ足にしたそうだよ。それでね、今でも電柱の前でおしっこする時には片足上げるだろう。今でも、おしっこする時には犬は片足上げるよねえ。あれは、神様からね、譲ってくれた（足に）おしっこでもかけたら、失礼になる言うて、それで、理屈でそういうてゐるかも知らんけど。そういう話が、犬が片足を上げてしっこするのは、神様から貰つた足、しっこちよつとでもたらしたら、失礼になるいうてね、そうしてゐるんだあといつてね。そんなこともあるかなあ。

II

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

くぬ話ん、私が聞ちやしえー、<sup>①</sup>小那覇ブーテン（舞天）先生ぬ話。話の受け売り。

まーぬ家んけーん仏壇にあってい、仏壇ぬ前んかいやー必じ御香立ていーる御香炉ぬあいびーしが。くぬ御香炉ぬ足や三ちどうあいびーん。何故んち、うぬ御香炉ぬ足や三ちやがやーんでいる話やし。いっぺー面白いびーん。本当や御香炉ぬ足あ四ちあいびーたんでい。あんしが、神様んかい 頼まりやーなかい、くれー三ちなてい、ずーつと、なー、御香炉ぬ足三ちんち決まどーしが、くれー実えー、本当や、くぬ足や犬ぬ持ちよーびーん。

昔、御香炉ぬ足あ四ち、また、鳥や二ち、百足や百、字ん百んち書かっどーん、百足。ハブお足ねーん。うんぐとうし、神様ぬ決みてーしが、犬お足あ三ちあたんてい。あんさでー、くぬ犬ぬ足あ三ちさーなけー歩ち苦さぬ、ゲットウイ、ゲットウイし、なーいっぺーなす

この話も、私が聞いたのは、小那覇ブーテン先生の話。話の受け売りです。

どこの家にも仏壇があつて、仏壇の前には必ず線香を立てる御香炉がありますが、この御香炉の足は三つあります。どうして、その御香炉の足は三つかねえという話ですが、とつても面白いです。本当は御香炉の足は四つあつたそうです。だけど、神様に頼まれて、これは三つになり、ずうつと御香炉の足は三つと決まっているが、これは実は、本当は、この足は犬が持つております。

昔、御香炉の足は四つ、また、鳥は二つ、百足は百、字も百と書かれてい、百足は。ハブは足はない。こんなふうには、神様が決めてあるが、犬の足は三つだつたつて。そうしたから、この犬の足は三つでは歩きづらくて、ゲットウイ、ゲットウイしてもうとつても不便で、もう、何をして、走つても、もう三つしか足がないから、みんなもう、歩きづらくて不便で、こんなではいけないと



くえーつち、なー、何しーわん、走えーしーわん、なー  
三ちる足ああくとう、むるなー、歩ち苦さぬすくえー  
さーに、かんしえーならんむんでいやーに神様ぬ前んか  
い行ちやーに、

「えーさい神様、なー、私ねー犬るやいびーしがなー、  
物ん自分くるしがりてい食みわるやい、なー、あまはい、  
くまはい、歩きんしわるやしがなー、だー、うぬ足ん三  
ちるやいびーくとう歩ち苦さぬ、かんしえーないびらん  
くとう、ちやーがら足一ちえー多くなちきみそーらん  
がやー」

神様んかい御願えしえーるふーじ。あんされー、神様ん、  
「あい、やつさーやー。だー、いやー物おぼっべーてい  
足三ちる作てーしが、んちや、いやーが仕様見じーね、  
いへーどうーぐるさつさーやー。あんしえーうれー、ん  
ちや、考えていとうらしえーやるむんなー。待っち  
よーきよー」

でいやーに、あんさーに一番足ぬ多さる、くぬ百足、此  
れ①大和口しえー百足んでい言やびーしが、くり百足呼  
びやーに、

「えつ、百足よー、いやーや、うさきーなー足持ち  
よーくとうや、一ちえー分きらんなー」

思つて神様の所に行つて、

「もしもし、神様、私は犬であります、食べ物も自分  
で工面して食べないといけないし、あつち行つたり、こ  
つち行つたり歩かないといけないが、ほら、この足も三  
つですから歩きにくくて、不便で仕方がありませんので、  
どうにか足を一つ多くしてくれませんかえ」

神様にお願ひしたようです。そうしたら、神様も、

「ああ、そうだねえ。もう、あんたのは、間違えて足を  
三つしか作つてないが、そういえば、あんたの歩き方を  
見たら、少し歩みにくそうだねえ。そんならこれは、う  
ん、考えてあげないといけないねえ。待つていなさい  
よ」

と言つて、そうして、一番足の多い、この百足に、これ  
は大和口では百足と言いますが、この百足を呼んで、

「おい、百足よ、あんたは、こんなになくさん足を持つ  
ているからね、一つは分けてくれなにかねえ」

つて、神様が頼んだから、この百足はまた、

「いや、違いますよ。私はこれだけあつて保つて歩ける  
んですから、その一つと言えども譲れませんよう」

と、断られてしまつて。それで、あれにもこれにも、神  
様は熱心に頼んだようだが、もうみんな、

んでい、神様が頼だくとう、うぬ百足えーまた、

「あつ、あいびらんどー、私ねーくっさーありわる、保ちやいびーくとう、うぬ一ちやらんでーまん譲ららんどーさい」

ち、けー断らつてい。あんさーに、ありんけー、くりんけー、いっべー神様や頼でーるふーじやしが、な一音、

「あつ、うれーな一別事お聞ちん、くり聞からんどーさい」

んち、誰ん合点さん。あんされー、神様ん困てい、

「ちやーさるむんがやー」

んち、とるるばてい、考えとーたんでい。自分ぬ目ぬ前んかい居る御香炉ぬ立っちしよーし、けー見ちやくとう、「くれー足あ四ちあしが、くぬ、御香炉んちやるむのー、ぬーただ、私前んかい立っちやるまでいるやる。まーんかい歩ちんしゃん。とーひやー、くりやさ」

んでいやーに、

「えー、御香炉よー、いやーや、歩ちんさんあい、用事でいちんねーらん、うまんかい立っちやる、うまちやー立ちどうやくとうやー。いやー足や、別に四ちならんとー、ならん筈やくとう、三ちしんしむる筈やくとう、

「ああ、これはもう別のことは聞けても、これはできませんよう」

と言つて、誰も合点しない。そうしたから、神様も困つて、

「どうしたものかねえ」

と、ほんやりと考えていたつて。自分の目の前に居る御香炉が立っているのが、目にとまったので、

「これは足が四つあるが、この御香炉というのは、もうただ、私の前に立っているだけだ。どこにも歩かない。よし、これだ」

と言つて、

「おい、御香炉よ、あんたは歩くこともないし、用事といつてもない、ここに立ったまま、ここにずつと立っているだけだからね、あんたの足は別に四つなくてもいいはずだから、三つでもいいはずだから、一つは譲らないねえ」

つて、神様が言ったから、御香炉は、

「はい、私はもう何処にも行きません。ただ、そこにもう、立っているだけですから、よろしいですよ」

と言つて、そうして、心安く合点したので、

「ああ、御香炉よ、ありがとーね」

「ちえー譲らんやー」

んでい、神様ぬ言ちやくとう、御香炉おー、

「うーん、私ねーなー何ん、何処んかい行ちやびらん。

よーん、其処んかいなー立つちゆる、立ちるやいびーく

とう、ゆたさいびんどー」

んち、あんさーに、なだやしく合点さる為なかい、

「とー御香炉よー、ありがとうやさ」

んち、くぬ御香炉ぬ足取やーに犬んかい呉てーるふーじ。

あんさー、御香炉お三ちさーなかい濟まち、くぬ犬お、

うぬ御香炉ぬ御陰に足一ちえー多くなやーに、うんに

んから、じこー歩ち易くなてい、いー塩梅し。やしが、

「神様から貰てーる大切な足やるむん」

ち、おしっこ、小便する度に片足上げてい小便し、あん

さーにちやー、神様ぬ恩義表ちよーるふーじーやんで

い。うんにんから、犬おー小便するかーじ足あさぎー

んち、決まとーるふーじーやいびん。

注 ①小那覇ブーテン・・小那覇舞天。小那覇全孝。

②ハブ・・・沖縄に分布する陸生毒蛇のうち、ハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。

③大和語・・・大和は、沖縄から日本本土をさすことば。大和語とは、日本本土で使われている言葉をさす。

と言つて、この御香炉の足を取つて、犬に呉れたようだ。

そうして、御香炉の足は三つで充分で、犬は、この御香

炉のおかげで足が一つ多くなつて、そのときから、とつ

ても歩き易くなつて、いい具合になつた。だけど、

「神様からもらった大切な足だもの」

と言つて、おしっこ、小便するたびに片足を上げて小便

して、そうしていつも、神様の恩に感謝を表しているよ

うだ。そのときから、犬は小便するたびに足を上げるよ

うにと、決まっているようであります。

あぬ犬ぬ話やよー。昔えー、あんすくとう、ある人ぬ話、昔人おー、うれー、全くあねーあらんたる筈やし、犬ぬ足あ三ちるあたると。あんし、そーたくとう、今度お、あぬ仏壇ぬ御香炉は四ちあたとんと言つておりますねえ。あんさくとう、うぬ犬小ぬ、そーいり犬小なたくとう、

「あーな、うれー、私ねー三ちしん立たたりしが、犬お歩きわるやくとう、四ちあるえーかる、一ちえーうりんかい呉れー」  
らんち、呉たしが、四本なつたという話やたるばーてー。

平成二年二月一四日 平藏美恵子・仲宗根広恵・大川清子聴取 大川清子翻字 T169 A7

笑い話みたいになるんだが、犬小やしっこする場合に、片足上げてやるでしょう。なぜ、「ぬーんち、あんぐとらーし小便すが、いやーや分かいいみ（どうして、あんなふうにしっこするか、あんだ分かるか）」と言われてね。これはね、犬はね、昔は足が三本しかなかったって。それで、神様にね、

犬の話はね、昔、ある人から聞いた話。昔の人の話では、これは全くそうではなかったはずだが、犬の足は三本だったということだけ。それでも、そのようにしていたらしいが、今度は、あの仏壇の香炉は足四本あつたと言つておりますねえ。そうしたから、その小犬は利口な犬だったんで、（香炉）が  
「これはもう、私は三本足でも立てるが、犬は歩かないといけないから、四本ないといけないから、一つはこれにあげなさい」  
と言つて、（犬に足を一本）呉れたので、四本なつたという話だったわけ。

「私はもう歩くのが大変好きなんだけど、足が二本しかないからね、大変不便だと。だから何とか、他の動物みたいに、牛や馬みたいに四つの足が欲しいんですけど」

と、いつもお祈りしたわけさ。

そしたら、神様が降りて来てね、

「四つの足、あと一本欲しいと言ったんだが、なかった」

と言ったんだけど、

「なーちえー是非欲しいびっさー（もう一つは是非欲しいですね）」

と言ったら、

「うん、じゃあ、あんしえー相談さーなかい、なーちえー、いやー足植ていとうらさやー（そんなら相談して、もう一つ、あなたの足を植えてあげようね）」

と、いうことで、ウコール（御香炉）よ、仏壇の前にあるウコール、あのウコールを呼んでね、

「ウコールよ、いやーや、年かから年中トートーメーぬ前んかい居ちるうるむんや、足あ四ちなー入り用あらのーあらに

（御香炉よ、あなたは年かから年中、仏壇の前に座って居っているから、足は四つは必要ないんじゃないか）」

と言うたらね、

「ぬーがさい（どうしてですか）」

ちゅつたらね、

「うん、実え、あぬ夫が歩くのに不便起こっているから、あと一本足が欲しいと言った」

「あんしー、ちやーさびーがてー（そんなら、どうしますか）」

「いやーむん足ーちえー、うりんかい譲らんない（あなたの足を一つは、これに譲らないか）」

んちやくとう（と言ったから）、

「うんじゅがあん言みしえーるむんぬ、私ねー、なー、どーしえ歩かん、トートーメーんかいちやー居ちるうるむんぬ、

足あ三ちしゆたさいびーるんしえー、一ちえー犬んかいさぎれー(あなたがそうおっしやるなら、私はどうせ歩かないで、仏壇にいつも座っているんだから、足は三つで十分ですから、一つは犬に差し上げて下さい)。

いうことで、ほんで、ウコールから一本足を引っこ抜いてね、犬にあげたって。それで、犬は今もって、神様からいたたいたね、ウコールからいたたいた清らかな大事な足だから、ということ、おしっこする時に濡らさないように、片足を上げておしっこをするというふうなことになる。それで、ウコールは今、足が三本しかないんだよ。ウコールは足は三本しかない。が、犬は四本なっている。それで、その足を大事にするために、おしっこする時は足を上げるって。

平成二年八月三日 照屋京子・諸喜田綾子聴取 宮城昭美翻字 T159 A 2

14

諸見里 宮島真良(大正四年十一月九日生) 諸見里

今の御香炉は、(足は)三本しかないでしょう。あれは元は四本あったらしいね。だがよ、この犬は三本しかなかったでしょうね。不便利だからという意味で、御香炉の御神かねー、それが一本あげて、犬は、これにしっこかけちゃーいかなんという意味で、こう(片足を)上げるといふ話は、ときどき耳にしたことあるねえ。(犬の足は)御香炉から貰ったというて。

平成二年八月一日 平蔵美恵子・津嘉山朝昭・平良美夏・新城真恵聴取 香村夏子翻字 T105 A 6

15

山里 伊佐安弘(明治四一年六月八日生) 白川

(犬の足は)まあ、三本では、歩くのも不自由だからと思って、線香を立てる御香炉ね、御香炉(の足)を一本貰った

ら、四本の足になったと。それで、その線香立てから貫った足を、もう、濡らしたらいかないといって片方（の足）を上げて、おしっこはやると。ただ、それだけしか分からない。御香ごかうに線香立てるでしょ。あれから、これは取つたらしい。

平成二年八月二日 平藏美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 7

## 13 年に何回

①

あぬよー、昔御神んかいや、

「牛え、幾月、馬あ一年」

でい言ち、うぬ吟味言い渡しぬあてーぎさんてー。あん  
さくとう、馬ぬ一年なたくとうよー、なーくさみち、

「一年、一年に、私ねーしみるい」

でい言やーに、あんさーにくさみちやーに、暴りてーる  
ふーじてー。あんさくとう、丁度、ばんじ暴りやーに、  
逃んぎーによ、

「人間のーさい、人間のーさい」

ち追てい行じえーるふーじ。あんさくとう、

「人間のーなー、いちやていんしむさ、いちやていんし  
むさ」

でい言やーに、あんさー、いちやていんしむんでい。

年に何回やしえーやー。うりが、馬あ一年なとーる  
ばーてー。一年に一回ないるばーやつさみやー。あ  
んさくとう、なー馬ぬ暴りてーるばーてー、くさみち  
やーに、あんさくとう、

知花 宮里秀栄（明治四二年九月二〇日生）知花

あのね昔、神様がね、

「牛は幾月、馬は一年」

と言つて吟味、言い渡しがあつたらしいさあ。そうした  
から、馬は一年に（一回）なつたから、もう怒つて、

「一年、一年に一回私はさせるのか」

と言つて怒つてね、暴れたみたい。そうしたから、ちよ  
うど、馬が暴れている最中、（神様が）逃げまわつてい  
る時によ、

「人間はどうしますか、人間は」

と言つて、神様のあとを追いかけて行つたみたい。そう  
すると、神様は、

「人間はもう、いつでもいい、いつでもいいさ」

と言つて、それから人間はいつでもいいって。

年に何回でしょう。これが、馬は一年なっているわけ  
さ。一年で一回だけできるわけさあね。そうしたら、馬  
が怒つて暴れているわけさあねえ。ちようど、その時に、  
「人間はいつやるか、人間は」



「人間のーさい、人間のーさい」  
し、追てい、御神ん追てい行じやくとう、  
「いちやていんしむさなー、いちやていんしむさ」  
んち。あんさーに、いちやていんしむんでい。

と言って、(人間が) 神様を追いかけて行くと、  
「いつでもいいよ。もう、いつでもいいよ」  
と言われたので、いつでもよいことになった。

昭和六〇年十月一三日 照屋寛信・山本啓子聴取 上門博之翻字 T 23 A 18

②

神様が、年に何回かを決めていた時、最後に馬が行ったらね、一年に一回と回数減らされてね、

「それじゃあ」

と言って怒って、それで神様蹴ってね。その後、人間が行ったら、

「もう、勝手にしなさい」

と言ったって。それで人間は自分勝手に自分らで(やっている)。

平成二年二月一六日 上門千賀子・森章吏・諸喜田綾子聴取 照屋京子翻字 T 185 B 3

南桃源 山内盛福(大正二年九月二五日生) 南桃源

## 14 猿の赤尻由来

エーキン人ぬやー、稲え植たくとうや、貧乏者ぬやー、  
「うぬ稲えちやーし植たが、いったーむんゆかとうるむ  
ん」

でいちゃぐとうやー、

「うぬ米種え、炒りちからや、炒りちからや植りよー」

でい、貧乏者んかい、エーキン人ぬ、りくさし言ちきた  
ぐとうや、さくとう、

「やーん」

うぬ、米種え、炒りちえーぐとう、みーらんしえー。憎  
さしや、あんし、うぬ貧乏者ぬや、恨み持っち、うぬ  
門ぬやマイイサー、マイイサー焼ちやーいや、うぬ貧  
乏がどー、恨みしマイイサー焼ちやーいや、

「いやーや、うぬ石、石んかい登りよー」

でちゃぐとうやー、あんさーに赤まい猿なとーんでい。

注 ①米種え・・・稲の種。

②マイイサー・・・黒い固い石で形の丸いもの。(和名・微粒砂岩?)

高原 長峯シズ (明治四五年三月二〇日生) 高原

金持が稲を植えたらね、貧乏者が、

「その稲はどのようにして植えたのですか、あなたたち  
の稲がよく実っているようだが」

と尋ねると

「米種は炒ってから、炒ってから植えなさいね」

と貧乏者に金持ちの人がずる賢しく教えたから、

「そうねえ」

と。だがその米種は炒ったので、芽がでないさあ。それ

で、貧乏者は金持ちを憎んで、恨みを持って、門の前に

ある真石、真石を焼いてね、(金持ちに)

「お前はその石に座りなさい」

と言ったから、それから金持ちは赤尻猿になったという。

平成二年三月一日 平蔵美恵子聴取 宜保勝翻字 T 43 A 10

15 蛙由来

□

高原 鳥袋シズ（明治四四年八月一〇日生）高原

蛙が、

「もらわしてちょうだい」

と言って神様に願ったから、真珠の玉をもらった。

真珠の玉を取ったら、また神様に、

「私はね、人間のように歩かせてちょうだい」

と言ったらね、

「はい」

と言って歩かしたら、目が後ろなってしまうて見えない。そして、まとも願って

「私は目が後ろになって見えないから、元の通りにさせて下さい」

と言ってね、この持っていた（真珠の玉を）飲んでしまったというおとぎ話。これだけ。

平成五年六月二日 宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 84 B 1

②

高原 島袋シズ（明治四四年八月一〇日生）高原

蛙が真珠の玉を持って、こんなに歩いて歩くでしょう。

「神様、私は立って歩くようにして下さい」

と言ったらね、これ持って歩いたらね、後ろしか目が見えないから、また、願って、

「元のように返してちょうだい」

と言ってね、こんなにしたという話。おとき話だけどね。

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T44A9

## 16 猫の名の由来

くりんかい、うぬ子丑寅んかい入らんしえーやー。

猫はガチマヤーなやーにや、

「いやー、猫や入りらん」

でいちよ、

「入りらん」

でい言ち、子丑寅んかい入らんでい。ガチマヤーな

やー、猫付きらとーるばーよ。

高原 長峯シズ（明治四五年三月二〇日生）高原

十二支に、「猫は」入ってないでしょう。猫は食い意地が張っているので、

「お前のような奴は入れない」

と言ってね、入れないということで十二支の中には入ってないんだって。ガチマヤー（食いしん坊）なので、マヤー（猫）と名前が付けられているわけ。

平成二年三月一日 平藏美恵子聴取 宜保勝翻字 T43A12

## 17 もの言う蛙

夫婦やし、妻え、いつべ、がちまやーなやーによ、夫ぬ仕事行じていからー、物煮ち食でいさくとうやー、夫ぬ米んとー、ちやーんねーらんあたいなーさくとう、うぬアタビーがうりが仕事する所うとーいや、

「いやー妻えー、物、物ぬかーじどう喰いんどー」  
ちや、言ちやくとう、

「ぬー何処うてい言がーやーち、さくとうなー、何処にん何ん居らんひるまさつさー」

んち、そーたんでいしが、あんさー、うぬ蛙がよー、  
「私や、いったー家んかい連れてい行き」

言ちやくとう、あんさー連れてい行じやんでい。あんさくとう、んちや、うれー物煮ちえー食み食みそーさやー、夫ぬ米んとー、な、全部無んてーういさーんち、そーたんでいるうりが話。

蛙が喋るわけ。夫んかい言ちよーるばーてー。  
「いやー妻えうんぐとうし、ふつちー、ふつちー物ど

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

夫婦がいてね、妻はとつても食いしん坊で、夫が仕事に出てから、物を煮て食べていたらしくてね、夫が帰ってくる時にはいつもなくなるぐらい食べるものだから、蛙が、夫が仕事している所に来てね、

「お前の妻は、食べ物のあるだけ食べているよ」  
つて言うと、

「なに、何処で言っているかねえ。どこにも何も無いが、不思議だなあ」

とそのまま過ごしていたらしいが。そうしたら、その蛙がね、

「私をお前の家に連れて行きなさい」

と言うので、蛙を家に連れて行つたつて。そうしたら、ほら、これは、物を煮ては食べ食べしているから、夫が帰つて来るまでには、全部なくなっていたりしていたんだつて。そんなことがあったという話。

蛙が喋るわけ。夫に言っているわけさ。  
「お前の妻はこんなして、いつも、しよつちゅう、しよ

う煮ち食いんどー。いやーが来んとうねー、無んしが、あれー、あり一人さーに食どーんどー」

んでい言ちさくとう、あんさーに、うれーやー、

「私すぐ、いったー家んかい連れてい行けー」

雨だいうとーてい、ちゃー喋たんてい、あんさーに。

うぬあんさーい女おうり煮ち食みーにん、うりが喋ぐ

とうや、人ぬ喋とーんてい、人お居らんだあくとう、

喋とーんちえー分からんしえーや。あんししやたさ。あ

んさーうぬ夫ぬあとーみーあきたんでいさんてい。

二、三カ月前の農協からくる本に載っていたよ。

つちゅう物を煮て食べるんだよ。お前が来るまでになくなるのは、あれ一人で食べているんだよ」

つて言つた。そうして蛙はね、

「私を、お前たちの家に連れて行きなさい」

（といたので、連れていくと）いつも軒下ですつと喋つ

ていたんだつて。そうしたら、女が食べ物を煮て食べる

時もその蛙が喋るのでね、人が喋っていると想つたら、

人はいないので、喋っているのが何か分からないさあね

え、そんなだつたつて。それで、しまいには、その夫が

見破つていたんだつてさ。

平成二年七月六日

山城綾子・栗国美・通事美香・崎山用彰聴取

上門博之翻字

T 83 A 13

## 18 おろかなロバ

馬小んかい塩乗しやーに、海渡てい行ちゆたんでい。  
したくとう、うぬ、馬小や、りくちさーにや、

「なー、あんし重さるむん」

んでい、ちちんちやくとうや、うぬ塩お全部溶きたく  
とうや、軽くなとーしえーやー。

次に乗してしえー、草鞋やたんでい。草鞋いっばい  
乗しやーに歩かちやくとうや、くぬ間海んかい浸かた  
くとうや、浸かたくとう軽くなとーるむんでいやー、  
うぬ馬小やまた、つい居やーにさくとう、重くなてい。  
草鞋えやすんくわい、水吸うしえー、あんさーにや。う  
んぐとう、こんなのはね、幾らでもあれがあるはずよ。

平成二年七月六日

山城綾子・栗国実・通事美香・崎山用彰聴取 上門博之翻字 T 83 A 15

泡瀬第一 善久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

馬に塩を乗せて、この海を渡って行きよったつて。す  
ると、この馬はずるがしこくてね、

「もうこんなに重いのに」

と、座り込んでしまつたらね、この塩が全部とけたので、  
軽くなっているさあね。

次に乗せたのは、草鞋だつたんだつて。草鞋をいっば  
い乗せて歩かせたからね、この前は、海に浸かつたら軽  
くなつたからと思ひ、その馬はまた、つい、（同じよう  
に海の中で）座り込んだので重くなつた。草鞋は潮を吸  
うし、水を吸うでしょう、こんなふうだね。それでね、  
こんな話はたくさんあるはずよ。



## 19 酒の始まり

山内 内田清栄（大正一〇年四月二五日生）

木の根っ子の株ですよねえ、まあ古ぼけた木の根っ子の穴みたいになった所ですわね、そこに、木の实を持って来て蓄える習性の猿がおったと。ところが、その猿が蓄えたその実が、日にちが経つに従って醗酵（かじょう）するんですね。そして、甘味が醗酵して、お酒に変化したと。それを嘗（か）めているのを見て、人間が近づいてみると、芳（かほ）しい臭（におい）いもするし、嘗（か）めたら、いわゆる酒の、果実酒の味だったと。それから、

「あはー（ふーん）、果物使ってこういうふうに作れるんだなあ」

と言って、お酒を発明するようになったと。その話は聞いたことある。戦前、戦中、戦前の話だけであるいは、当時の先生方の話だったのか、先輩の話だったかね。まあ、そこまでは覚えませんがとにかく、猿だと。猿から教わったという話は聞いたすね。

平成三年八月一七日 池原健・宮城昭美・宜保勝聰取 照屋京子翻字 T191A19

## 20 牛に化けた古い籠かご

牛マジン①ンと言ってね、牛が出てね、その牛マジンン見る人は、みんな、マブヤーという物を落として、病氣びやうきになつて。して、その、イチヌス②ーというのがね、

「これは、いけない」

と言つて、出てみたら、うんと来たらしいんですよ。

「また、来るな、本当に」

ちて。来たらね、それも、化け物まじなだから、それ、うんと頑張つて、重いもんだから頑張つて引張つて来て、自分の屋敷やしきに木にくびつておいたらね、古籠ふるかご、塗ぬりりも、塗ぬりりもけー剥むぎとーる籠かごうりやたんでい。昔むかしえ全部ぜんぶんな物もの化まじきーたんでい。

あんさーに、いったーが分からんはじやしがや、昔むかしん人ひとお鍋かまどの蓋ふたよあれ必かならじ、屋敷やしきに置おちゅたんよ、や。化まじき物もの入いねーならんでい。グシチ③し、かんし編あまつとーる鍋かまどの蓋ふたんちあしえー、シンメーナー④ピーぬむん。ありが古ふる。化まじけ物ものというののは門かどから入いつてきない。裏うらから入いつてくる。グシチ③と言いつてね、長く見えるウーガンジ

古謝 金城真良（明治四〇年七月一四日生）美里

牛が化けて、牛マジンンというのがいたがね。その牛マジンン見る人は、みんな、マブヤーという物を落として、病氣びやうきになつた。イチヌス②ーというのがね、

「これはではいけない」

と言つて、外とちに出てみたら牛マジンンが来たらしいんですよ。

「本当に来るなあ」

と言つていたら来た。それは、化け物まじなだから、重いので頑張つて引張つて来て、自分の屋敷やしきの木にくびつておいたらね、塗ぬりりも剥むぎてしまつた古い籠かごであつたんでい。昔むかしはみんな、そういうものは化けたんでい。

それに、あなたたちには分からないだろうが、昔むかしの人は、鍋かまどの蓋ふたを必ず屋敷やしきに置いていたんだよね。化け物まじなが入いつたらいけないといつて。すすきで、このように編あまれている鍋かまどの蓋ふたがあるでしょう、シンメーナー④ピー（四枚鍋よっぺい）の蓋ふたの古いもの。化け物まじなは門かどからは入いつてこない。裏うらから入いつてくる。グシチ③と言いつてね、長く見えるウー

ヤー、ありが葉っぱで、竹でこうして巻いて作りよったんだ。そんなもんだ。

ガンジャヤーの葉っぱで、竹でこうして巻いて作っていたんだ。そんなもんだ。

注

① マシムン・・・マシムンは妖怪や幽霊などのたぐい。得体の知れない恐ろしいもの、不思議なもの、あるものが外観を変えたものをいう。ときに、危害を加える。牛マシムンとは牛の化け物のこと。

② イチヌス・・・首里に住んでいた人で、化け物を退治することができた。

③ 糞・・・遺体を納めた棺箱を墓まで運ぶ朱塗りの輿。

④ シンメーナービ（四枚鍋）・・・半炊きなどに用いた丸底で円錐状の鍋。家庭用鍋の最大のものである。メーは鍋の大きさをあらわす単位。1枚2枚とは、一定の鉄の塊を表し、その3枚あるいは4枚分の鉄で作った鍋と  
いうことであるらしい。因みに四メーは約28リットルの水が入る大きさ。

⑤ すすきでこのように編まれている鍋の蓋・・・方言ではカマンタという。藁や茅を編んで造った鍋の蓋で、四メー鍋の蓋として用いられた。話者のところでは、ウーガンジャヤー（和名：ヨシスキ？登川では唐ウージともいう）でも造られたと思われる。

平成二年三月一二日 典座範秋聴取 宜保勝翻字 T 64 A 13

## 調査日誌と調査協力者

昭和五五年度調査(五月一八日)

沖縄国際大学口承文芸学術調査団による沖縄市字池原・登川二字の調査。

### 【調査団長】

沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

### 【口承文芸研究会】

【池原】池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ・喜納弘子・岡田浩・新城悦子・鳥袋美奈子・花城洋子・小橋川生枝・大熊亨・西銘千恵美・渡慶次勲・仲宗根悦子・与那原早苗・佐渡山美智子・仲松庸尚・安里和子・川上

【登川】比嘉和男・崎原有美恵・崎晴一郎・富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・大本敬子・西江美智・湧川紀子・辺土名美智代・大城直樹

### 【美里中学校】

金城あつ子・緑間直美・安田啓子・上江洲リカ・幸喜愛

昭和六〇年度

沖縄市池原・登川・知花調査

【池原】七月/一日・八日・一八日・二三日・二九日

八月/九日

【登川】八月/二日・一九日・二六日

九月/二七日・三〇日・

一〇月/一日

### 【沖縄民話の会】

仲松庸尚

### 【編集事務局】

辺土名初美・宮城利旭・宮城昭美・金城茂雄・川崎義隆・仲松庸尚

### 【アルム経営】

真栄城栄子

【知花】九月/九日

一〇月/三日・一三日

### 【沖縄民話の会】

辺土名初美・仲松庸尚・安里和子・下田博美・照屋寛信・辺土名朝三・比嘉久・崎原由美子

### 【編集事務局】

島袋芳敬・辺土名初美・宮城昭美

【市民】

山本康八・山本啓子

昭和六一年度

沖繩市知花調査

〔知花〕七月／八日・九日・一〇日・一一日・一二日

八月／六日・七日

【編集事務局】

高江洲裕美・宮里信勇・宮城昭美

昭和六二年度

沖繩市知花・松本・美里調査

〔松本〕五月／二七日・二八日

〔美里寿〕六月／二二日

〔松本〕六月／二六日・二九日

七月／一日・七日・八日

〔知花〕七月／一四日

九月／一〇日

一〇月／二六日

【編集事務局】

桑江良秀・高江洲裕美・宮里純子・宮城昭美

平成元年

〔宮里〕一二月／五日

【編集事務局】

比嘉ゆり子・宮城昭美

平成二年度

第一次民話調査（沖繩市田美里地区調査）

(1) 調査団 沖繩市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団長 沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹事 沖繩市立郷土博物館

宮城昭美・比嘉ゆり子

沖繩国際大学

上門博之・宜保勝・山城綾子

③ 調査団員

ア 沖繩民話の会

宮城昭美・比嘉ゆり子・渡慶次勲・喜久山

政信・知花春美・村山友江・喜納弘子・仲

松庸尚・大城直樹・伊良皆八重子・比嘉

久・山岸信浩・赤嶺明美・島本要・与那嶺

礼子

イ 遠藤研究室

平敷美恵子・上門千賀子・豊岡早苗・謝敷

勝美

ウ 沖縄国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・

諸喜田綾子・平良真也・奥座範秋

エ 沖縄国際大学 国文学科学生

三年次 古堅利江子・山城直美・瀬底正

祥・當山政子

二年次 香村夏子・仲宗根広恵

一年次 飯田泰彦・石原由佳里・犬養憲

子・桃原笑美子

(3) 調査団日程及び内容

平成二年三月一〇日 調査団結団式

(沖縄市立郷土博物館文化センター三階)

司 会 沖縄市立郷土博物館

館長 山田義夫

団長挨拶 沖縄市口承文芸学術調査団団長

遠藤庄治

激励の挨拶

ア 沖縄市教育委員会

教育部長 稲嶺盛隆

イ 沖縄市老人クラブ連合会

副会長 川上盛友

ウ 沖縄市美里地区概況説明

郷土史研究者 池原秀光

(4) 調査期間 三月一日―一四日

平成二年三月一日 高原・大里・宮里・

美里寿

平成二年三月二日 泡瀬・泡瀬若松(第

一)・泡瀬睦(第

三)・古謝

平成二年三月三日 与儀・比屋根・東桃

原・吉原

平成二年三月一四日 東区晚・美里旭・明

道

第二次民話調査(沖縄市旧美里地区補足調査)

(1) 調査団 沖縄市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団 長 沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹 事 沖縄市立郷土博物館 宮城昭美

沖縄国際大学 宮里英樹・諸喜田綾子

ア 遠藤研究室

武嶋昭子・平敷美恵子・上門千賀子・豊岡

早苗・謝敷勝美

イ 沖縄国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・

諸喜田綾子・平良真也・奥座範秋・宮里英

樹・照屋京子・仲宗根広恵・稲嶺悦子・新

垣孝幸・森章吏・大川清子・与那嶺昭郎・

加島三史・香村夏子・栗国実・通事美香・

富平恵智子・石川小百合

ウ 沖縄市立郷土博物館

宮里信勇・宮城昭美

(3) 調査期間 平成二年七月六日

宮里・泡瀬・泡瀬第一・泡瀬第三・桃原・

高原・古謝・比屋根

昭和六〇年度

沖縄市旧コザ地区民話調査

〔園田〕一月/一九日・二七日

〔編集事務局〕

金城茂雄・宮城利旭・辺土名初美・宮城昭美

昭和六二年度

沖縄市旧コザ地区民話調査

〔園田〕七月/一七日・二一日・二八日

〔編集事務局〕

比嘉寛勝・上間和夫・宮里純子・宮城昭美

平成二年度

第一次民話調査（沖縄市旧コザ地区調査）

(1) 調査団 沖縄市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団 長 沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹 事 沖縄市立郷土博物館 宮城昭美

沖縄国際大学 上門博之・宜保勝・

山城綾子

③ 調査団員

ア 沖縄民話の会

宮城昭美・島本要・喜久山くに子・比嘉和男・伊良皆八重子・上田和子・新城真惠  
遠藤研究室

武嶋昭子・平敷美恵子・上門千賀子・豊岡早苗・富平恵智子・仲尾由美

ウ 沖繩国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・諸喜田綾子・平良真也・奥座範秋・宮里英樹・照屋京子・仲宗根広恵・稲嶺悦子・新垣孝幸・森章吏・大川清子・与那嶺昭郎・加島三史・香村夏子・栗国実・通事美香・謝敷勝美・石川小百合

エ 沖繩国際大学 国文学科学生

二年次 池原健

日本語表現法演習受講者

新垣登季子・新田尚子・有銘和江・泉克也・稲嶺道子・伊野波智美・伊波つばな・運天雪江・大城博充・大田判・荻堂剛・翁長利江・嘉陽田尚行・川満裕子・岸本かおり・俄間薫・金城奈緒子・久保田聡子・座嘉比卷・崎原さおり・崎山須麻子・瑞慶覧

(3) 調査団日程及び内容

優子・平良美夏・高吉直紀・高良陽子・玉城直子・田本かおり・知念美佳子・知念美千代・津嘉山朝昭・當眞篤・富永麻希・仲里香・野原恵・平田明子・普天間みどり・平安名邦裕・前田英一・宮城加代子・宮城幸子・宮城紀子・宮城正美・宮城美雪・宮里由美・米盛恭子・新屋むつき・喜瀬智美・安次嶺寿・知念小百合・比嘉玲子・田場美恵子・仲松節子・瀬底正祥・前田静華・桃原笑美子・翁長利江

平成二年八月一八日 調査団結団式

(沖繩市立郷土博物館 文化センター4階)

司 会 沖繩市立郷土博物館

館長 山田義夫

団長挨拶 沖繩市口承文芸学術調査団団長

遠藤庄治

激励の挨拶

ア 沖繩市教育委員会

教育部長 當眞哲雄

イ 沖繩市老人クラブ連合会



副会長 嘉味田朝興

ウ 沖縄市美里地区概況説明

郷土史研究者 比嘉貞信

(4) 調査期間 八月一八日―二三日

平成二年八月一九日 胡屋・諸見里・園田・

南桃原・セクター

平成二年八月二〇日 安慶田・久保田・照

屋・山内

平成二年八月二一日 越来・山里・室川

平成二年八月二二日

本調査 嘉間良・城前・住吉

補足調査 嘉間良・城前・安慶

田・諸見里・久保田

平成二年八月二三日

本調査 中の町

補足調査 越来・久保田・南桃

原・セクター・園田

① 团长 沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹事 沖縄市立郷土博物館

宮城昭美

沖縄国際大学

石川小百合・大川清子・香村夏子・

照屋京子

③ 調査員

遠藤研究室

武嶋昭子・平敷恵美子・上門千賀子・豊岡

早苗

遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・加島三史・崎山用彰・

諸喜田綾子・山城綾子・奥座範秋・宮里英

樹・平良真也・森章吏・栗国実・新垣孝

幸・石川小百合・稲嶺悦子・大川清子・香

村夏子・照屋京子・通事美香・仲宗根広

恵・与那嶺昭郎・謝敷勝美

## 第二次民話調査（沖縄市旧コザ地区補足調査）

(1) 調査団 沖縄市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

(3) 調査年期间

平成二年一月二四日 中の町・室川・園田・

久保田・胡屋・嘉間良

平成二年二月二五日 安慶田

平成二年二月一六日 城前・山里・越来・南

桃原・住吉

平成二年二月二一日 久保田

平成三年五月二三日 センター

### 第三次民話調査（沖縄市旧コザ地区補足調査）

(1) 調査団 沖縄市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団 長 沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹 事 沖縄市立郷土博物館

宮城昭美

沖縄国際大学

石川小百合・大川清子・香村夏子・

照屋京子

### ③ 調査員

遠藤研究室

武嶋昭子・仲尾由美

遠藤ゼミナール受講生

与那嶺昭郎・通事美香・加島三史・新垣孝

幸・石川小百合・大川清子・謝敷勝美・照

(3) 調査期間 平成三年八月一七日

屋京子・新垣良子・池原健・稲嶺留美子・  
犬養憲子・小橋川一・友利幸子・仲地香  
織・新垣純子・山城綾子・宜保勝・桃原笑  
美子

山内・山里・住吉・照屋

## 参考文献

- 『沖繩語辞典』 国立国語研究所編 大蔵省印刷局発行 昭和五八年四月三〇日
- 『角川日本地名大辞典 47 沖繩県』 竹内理三編 角川書店発行 昭和六一年七月八日
- 『沖繩古語大辞典』 沖繩古語大辞典編集委員会編 平成七年七月一〇日初版発行 株式会社角川書店
- 『図説 日本島名由来辞典』 菅原浩 柿澤亮三著 柏書房株式会社発行 一九九三年三月二五日
- 『仲里村史第四卷 資料編3 仲里の民話』 仲里村役場 平成七年八月一日発行
- 『よなぐすくの民話』 与那城村教育委員会発行 平成元年三月三一日
- 『北中城の民話』 北中城村教育委員会発行 平成五年三月二〇日

## おわりに

「昔ばなしをお聞かせ願えませんか」と市内の古老に呼びかけて、方言による語りの記録作業に着手してから二十年の歳月が経ちました。その間、昔ばなしを聞かせてくれる古老がめっきり少なくなり、聞き取り調査も困難をきわめてきております。かつては、どこでも聞くことのできた「雀孝行」の話でさえ、今では、とんと耳にすることがありません。

沖縄市教育委員会では、このような含蓄のある古老の語り口を後世に残すため、音声による記録はもちろん、これを文字化して広く市民のみなさまに読み継がれる本として発刊することになりました。

本書に収録された昔ばなしの語り手には、すでに物故された方もおられますが、テープに遺録された在りし日の声調は、時間を超越して聞くものを魅了してやまないものがあります。

このように、音声でなければ伝えることが難しい昔ばなしの領分を、あえて文字化し更に共通語対訳という形で本にすることは、多くの市民にそのおもしろさの一端でも読み取っていただけたらと考えたからです。本書が昔の先祖たちをしのぶよすがとなり、沖縄市の未来を創造するこころの架け橋になってくれることを祈念するものであります。

最後に、編集に際し貴重なご意見と援助を下さいました皆様に、厚くお礼を申し上げます。

むかしばなし(動物昔話)

沖縄市文化財調査報告書第23集

平成12年3月21日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行 沖縄市教育委員会  
編集 沖縄市立郷土博物館  
〒904-0031 沖縄県沖縄市字上地235-3  
☎ (098) 932-6882  
印刷 株式会社 沖産業  
沖縄市中央3丁目5番46号  
☎ (098) 934-0987